

ファカルティリンケージ・プログラム Faculty Linkage Program

社会的ニーズに直結した、多彩な「学びの場」

活動報告書

2019年度

中央大学全学連携教育機構

FLP 2019 年度 活動報告書の発刊に寄せて

2019 年度ファカルティ・リンケージプログラム「Faculty-Linkage Program」(通称 FLP)の活動報告書が、ここに完成しました。

FLP は、総合大学として確固たる実績と伝統ある中央大学だからこそ構築できる全学横断的な学修システムです。現在開講の 5 プログラム(環境・社会・ガバナンス、ジャーナリズム、国際協力、スポーツ・健康科学、地域・公共マネジメント)の担当教員は、中央大学に置かれるすべての学部並びに FLP の運営組織である全学連携教育機構から、それぞれの専門分野に応じてプログラム教育の担い手として構成されています。

学生諸君が所属する学部では学びきれない視点や活動を FLP は実践することを目指し、併せて、その結果をもって、さらに所属学部での勉学を向上させるという、FLP は、まさに教育活動の相乗効果をも期待した教育プログラムといえます。そのため、学生諸君が担当教員と最も近い距離で学ぶ「ゼミナール方式」を中心に教育活動が展開されています。

FLP の 3 年間では、所属学部で修得した内容の向上、FLP でのゼミナール方式による教育の実践と担当教員からの直接指導、ゼミ生同士のふれあいと切磋琢磨といったことを通じて、研究テーマの深化のみならず、全人格的な涵養も修めることができると申し上げます。

「FLP 活動報告書」は、学生と担当教員のこうした教育実践の記録です。

ここに表現されている内容は、ごく一断面でしかありません。この内容以上の教育的成果と学生諸君の達成感がこの冊子には無限に詰まっています。

ご高覧いただく皆様におかれましては、表現し切れない担当教員や学生諸君の思いに幾ばくかの思いをはせていただければ幸甚です。

改めまして、FLP に対し、なお一層のご理解とご支援を賜りたくお願いを申し上げます。

最後になりましたが、この活動報告書をまとめるに際し多大なご尽力いただきました関係各位への御礼をこの場をお借りして申し上げます。

2020 年吉日

中央大学全学連携教育機構
機構長 武石 智香子

目次

I. 環境・社会・ガバナンスプログラム	1
1. 設置の趣旨と教育の目的.....	1
2. 2019 年度演習科目担当者および履修者数	2
3. プログラムスケジュール.....	2
4. プログラムの活動.....	3
5. これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先.....	3
6. 演習教育活動.....	4
(1) 星野 智 (法学部・教授)	4
(2) 田中 廣滋 (経済学部・教授)	6
(3) 薮田 雅弘 (経済学部・教授)	7
(4) 西川 可穂子 (商学部・教授)	8
(5) 谷下 雅義 (理工学部・教授)	13
(6) 西田 治文 (理工学部・教授)	15
(7) 丹羽 雄一 (理工学部・助教)	18
(8) ハリスン、ブライアン (総合政策学部・教授)	20
(9) 盛田 富容子 (全学連携教育機構・兼任講師)	22
 II. ジャーナリズムプログラム	 23
1. 設置の趣旨と教育の目的.....	23
2. 2019 年度演習科目担当者および履修者数	24
3. プログラムスケジュール.....	24
4. プログラムの活動.....	25
5. これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先.....	25
6. 演習教育活動.....	26
(1) 鈴木 俊幸 (文学部・教授)	26
(2) 辻 泉 (文学部・教授)	27
(3) 松田 美佐 (文学部・教授)	29
(4) 市川 哲夫 (総合政策学部・特任教授)	31
(5) 松野 良一 (国際情報学部・教授)	36

(6) 村田 雅之 (国際情報学部・教授)	53
(7) 荻野 博司 (全学連携教育機構・客員教授)	55
III. 国際協力プログラム	59
1. 設置の趣旨と教育の目的.....	59
2. 2019 年度演習科目担当者および履修者数	60
3. プログラムスケジュール.....	60
4. プログラムの活動.....	61
5. これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先.....	61
6. 演習教育活動.....	62
(1) 小森谷 徳純 (経済学部・准教授)	62
(2) 中川 康弘 (経済学部・准教授)	64
(3) 林 光洋 (経済学部・教授)	68
(4) 清水 武則 (商学部・特任教授)	93
(5) 武石 智香子 (商学部・教授)	95
(6) 平澤 敦 (商学部・教授)	102
(7) 高橋 宏明 (文学部・教授)	106
(8) 新原 道信 (文学部・教授)	108
(9) 野宮 大志郎 (文学部・教授)	117
(10) 中迫 俊逸 (国際経営学部・教授)	118
(11) 伊藤 晋 (全学連携教育機構・特任教授)	119
(12) 稲葉 誠 (全学連携教育機構・客員教授)	126
(13) 佐々木 弘世 (全学連携教育機構・兼任講師)	128
IV. スポーツ・健康科学プログラム	136
1. 設置の趣旨と教育の目的.....	136
2. 2019 年度演習科目担当者および履修者数	137
3. プログラムスケジュール.....	137
4. プログラムの活動.....	138
5. これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先.....	138
6. 演習教育活動.....	139

(1) 村井 剛 (法学部・准教授)	139
(2) 中谷 康司 (経済学部・准教授)	144
(3) 市場 俊之 (商学部・教授)	146
(4) 小峯 力 (理工学部・教授)	148
(5) 加納 樹里 (文学部・教授)	152
(6) 布目 靖則 (文学部・教授)	156
(7) 小林 勉 (総合政策学部・教授)	162
 V. 地域・公共マネジメントプログラム	170
1. 設置の趣旨と教育の目的.....	170
2. 2019 年度演習科目担当者および履修者数	171
3. プログラムスケジュール.....	171
4. プログラムの活動.....	172
5. これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先.....	172
6. 演習教育活動.....	173
(1) 工藤 裕子 (法学部・教授)	173
(2) 鳴子 博子 (経済学部・教授)	177
(3) 山崎 朗 (経済学部・教授)	179
(4) 斯波 照雄 (商学部・教授)	183
(5) 根本 忠宣 (商学部・教授)	184
(6) 御船 洋 (商学部・教授)	191
(7) 佐藤 修一郎 (理工学部・教授)	192
(8) 天田 城介 (文学部・教授)	194
(9) 新原 道信 (文学部・教授)	205
(10) 黒田 絵美子 (総合政策学部・教授)	211
(11) 小林 勉 (総合政策学部・教授)	213
(12) 関 有一 (総合政策学部・教授)	221
(13) 堤 和通 (総合政策学部・教授)	223

I. 環境・社会・ガバナンスプログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

「環境・社会・ガバナンス」プログラムは、「環境」を中心に、社会の諸問題について広く取り組むことができるプログラムです。現代社会では、人間がよりよい生活を営むための経済や社会の諸活動により、行き過ぎた資源の利用が行われ、自然の浄化能力を超える環境汚染が拡大しています。これらの環境汚染や資源問題は、社会経済システムのグローバル化により、一層深刻な事態になりつつあります。

世界的な問題となっている地球温暖化を例に挙げると、今までの地球温暖化は、先進国の工業化により発生した二酸化炭素の排出が原因とされています。しかし、今では中国やインド、東南アジア諸国でも経済発展と共に二酸化炭素の排出量が増大し温暖化を加速させています。今後は、経済発展が見込まれるアフリカの国々でも同様の事態が予測されています。このように、世界経済が発展すると先進国だけの問題であったものが世界規模へ拡大し、発展途上国を含むより複雑で、深刻な事態へと変容しています。また、地球温暖化による気候変動は人間ばかりではなく、地球上に生息する生物すべてに広範囲に影響を与えており、確実に生態系を壊しています。自然科学による調査データがその事実を裏付けています。人間の生活基盤は、自然が機能的に働いてこそ得られる資源、いわゆる「生態系サービス」とそれらを支える生態系の維持のもとに成り立っていることを忘れてはいけません。我々の子孫が地球で存続できるかどうかは、我々の今後の行動にかかっています。地球環境を維持し、自然とその資源を持続可能な範囲で利用し、経済活動とのバランスをとっていく事が重要と考えられます。

地球温暖化の例を挙げましたが、我々が直面する環境問題はこのような世界的規模の環境問題ばかりではありません。身近な産業廃棄物や外来種などの多様な問題もまた地域における重要な環境問題です。環境汚染の防止と資源や生態系の維持への配慮が重要である点は、身近な問題であっても変わりません。こうした問題を解決するために、われわれの社会はどのような取り組みを必要としているのでしょうか。

現在の社会経済システムにおける主要なプレーヤーの一つは企業です。従って、その活動と環境との関わりは、企業の社会的責任 (Corporate Social Responsibility) といった企業統治の問題として捉える必要があります。また、住民は環境の単なる受益者ではありません。地域の環境問題を住民参加の視点から考えることも必要でしょう。

本プログラムは、こうした現実が生じている環境問題に対して、正しく問題をとらえ、アプローチすることができる人材の育成を目指しています。環境問題は、人間活動の総体がもたらす問題ですので、自然科学・社会科学・人文科学にまたがる学際的なアプローチが必要です。本プログラムでは、様々な分野の専門家が多様な角度から問題に取り組んでいます。担当教員は、履修者の興味に即した研究ができるように工夫し、理論的な研究、フィールドワークなどを含めて多彩な指導を行っています。「環境・社会・ガバナンス」プログラムは広い視野を持って、持続可能な経済社会の実現に取り組もうという意欲をもった学生の参加を期待しております。

2. 2019 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
1	星野 智	法学部	-	5	-	単独（B）
2	田中 廣滋	経済学部	-	2	-	単独（B）
3	森田 雅弘	経済学部	1	-	-	単独（A）
4	西川 可穂子	商学部	7	6	4	合併（A・B）/単独（C）
5	谷下 雅義	理工学部	6	4	4	合併（A・B）/単独（C）
6	西田 治文	理工学部	3	4	1	合併（A・B・C）
7	丹羽 雄一	理工学部	2	-	-	単独（A）
8	ハリスン、ブライアン	総合政策学部	-	-	2	単独（C）
9	盛田 富容子	全学連携教育機構	-	2	5	合併（B・C）
合計			19	23	16	

3. プログラムスケジュール

- 4 月 履修ガイダンス
学内活動（スプリングスクール・学内）
- 5 月 第一回部門授業担当者委員会
- 6 月 2020 年度募集に伴う総合ガイダンス
- 7 月 第二回部門授業担当者委員会
- 8 月 学外活動（サマースクール・石川県能登町）
- 9 月 2020 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
- 11 月 2020 年度募集に伴う選考試験
- 12 月 第三回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）
- 3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

①スプリングスクール

実施日： 2019年4月20日(土) 13:00～16:00
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス
実施内容： フィールドワーク
テーマ： 多摩キャンパスの自然を探検！キャンパスウォーク 2019

②サマースクール（公立鳥取環境大学との連携事業）

実施日： 2019年8月28日(水)～8月30日(金)
実施都市： 石川県能登町
実施場所： 鉢伏山・他
実施内容： フィールドワーク
テーマ： 能登の里山里海から持続可能な農山漁村を考える

③期末成果報告会（公立鳥取環境大学との連携事業）

実施日： 2019年12月14日(土) 13:20～
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7103 教室
実施内容： 各ゼミによる年度活動報告、鳥取環境大学・中央大学とのサマースクールについての報告

5. これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先

東北電力、トヨタ自動車、三井住友銀行、三菱東京UFJ銀行、住友信託銀行、三菱UFJ信託銀行、日本放送協会(NHK)、河北新報社、博報堂プロダクツ、リクルート、INAX、小松製作所、シャープ、東芝、住商スチール、住友重機械エンバイロメント、日立ビルシステム、富士ゼロックス、富士通、住友林業、日本電設工業、千代田化工建設、日本工営、住友化学、三井化学、凸版印刷、資生堂、イトーヨーカ堂、クオール、JTB 法人東京、エイチ・アイ・エス、小田急箱根ホールディングス、ヤマト運輸、東日本旅客鉄道、新日本有限責任監査法人、日本自動車連盟(JAF)、国家・地方公務員(農林水産省、公正取引委員会、会計検査院、北海道庁、東京都庁、埼玉県庁、岐阜県庁、日野市役所、習志野市役所など)、東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻、東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻、北海道大学大学院環境科学院生物圏科学専攻、上智大学大学院地球環境学研究科、筑波大学大学院生命環境科学研究科、慶應義塾大学法科大学院、中央大学法科大学院、中央大学大学院(経済学研究科、理工学研究科、公共政策研究科)など

(1) 星野 智 (法学部・教授)

FLP 演習 B

<テーマ>

環境政治とガバナンス

<授業の概要>

環境政治についての基本的な文献を購読することを通じて、各国および地球社会に生じている環境問題への取組を研究する。森林破壊、大気汚染、水質汚染、河川・海洋汚染、地球温暖化、オゾン層破壊、生物多様性喪失、有害廃棄物の越境移動などへの取り組みを考察し、そこでのガバナンスとレジームの構造を検討する。環境政治は、基本的には、環境破壊の歴史、グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルな領域での環境政策や環境運動、資源をめぐる紛争などを主な対象としている。授業では、これらの問題を取り上げる。

<活動内容>

今年度春学期、FLP 演習の星野ゼミ（3年）は、9月に中国の環境問題について実態調査に行く予定であるということを前提に、中国の環境問題全般について事前の予備研究を中心に実施した。具体的には、中国の大気汚染問題の現状については、PM2.5による汚染状況に関して北京市内では自動車は31%、石炭燃焼が23%などの割合となっている点、また北京における大気汚染の原因としては、野焼きや石炭を利用した暖房が挙げられる。中国政府の対策としては、憲法改正、政府機構の改革（環境保護部を生態環境部へ）、青空保護戦勝利3年行動計画（2018年）などの対応がなされている。中国における水資源問題に関しては、中国の食料輸入による仮想水水量、水資源に関する海外展開、水資源の利用状況、水資源政策、越境河川の管理、水資源開発プロジェクトについて取り上げた。

2019年9月3日～8日までは、中国の環境問題に関する実態調査を実施した。その内容は、水資源問題、南水北調政策、大気汚染問題、世界遺産の見学であった。北京の水資源に関しては、南水北調政策の結果として北京の深刻な水不足問題が多少とも改善されていることが聞き取りから判明した。北京の大気汚染については、調査日程の間、深刻な大気汚染に遭遇したことがなかったが、大気汚染が緩和傾向にある背景には工場の郊外移転、石油・天然ガスの利用割合の増加などがあるようだ。

秋学期については、学生の関心がある自由テーマで報告してもらった。学生の自由研究のテーマは、地下水の枯渇とその対策、緑化政策が導く都市の姿（ヒートアイランド現象）、生物多様性—多摩川の生態系の歴史—、SDGsを取り入れた自治体の政策、環境アセスメントの日本における現状で、このテーマで各自ゼミ論文を作成した。

尚、2020年2月24日～26日まで、合宿研究会を実施し、上記のゼミ論文についての合評会を実施した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2019年9月3日(火)～8日(日)

実施都市：北京市（中国）

実施場所：北京市内、清華大学キャンパス内清華苑

実施内容：水資源問題についての現地調査で、昆明湖と永定河を見学した。

大気汚染については、北京市内の大気状況、清華大学キャンパス内の清華苑の大気状況を観察、地下鉄など公共交通機関の利用、レンタル自転車の普及状況の見学、頤和園、天壇、万里の長城などの世界遺産の見学。

成 果：6日間という短い日程であったが、中国北京の水資源問題、大気汚染状況、公共交通機関の利用などを実施できた。また中央大学との協定校である清華大学キャンパス内の宿泊施設に滞在し、清華大学の学生との交流会を開くことができ、充実した調査・見学であった。成果としては、春学期に中国の環境問題についての予備研究を行ったこともあり、それを前提に実態調査することで中国の環境問題についての現状について自分の眼で経験的に知ることができたことが挙げられる。中国の環境問題については日本のマスコミで、大気汚染や水質汚濁などネガティブな映像が繰り返し報道されることで、深刻な状況という認識が一般的となっているが、実際的には環境政策が徐々に進み、一定の効果を上げている現状の一端を認識することができた。

(2) 田中 廣滋 (経済学部・教授)

FLP演習B

<テーマ>

環境と市場経済

<授業の概要>

グローバル化された経済社会のなかで地域および企業は持続可能性を実現しなければならない。この目標を達成するためには、公民のパートナーシップが効率的に実行されなければならない。本演習の目標は地域と企業が協働して持続可能な社会を実現するシステム設計を容易にする分析手法を習得することである。

グローバル市場において引き起こされた問題は単独の国家で対応することは、不可能な状況になっており、パリ協定などの国際的な国家間の協力の枠組みが必要になっている。地球規模の課題として環境問題の重要性は、温暖化問題だけでなく、資源や廃棄物など広い範囲のテーマにおいて認識されなければならない。本年度は、環境問題との関連においてグローバル市場のダイナミズムを特徴づける環境技術のイノベーションや企業の社会的責任の議論の基本的な考え方を学ぶ。

<活動内容>

田中ゼミは、ESG を実施している企業の実施報告書とこの活動を推進するための制度の事例を調査した。特にアクティビストと呼ばれるグループの存在に焦点を当てて、その役割を検証した。また、PRI (Principle of Responsible Investment) と Green Bond の区仕組みを理解するために国際金融の基礎的な勉強をした。

中国を含む新興国のグリーンボンドの発行額は 2017 年以降も著しい増加を遂げている。2019 年も国内発行額は 74% の増加で、世界全体の増加額は 31% であった (「日本経済新聞」2020 年 3 月 9 日)。2014 年に国際資本市場協会 (ICMA; International Capital Market Association) 定めたグリーンボンド原則 (GBP; Green Bond Principle) において、グリーンボンドと主張できるボンドにある程度の枠が定まった。この GBP の規定が大枠だけを示すことがあり、細目を明確にする要望に応じて、2011 年に英国の金融 NGO である気候債券イニシアティブ (CBI; Climate Bond Initiative) が定めた CBS (Climate Bond Standard) も補完的に用いられる。2015 年に中国人民銀行は「中国のグリーンボンド発行に関する指令」を出して、グリーンボンドの発行に積極的に取り組んでいる。CBS はこれをグリーンボンドの情報として発表する。しかしながら、中国のグリーンボンドのガイドラインは CBS よりも甘いため、CBS に認められないケースも生じる。中国のグリーンボンドが多い背景としては、環境目的に限らない資金調達が含まれることと、政府による保証により発行を後押しするなど理由が考えられる。

(3) 藪田 雅弘 (経済学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

環境問題を経済学的アプローチで考える。

<授業の概要>

環境問題は、主に、公害問題などの外部費用の問題、自然環境などのコモンプール資源の管理問題、ならびに、景観問題などのアメニティ問題があるが、これらの問題について、経済学的にアプローチする。2 年時の演習 A では、まず、テキストなどに沿って、環境経済学の基礎を学び (以下の項目 (2))、次に、データを用いて、数量分析を行う分析手法を学ぶ (項目 (1))。そのうえで、リサーチペーパー作成を行う (項目 (3))。

<活動内容>

2019 年度の藪田 FLP の A ゼミは、主に次の三点に関して演習を進めた。

(1) 計量 (Stata) の学修/大学院での授業に参加。これについては、演習金曜日 5 時間目に加えて、6 時間目をサブゼミの形で行い、松浦寿幸 (2017) 『Stata によるデータ分析入門』東京図書を用いて、第 1 章から第 3 章 (「Stata による回帰分析」) までと、Research Paper の基礎のための学修として、第 4 章「パネル・データによる分析」を学修した。さらに、

(2) 環境経済学の基礎として、栗山 浩一、馬奈木 俊介 (2016) 『環境経済学をつかむ』有斐閣を学修した。内容としては、第 1 章 私たちの生活と環境：経済発展と環境問題／ごみ問題と循環型社会／地球温暖化問題、第 2 章 環境問題発生メカニズム：外部性と市場の失敗／共有資源の利用と管理／公共財とフリーライダー、加えて、第 3 章 環境政策の基礎理論：直接規制と市場メカニズム／環境税と補助金／直接交渉による解決、の項目を中心に学修した。

以上の基本的な学修を継続させながら、履修生の関心が高いテーマでの、リサーチペーパー作成のために、

(3) Research Paper の作成に向けて、ということで、企業の CSR 活動と、企業業績の関係について、「企業の CSR 活動と企業業績」をテーマとして、①先行研究の解題、②実証分析の課題、について報告、議論を行った。

(4) 西川 可穂子 (商学部・教授)

FLP 演習 A・B

<テーマ>

水環境を中心とした環境問題とその対策

<授業の概要>

本演習では主に水環境に焦点をあて、履修学生がグループに分かれて実態調査（フィールドワーク）を実施し、調査対象に関する理解を深め、学会やシンポジウムにも参加する。年間を通して、フィールドワークを行う。夏休みには、他大学の学生とも交流を深める夏のフィールドワークに参加する。演習後半では、フィールドワークに関する文献調査などを行い、調査データのまとめ方、その意義などをまとめて1年間の報告と次年度の課題についてまとめる。

<活動内容>

今年度の西川ゼミは、河川の薬剤耐性とマイクロプラスチック汚染の調査を実施した。

<実態調査>

* 実施内容：河川から試料水を採取し、大学で薬剤耐性の有無を確認した

* 成 果：今年度の活動および昨年までのデータについて解析をし、11月27日に環境情報環境センター主催の第16回環境情報科学ポスターセッション学生の部に「東京近郊の表層水における薬剤耐性汚染と抗菌薬使用量に関する研究—人為的汚染の可能性について」というタイトルで発表を行なった。日本経済新聞社の記者から取材を受けた。

対象演習：B

実 施 日：2019年5月18日(土)

実施都市：東京都文京区・新宿区

実施場所：礫川公園・神田川付近

対象演習：B

実 施 日：2019年5月26日(日)

実施都市：東京都八王子市・多摩市

実施場所：大塚官田公園・鶴牧西公園

対象演習：B

実 施 日：2019年7月13日(土)

実施都市：東京都世田谷区

実施場所：呑川親水公園

対象演習：B

実 施 日：2019年7月31日(水)

実施都市：東京都立川市

実施場所：多摩川

対象演習：B

実 施 日：2019年8月5日(月)

実施都市：茨城県取手市・土浦市・東京都墨田区

実施場所：利根川・霞ヶ浦・隅田川

対象演習：B

実 施 日：2019年8月18日(日)

実施都市：千葉県柏市・佐倉市・東金市

実施場所：手賀沼・印旛沼・八鶴湖

対象演習：B

実 施 日：2019年9月24日(火)

実施都市：神奈川県川崎市

実施場所：多摩川

＊実施内容：河川や海岸のマイクロプラスチックを調査した

＊成 果：河川水および海岸砂浜にて多くの生活日用品から排出されたと思われるマイクロプラスチックを検出した。調査結果は、学園祭にポスター発表として公表し、多くの関心を集めた。

対象演習：A

実 施 日：2019年9月25日(水)

実施都市：神奈川県川崎市

実施場所：多摩川

対象演習：A

実 施 日：2019年10月6日(日)

実施都市：神奈川県藤沢市

実施場所：片瀬西浜海水浴場

＊実施内容：浅川の水質に関する講師による講演

＊成 果：浅川の水質と歴史などを学んだ。

対象演習：A

実 施 日：2019年7月5日(金)

講 演 者：小倉 紀雄 氏（東京農業大学・日野市立カワセミハウス）

演 題：浅川の水質と地域のつながり

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 5702教室

*実態調査：群馬県の粕川で群馬高専と共同で実地調査を行なった

*成 果：昨年に引き続き、生物調査・水質調査を行い、調査成果をあげた。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年8月10日(土)～11日(日)

実施都市：群馬県前橋市

実施場所：群馬工業高等専門学校・粕川

F L P 演習 C

<テーマ>

環境問題を解決するための社会的課題とその対策

<授業の概要>

本演習生 4 名のうち 3 名は、昨年度退官された横山彰先生の指導のもと、演習 A・B において環境問題にかかわる政策問題について検討を行なってきた。そこで、演習 C では、演習生それぞれが新たなテーマを個別に設定し、それについて考察し、論文を書くことを目標にし、授業を進めた。

4 名のうち 1 名は、演習 A・B・C と西川ゼミで環境中の薬剤耐性菌について調査を実施してきた。そのため、これらのデータをまとめ、2020 年 3 月に日本水環境学会で研究調査内容を発表する。

<活動内容>

環境政策に関する論文をまとめた 3 名は、以下に示すような個別の研究課題テーマを掲げ、論文執筆を行なった。

[テーマ 1] 未整備私有林の解消を目的とした現行政策の改善可能性について ―森林所有の経営インセンティブに着目して―

[概要] 明治期の国主導での林政に端を発し、戦後の「拡大造林」政策のように木材生産のみに躍起になった性急な林政が行われてきた日本の森林では、地域や森林そのものの特徴を無視した政策によって森林崩壊の状況が多く発生している。日本林業衰退の背景や現在までの林政の変遷に触れ、「所有者にインセンティブのある森林経営」について考察をした。

[テーマ 2] SDGs アイコンを利用した企業の SDGs 活動と SDGs ウォッシュの分析

[概要] 日本企業の CRS 活動、特に SDGs の活動が、企業利益を誘導しているのでは無いかという点について検討をした。相関分析などを用いて、これらの点について分析を行った。

[テーマ 3] 仮想評価法 (CVM) を用いたクロマグロの経済価値評価

[概要] クロマグロの漁獲は未成魚が多く、クロマグロに対する漁獲規制が数多く施行されているため、漁師は漁が出来ない状態にある。そのため、経済的側面から規制へ反対する声があがっている。そこで、マグロの経済価値を数値で明らかにし、今後の規制対策・漁師への保護対策等の一助になるべく、仮想評価法を用いてアンケート調査を行い、クロマグロの漁獲規制に対する支払意思額を分析した。

フィールド調査を中心に活動した演習 C 生は、論文タイトルを「首都圏の表層水に含まれる薬剤耐性菌の調査 ～薬剤耐性汚染の可能性～」として、まとめた。以下に概要を記す。

[概要] 2017年に国内で8千人以上がフルオロキノロン耐性大腸菌などの薬剤耐性菌 (Antimicrobial resistant bacteria; ARB) によって死亡したとの推計が発表された (国立国際医療センター2019年12月5日)。国内でもARB感染による死亡者数が相当数にのぼることが明らかとなった。ARBは、病院以外にも広く環境中から検出されており、実態の把握が急務である。しかし、人口が集中する首都圏の表層水のARBについての知見は十分ではない。そこで、本研究では表層水中のARBについて検討を行った。臨床現場で発生したARBが拡散している可能性が示唆された。

(5) 谷下 雅義 (理工学部・教授)

FLP演習A・B

<テーマ>

エコツーリズムを通じて農山漁村の未来を考える

<授業の概要>

持続可能な地域社会について考える際には、都市と農山漁村をセットで議論する必要がある。都市で十分生産できない資源である食やエネルギーを提供してきたのが農山漁村である。

これまでこうした地域では過疎化が進み、地方財政の悪化とともに、「撤退」や「たたむ」という議論が行われている一方で、地域にある資源：森・川・里の連環を強化して、新しい暮らし方がはじまっている場所も少なくない。農山漁村で十分でないのは、「仕事」であるが、その一つとして「観光、ツーリズム」があげられる。このゼミでは、「エコツーリズム」に着目し、また農山漁村のフロンティア地域として石川県能登半島や宮城県南三陸町を取り上げ、持続可能な地域社会について、現地の方から学び、一緒に考える。

<活動内容>

前期は、2年生はエコツーリズムとは何かについて、3年生は、サステナブルツーリズムや地域振興に関連する文献の輪読また5月には現地を訪問し、実際のエコツアーについての体験また夏のサマースクールに向けた予行を行った。そのうえで、夏のサマースクールの内容について意見交換を行った。夏季休業中に、能登で鳥取環境大のメンバーと共にサマースクールを行った。森・里・川の3班にわかれて活動し、地元の方々との交流および懇談の場をもつとともに最終日に発表会を行った。

後期は、林業、オーバーツーリズム・スポーツ・鉄道ツーリズム、飲食およびフードロスという3つのグループに分かれ、それぞれの問題意識をもとに、文献調査や実態調査活動を行った。並行して、白門祭においてのノトノカ・バスボムづくり、エコツーリズム学生大会でのポスター発表なども行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2019年9月20日(金)～23日(月)

実施都市：石川県鳳珠郡

実施場所：中谷氏宅

実施内容：鉢伏山のエコツアー、田植えのお手伝い、サイクリングツアーの試行など

成果：自然を生かしたツアーとはどういうことかを理解するとともに、黒川地区のサポートをされているヨバレ隊のみなさん方との交流、さらに里山サイクリングツアーの可能性についての検討を行った。里山サイクリングについてはガイドをどうするか？移動速度の適切性（誰をターゲットにするか）などを精査しないとツアーとしては成立しないことが理解できた。

F L P 演習 C

<テーマ>

エコツーリズムを通じて農山漁村の未来を考える。

<授業の概要>

これまでのエコツーリズムに係る知識と農山漁村の暮らしについての智慧等そして農山漁村の再生に資する関連分野の知識に基づき、最終的にゼミ論文という形式でまとめる。

<活動内容>

前期は、夏の実態調査を行うにあたり、事前学習および地元との調整を行った。夏季休業中に南三陸町での調査を行った。現地では、観光事業者へのヒアリング、種まきしたネギ収穫のお手伝い、林産品の加工現場の見学などを行った。

後期は、各自の所属する学部での卒業研究や将来の進路にあわせて、毎回報告会を行った。観光と共済、IT 農業、子ども食堂、他者とのコミュニケーションなどについて相互学習を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2019年8月16日(金)～19日(月)

実施都市：宮城県本吉郡

実施場所：南三陸町周辺

実施内容：観光事業者へのヒアリング、種まきしたネギ収穫のお手伝い、林産品の加工現場の見学など

成果：自分たちでエコツアーを企画立案し、実践を行った。震災復興から8年半が経過した土地で、希望を作り出している方々のお話をたくさん伺うことができた。学生たち本人の将来の人生設計にも寄与するものと考えている。

（６）西田 治文（理工学部・教授）

FLP演習A・B・C

<テーマ>

生物多様性と地球環境

<授業の概要>

受講者の設定した課題について個別指導を行うこともあれば、課題の設定がまだ充分にできない者に対しては例えば、様々な生物の観察を通して生物多様性を実感してもらうこともある。学外活動以外は、理工学部の研究室で演習を行うことが多い。

<活動内容>

履修学生は、A4名、B4名、C1名であった。ゼミの活動は、いずれもA・B・C合同授業である。9月からは、B学生の一名がカリフォルニア大学へ1年間の留学に出発したが、研究室におけるゼミには随時 Skype により参加した。

本年度は、これまで継続してきた多摩キャンパスの植物リストとガイド冊子の製作を一時休止し、後楽園キャンパスにおいて、学生の興味に応じて生物多様性に関わるテーマで調べ学習と発表を行い、それに基づいた議論の場を設けた。4月20日（土）にはFLP 環境・社会・ガバナンスプログラム主催のスプリングスクール「多摩キャンパスの自然を探検！キャンパスウオーク 2019」にも参加した。さらに、学外活動として、奥多摩における2泊3日の見学調査及び、高尾山での野外観察を実施し、その内容についての議論を後日後楽園キャンパスにおいて行った。また、5月25日（土）には、西田が幹事を務めているNGOである生物多様性ジャパンの幹事会にオブザーバー参加し、メンバーとの交歓を行なった。



5月25日 生物多様性 JAPAN メンバーと

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2019年9月2日(月)～4日(水)

実施都市：東京都西多摩郡

実施場所：奥多摩水と緑のふれあい館

実施内容：1日目は大多摩ウォーキングトレイルをたどりながら、道沿いの植生調査を行い、さらに白丸ダムを見学した。2日目は奥多摩湖周辺の自然を観察しながら、「水と緑のふれあい館」においてダムの役割や水道水源林の役割について学習した。3日目は日原鍾乳洞を見学後、解散した。

成果：奥多摩地域は大都市東京に隣接した自然豊かな場所として、生物資源、水資源、観光資源など良質かつ豊富な生態系サービスを提供している。しかし、恩恵を受けている都民や周辺自治体、あるいは観光客がどの程度その恩恵に対して理解をし、さらに持続的な利用に対する意識を持っているかについては、必ずしも好ましい状況にはなさそうである。また、山地林も植林や二次林、さらに伐採後の貧植生状態も多く見られ、一見豊かに見える自然も必ずしも健全な状態にあるとはいえない。一方で、ダムや観光施設などの人工物の長短について現地見学によって思考することは、人と自然の共生を将来的に社会に周知するためには必須の経験である。本見学調査による観察と経験は、参加が叶わなかった学生とともに研究室における議論で共有できた。



9月3日 見学調査 小河内ダム



9月3日 見学調査 水と緑のふれあい館

対象演習：A・B・C

実施日：2019年10月5日(土)

実施都市：東京都八王子市

実施場所：高尾山

実施内容：高尾山の自然観察、首都に隣接した自然の保全と利用

成果：高尾山登山道沿いを徒歩で登頂し、植生の変化や多様な種、種ごとの棲み分け、登山道利用者の増加による道沿い生態系への影響などを観察した。



10月5日 高尾山中腹の植生と都心方面の景観

(7) 丹羽 雄一 (理工学部・助教)

F L P 演習 A

<テーマ>

現在から数十～数百万年前までの様々な期間を対象に自然環境を捉える

<授業の概要>

近年は地球温暖化などの環境問題や大規模洪水、巨大地震などの自然災害が注目を集めている。これらの現象は過去にも繰り返し起きている。近年注目される環境問題や自然災害を正しく理解するには、過去に遡って自然環境変動を読み解くことが重要と考えられる。本演習では、現在から数百年、数千年、数万年、数十～数百万年といった様々な期間で生じる自然環境変動について地形・地質学の観点から多角的に調査・研究を行う。

<活動内容>

身近な地形・地質から自然環境変動をとらえる方法の習得を目標として、文献購読による知識の習得とフィールドワークによる調査手法の学習を行った。対象とした地形・地質は丘陵、河成段丘、海成段丘、沖積平野、火山である。関連して、室内における地形図や地質図の読図、地質試料の観察・記載の演習も行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

東京近郊で野外・学外活動を6回行った。

対象演習：A

実施日：2019年4月20日(土)

実施都市：東京都八王子市

実施内容：多摩丘陵北西部(多摩キャンパス)の地層観察

成果：スプリングスクールに同行して、多摩キャンパスに分布する地層の観察を行った。分布する砂礫や砂泥の形状や構造から、キャンパス周辺の50万～100万年前の環境について理解を深めた。

対象演習：A

実施日：2019年5月12日(日)

実施都市：埼玉県寄居町

実施内容：荒川の地形・地質観察

成果：理工学部教職課程の野外実習に同行して、荒川がつくった河成段丘の地形やそれを構成する地層の観察をした。段丘地形の配列や地層の侵食・堆積の様相から、最近10万年間の環境変動に関する理解を深めた。

対象演習：A

実施日：2019年6月1日(土)

実施都市：神奈川県川崎市・東京都狛江市・世田谷区

実施内容：多摩丘陵南東部・武蔵野台地の地形・地質観察

成 果：多摩丘陵南東部では、30 万年前以降の環境変化の実態やそれに対応した海のふるまいを、武蔵野台地では最近数万年間の環境変動と河川のふるまいを理解した。

対象演習：A

実 施 日：2019 年 6 月 30 日(日)

実施都市：神奈川県小田原市・箱根町

実施内容：箱根火山の地形観察

成 果：理工学部教職課程の野外実習に同行して、箱根火山の地形観察を行った。火山噴火によって形成された地形の観察から、火山活動に対応した表層環境の変化について知識を得た。

対象演習：A

実 施 日：2019 年 10 月 26 日(土)

実施都市：千葉県柏市

実施内容：東京大学柏キャンパス一般公開の見学

成 果：自然環境学専攻の展示の見学を通じて、自然環境を対象に行われている研究について情報収集した。

対象演習：A

実 施 日：2019 年 10 月 27 日(日)

実施都市：神奈川県三浦市・横須賀市

実施内容：海岸の地形・地質観察

成 果：理工学部教職課程の野外実習に同行して、三浦半島の地形・地質観察を行った。気候変動と地殻変動に対応した陸地の形成やプレート境界で起こる巨大地震について知識を得た。

(8) ハリスン、ブライアン (総合政策学部・教授)

FLP 演習 C

<テーマ>

Environmental studies: pollution control and environmental management

<授業の概要>

We will cover various aspects of environmental management and pollution and consider the countermeasures used; the emphasis will be placed on issues of current concern.

<活動内容>

ハリスンゼミは、次のトピックスを勉強しました。

FLP report 2019-2020

The following topics were studied and discussed in class:-

a) Spring (前期)

Week 1 Noise pollution

Week 2 Electronic waste

Week 3 Animal cruelty and tourism

Week 4 Dams

Week 5 Water shortages around the world

Week 6 Renewable energy - wind and nuclear power

Week 7 Air pollution in large city centres

Week 8 The impact of palm oil production

Week 9 Over-tourism

Week 10 Animal extinction

Week 11 Biofuels

Week 12 The relationship between meat consumption and climate change

Week 13 Short-lived climate pollutants

Week 14 Student presentations

b) Autumn (後期)

Week 1 A tourism boom in an environmentally sensitive area

Week 2 Population growth and climate change

Week 3 Was it your last-ever car?

Week 4 UN IPCC report on global warming

Week 5 Removing CO₂ from the atmosphere

Week 6 Geo-engineering

Week 7 Biodiversity - humanity and wildlife

Week 8 Coral reefs

Week 9 Cycling in Groningen and Odense

Week 10 Overfishing (including illegal fishing)

Week 11 Becoming fossil-free

Week 12 Oil or biodiversity for Ecuador?

Week 13 Environmental movements

Week 14 Student presentations

In addition to classwork, students each wrote a 5,000 word report. The 2 selected topics were:-

- The environmental effect of river-crossing structures
- The effect of China' s problem with particulate matter ($PM_{2.5}$) on the air quality in Japan

（９）盛田 富容子（全学連携教育機構・兼任講師）

FLP演習B・C

<テーマ>

都市環境マネジメント

<授業の概要>

環境マネジメントの観点から都市環境をめぐる様々な問題を理解し、持続可能な都市構造のあり方について考察する。本年度は特に、近年、少子高齢化・人口減少の進展を背景に日本で深刻化している空き家問題からみた都市の持続可能性と都市づくりについて考察するとともに、縮小社会や空き家問題に対する方策の一つとして注目される「コンパクトシティ」について、基本的な文献を講読し、内容に関するディスカッションによって理解を深める。また、国内外の事例研究を通じて、持続可能な都市づくりについて基本的かつ総合的な議論を進めていく。

<活動内容>

盛田ゼミでは、前年度に引き続き、空き家問題に焦点を当てることにより、「持続可能な都市」のあり方について研究に取り組んでいる。世界最大のメガシティである東京圏（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）を対象として、その空き家問題について考察している。

現在、東京圏では、オリンピック開催を控え、大規模再開発の槌音が絶えないが、こうした再開発を追い風にして、超高層マンション（タワーマンション）の建設が活発化している。これにより、局地的なバブルも生じているが、数の上では、住宅は既に供給過剰な状態にあり、東京圏でも空き家問題は深刻化してきている。この点について、ゼミでは、エクセル統計やフリーのGISソフト「MANDARA」等を用いて、「住宅・土地統計調査」や「国勢調査」などの統計データを分析し、東京圏における空き家の現状と課題を可視化することを試みている。分析の結果、都心から50～60km圏以遠の地域で空き家問題が深刻化する地域が増えていることが確認され、東京圏の空間的な縮小は既に始まっているものと推察された。都市の縮小によって空き家が増加することで、外部不経済（景観の悪化、防災・防犯機能の低下、ごみ等の不法投棄の誘発や老朽家屋の倒壊・崩壊による危険性など）が拡大し、地域の居住環境を著しく悪化させる恐れがあることや、空き家の固定化による地域の人口密度や土地利用密度の低下で、サービス産業を中心とする地域経済の停滞の原因にもなりうることなどが議論された。このように、増加する空き家の問題は、単なる個別の問題ではなく、地域全体の持続可能性にもかかわる問題でもあることを、改めて、ゼミ生全員の共通認識とするところとなった。

残念ながら、本年度は、実態調査を実施することはできなかったが、統計データ等の分析を通じて、ゼミ生の問題意識を明確にすることができた点で、一定の成果はあったものと考えている。次年度のゼミでは、引き続き東京圏を対象として、空き家問題が都市の持続可能性に与える影響を、実態調査と事例研究を通じて、実証的に分析し、問題に対する具体的解決策を考えたい。

Ⅱ. ジャーナリズムプログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

本プログラムは、長谷川如是閑や杉村楚人冠といった日本の歴史に残る著名なジャーナリストを輩出した中央大学の伝統を継承し、ジャーナリズム全体のさらなる発展をこの中央大学から巻き起こすことを目的としている。

所属する学部で学ぶ専門知識と本プログラムのフィールドワークを融合させることにより、広い視野を持ち物事の本質を深く考察・分析・報告できる人材を育てる。さらには、企画力、文章力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力などの社会人基礎力を向上させ、ジャーナリズムの世界で活躍できる人材を育成する。

また、学生諸君が個々の目的と将来に向けてのキャリアデザインを描けるように、担当教員はマスメディア界を含めた広い社会の要請に十分応えられる指導と教育を行う。



長谷川如是閑



杉村楚人冠



山根真治郎

中央大学は、1909年に新聞学科を設置。日本では、最も早くジャーナリスト養成に取り組んだ大学のうちの1つである。これまで、東大、早慶とともに、マスコミ業界に多数の人材を輩出してきた。また、戦前に、「新聞学院」という民間のジャーナリズムスクールがあったが、それを設立した山根真治郎も、中央大学出身であった。この「新聞学院」はのちに、日本新聞協会付属の機関となり、終戦まで続いた。

戦後も駿河台にキャンパスがあった時代には、朝毎読の新聞社の各部長、デスクに必ず1人は中大出身者がいたという時代もあるほど、ジャーナリストを輩出していた。しかし、1978年の多摩全面移転以降、マスコミ志望者の減少、大学としての公的教育プログラムの消滅によって、ジャーナリストの道へ進む学生の数が激減した。権力を監視し弱者の声を代弁し社会に対し大きな影響力をもつジャーナリストを中央大学が育成することは、大学のみならず民主的な社会を構築する上で極めて重要である。

このため、2003年に「FLP ジャーナリズムプログラム」を設置。戦前戦後に渡って、優秀なジャーナリストを輩出してきた中央大学の名誉と勢いを回復せんとするものである。実際、2003年以降、このFLPの演習を受講した後、朝日・毎日・読売などの新聞業界、NHKや民放などの放送業界、電通などの広告業界、講談社などの出版業界などのマスコミへ就職した学生数は、100人以上に及んでおり、本プログラムは確実に実績を出している。

2. 2019 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
1	鈴木 俊幸	文学部	3	2	1	合併（A・B・C）
2	辻 泉	文学部	-	8	6	合併（B・C）
3	松田 美佐	分学部	-	5	6	合併（B・C）
4	市川 哲夫	総合政策学部	12	10	10	単独（A）/合併（B・C）
5	松野 良一	国際情報学部	11	8	9	合併（A・B・C）
6	村田 雅之	国際情報学部	-	-	6	単独（C）
7	荻野 博司	全学連携教育機構	5	4	4	単独（A）/合併（B・C）
合計			31	37	42	

3. プログラムスケジュール

4 月 履修ガイダンス

5 月 第一回部門授業担当者委員会

6 月 2020 年度募集に伴う総合ガイダンス

7 月 第二回部門授業担当者委員会

9 月 2020 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス

11 月 2020 年度募集に伴う選考試験

12 月 第三回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）

3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

期末成果報告会

実施日： 2019年12月14日(土) 13:00～

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 11430 教室

実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

5. これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先

日本放送協会 (NHK)、テレビ朝日、TBS テレビ、中部日本放送、東海テレビ放送、中京テレビ放送、朝日新聞社、読売新聞社、毎日新聞社、日本経済新聞社、NHK 出版、時事通信社、中日新聞社、中国新聞社、岐阜新聞社、新潟日報社、共同通信社、NTT 東日本、NTT データ、電通、小学館、日本出版販売、ベネッセコーポレーション、文藝春秋、光文社、白泉社、ダイヤモンド社、日本教育新聞社、有斐閣、WOWOW、東北新社、ジャンプコーポレーション、京王エージェンシー、読売広告社、IMAGICA、PRAP JAPAN、デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム、学情、リクルート、みずほフィナンシャルグループ、横浜ゴム、日本銀行、三井住友銀行、三菱東京 UFJ 銀行、千葉銀行、京葉銀行、八十二銀行、川崎信用金庫、日本政策金融公庫、東京海上日動火災保険、損害保険ジャパン日本興亜、野村総合研究所、野村証券、富士通、リコー、凸版印刷、野村不動産パートナーズ、ヤフー、ニフティ、GeeeN、全日本空輸、ANA エアポートサービス、日本旅客鉄道、JTB 首都圏、オリエンタルランド、地方公務員 (県庁・市役所など)、慶應義塾大学、早稲田大学大学院政治学研究科 ジャーナリズムコース、中央大学大学院 (文学研究科、総合政策研究科) など

(1) 鈴木 俊幸 (文学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

明治前期のメディア史研究

<授業の概要>

本年度は、昨年度までの成果を踏まえ新たな調査・研究を二件並行して展開した。第一に、新聞・雑誌の流通網の発達する過程を捉え、稗史小説類の出版・流通との相関を明らかにするために地方新聞所掲の新聞販売に関わる広告の調査と分析とを行った。第二に、広告メディアの多様性とその時代的変遷、地域発信の広告戦略の様相を捉えるための事例研究として、地方書店の広告を明治十年代後半から二十年代初頭にかけてのものを網羅的に調査・収集し、その史的展開をこれまでの研究蓄積と照らし合わせながらたどってみた。

データ入力作業や各自担当の調査に基づく報告と討議を主軸に授業を進め、それに基づいて、本年度末発行の雑誌に掲載すべく共同の論文に仕上げた。また、新たな研究資料を得るための調査合宿を行った。

<活動内容>

本年度鈴木ゼミは、まず、昨年度合宿で収集した『静岡大務新聞』、および『絵入東海新聞』（複製資料）の広告記事の読解・分析を継続し、担当パートごとの報告とそれに基づく討議を重ねた。そうして深化させていった研究を共同の論文にすべく、各自原稿執筆をし、その精度を高めるために推敲を重ねた。また、後期には本年度ゼミ合宿で収集した『新潟新聞』『絵入新潟新聞』の広告記事の読解作業を進め、分析方法等の討議を行った。それに基づき、共同研究における各自の担当を割り振り、担当部分ごとの方針を定めた。来年度は、春期休暇中にまとめることになっている各担当報告に基づく討議から始めることになる。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2019年9月18日(水)～19日(木)

実施都市：新潟県新潟市

実施場所：新潟県立文書館

実施内容：明治18年から21年の4年間に発行された『新潟新聞』『絵入新潟新聞』を調査し
書籍安売りや新聞販売に関わる広告を収集した。

成果：本年度後期および来年度のゼミ活動に必須の研究資料を得ることが出来た。

(2) 辻 泉 (文学部・教授)

FLP演習B・C

<テーマ>

ポピュラー文化とメディア変容

<授業の概要>

本演習は、ポピュラー文化に関連するメディアの実態について、広く理解を深めることを目的としている。たとえば、趣味やファッション、ライフスタイルに関する雑誌やインターネット情報であったり、あるいはスポーツジャーナリズムであったりというように、われわれの日常生活において身近な、ポピュラー文化を切り口にして、今日のメディアの実態や問題点について考察することが主たる目的である。

具体的には、関連する文献の読解からスタートして、実際にメディア情報の内容分析を行ったり、あるいはこれらの情報発信に携わる現場への訪問調査なども織り交ぜつつ取り組んできた。なお2019年度は、趣味雑誌とそのオルタナティブメディア（インターネット、インディーズ雑誌など）を中心テーマとして取り上げた。

<活動内容>

辻ゼミは、上記したような目的に基づき、『Myojo』『BOMB』『ROCKIN' ON JAPAN』『Number』『Animage』『週刊少年ジャンプ』『週刊ファミ通』の7誌を主たる対象として、こうした系統の雑誌を購読するような読者たちの文化、およびこれらのメディアを作り出すメディア産業を対象とした実態調査を行った。

具体的な活動内容などは、下に掲載した日程表などを参照のこと。

日程	予定	文献 (要約/コメント)	雑誌ウォッチ担当	その他
<前期>				
4月10日	(1)ガイダンス・分担決めなど			
4月17日	(2)基礎論①「文化の楽しさと時代変化」	※前日正午まで	facebookに論文についてコメント	
4月24日	(3)基礎論②「MMA」	※前日正午まで	facebookに論文についてコメント	
5月1日	みどりの日			
5月8日	(4)基礎論③「MMA演習」			仮説構成開始
5月15日	(5)文献購読①『出版メディア入門』4章雑誌	三村/大塚	『Myojo』日笠 『BOMB』土井	
5月22日	(6)文献購読②『出版メディア入門』10章読者と読書	緑川/鹿又	『ROCKIN' ON JAPAN』大塚 『number』緑川	各誌ごとの作業仮説提出
5月29日	(7)インタビュー項目検討開始			質問項目作成開始
6月5日	(8)文献購読③『オルタナティブ・メディア』解説+はしがき+1章	秋元/布施	『Animage』鹿又 『週刊少年ジャンプ』三村	
6月12日	(9)文献購読④『オルタナティブ・メディア』7・10章	土井/辻	『週刊ファミ通』加瀬	
6月19日	(10)インタビュー項目調整①			質問項目提出
6月26日	(11)インタビュー項目調整②			
7月3日	(12)ゲストスピーカー招聘			
7月10日	(13)内容分析			
7月17日	(14)夏休みの合宿準備			

＜後期＞	予定	項目①	その他
9月25日	(1)ガイダンス		
10月2日	(2)報告書のまとめ方・今後の進め方相談		
10月9日	(3)報告書執筆開始		
10月16日	(4)休講(1月8日延長分振替)		
10月23日	(5)班ごと中間報告①		
10月30日	(6)休講		
11月6日	(7)多摩図書館見学		
11月13日	(8)班ごと中間報告②		
11月20日	(9)年表作成&プレゼン準備①		
11月27日	(10)年表作成&プレゼン準備②		
12月4日	(11)リハーサル①		12月7日(土)年表最終〆切
12月11日	(12)リハーサル②		12月14日(土)成果報告会
12月18日	(13)報告書一次〆切		
12月25日	冬期休業		
1月1日	冬期休業		
1月8日	(14)班ごと最終報告会		1月6日(月)報告書最終〆切

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：B・C

実施日：2019年7月3日(水)

講演者：Chloé Michaud 氏（文化学園大学大学院）

演題：グローバル化する日本のファッション文化とオルタナティブメディアの可能性

実施都市：東京都八王子市

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 3253教室

実施内容：六か国語を用いて、日本のストリートファッションの情報を発信している「Online fashion Magazine “The Comm” (<https://the-comm.online/ja/>)」の編集長、文化学園大学大学院生のChloé Michaud 氏にお越しいただき、運営の実態について、オルタナティブメディアの展開の難しさに焦点を当ててお話しいただいた。

成果：ご自身もファッションモデルであり、ロンドン大学SOASを卒業され、グローバルな経験を豊富にお持ちな講師の話に、学生は熱心に聞き入っていた。日本語だけでなく、英語でもお話しいただき、語学学習の面でも成果があったと思われる。

対象演習：B・C

実施日：2019年9月2日(月)～3日(火)

実施都市：長野県北佐久郡

実施場所：軽井沢プリンスショッピングプラザとその周辺

実施内容：軽井沢で合宿を行い、それまでの研究成果を報告しあうとともに、TV番組『テラスハウス』のロケ地を訪問し、メディアと地域文化の関連について調査した。

成果：全員が参加し活発な意見交換とともに、有意義な調査を行うことができた。

(3) 松田 美佐 (文学部・教授)

FLP演習B・C

<テーマ>

学問としてのジャーナリズム、および、取材・表現活動の実践

<授業の概要>

ネット社会の進展にともない新聞やテレビなど伝統的メディアの報道に批判の目が向けられるなか、ジャーナリズム機能をどう維持、発展させるかが問われている。本演習では、ジャーナリズムの原理・理念について文献で学んだ後、ゼミでの議論を通じてジャーナリズム活動の現状と可能性を考えたい。また、それと並行する形で、受講生自らが取材し、記事にまとめる活動をおこなう。具体的には、夏期ゼミ合宿を取材・調査にあてることとし、前期には取材地の選定から始め、グループに分かれて取材の準備をおこなう。後期にはゼミでの発表などを通じて、記事にまとめることとする（2019年度は那覇市、2018年度は鹿児島市、2017年度は松江市・出雲市、2016年度は高知市、2015年度は広島市、2014年度は石巻市をベースにおこなった）。このような取材・表現活動の実践やゼミでのディベートにより、現代社会で広く必要とされている「主体的に情報収集し、議論を通じて理解し、自分なりの見解をまとめ、わかりやすく表現する力」を磨くことを目的とする。

<活動内容>

本年の活動は四点に大きく分けることができる。

まず、文献講読によるジャーナリズムの理解とそれに基づき議論をおこなう訓練である。

文献講読で取り上げた本は、畑仲哲雄、2018、『ジャーナリズムの道徳的ジレンマ』勁草書房である。この文献を講読しながら、ジャーナリズムの基礎について理解を深め、さらに、関連するさまざまなテーマについて、受講生の専門領域と関係づけながら議論した。また、令和初日の紙面を題材に、各紙の比較検討もおこなった。次に、例年議論の練習のためにディベートをおこなっているが、本年も受講生からテーマの希望を募り、「コンビニ 24 時間営業の是非」「就活スーツ着用の是非」「外国人労働者受け入れ拡大の是非」「出生前診断の是非」「尊厳死法制化の是非」などのテーマで、ディベートをおこなった。三点目として、本年は夏に沖縄県で調査・取材合宿をおこなうこととし、グループに分かれ事前取材・調査をした上で、8月26-29日に実態調査に出かけた。取材地の決定から、具体的な取材計画立案、取材の申し込みなど、取材合宿の全ての過程は学生たち自身が企画・実行する。成果はすべてのグループが後期ゼミ時間に発表し、全員が1,000~2,000字程度の記事にまとめた。そのうち2名の記事は『HAKUMON Chuo』冬号に掲載され、2名が春号に掲載予定である。四点目として「中央大学／大学を考える」を共通テーマとする研究を各自が行った。この研究は、大学、もしくは中央大学に関連し、各自が問題を感じる点について、調査し、ゼミにおいてプレゼンテーションし、研究論文にまとめるものである。

以上の活動を通じて、学年末に受講生全員が合宿取材記事を修正して完成させ、あわせて「中央大学／大学を考える」に関する研究論文を執筆し、ゼミ論集としてまとめた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実 施 日：2019年8月26日(月)～29日(木)

実施都市：沖縄県那覇市

実施場所：沖縄県庁・他

実施内容：取材合宿

成 果：全員が取材成果を1,000～2,000字程度の記事にまとめ、そのうち4名の記事が『HAKUMON Chuo』冬号と春号（予定）に掲載された。

(4) 市川 哲夫 (総合政策学部・特任教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

放送文化論

<授業の概要>

前期 : 全 14 回にわたり、映像のアーカイブを参照しながらテレビ放送史の画期となった事象を学び、放送の使命と可能性を考究した。

後期 : 2014 年以降、毎年制作している『二十歳の自画像』というオムニバス・ビデオ創りに取り組んだ。2 年生ゼミの 12 名のうち、脚本審査 (互選) の結果、中村綾芽 (法)、水谷隆誠 (法)、島田清弘 (経) の三作品が選ばれ、現在 (2 月末時点) 撮影中である。併せて、「若者の幸福論」をテーマに戦後の「若者」が求めて来た「幸福」とは何だったのか、その変遷と、現在の「若者」の「幸福」観を考究した。『絶望の国の幸福な若者たち』を書いた、社会学者古市憲寿の論文を出発点に、『調査情報』誌所収の、田原総一郎、市川哲夫、古市憲寿、江利川滋、掛尾良夫、馬場康夫、斎藤環らの「若者」論を毎回ゼミ生が輪番で研究発表、その後ゼミ生全員で討議のち、市川が解題を行った。これは、『二十歳の自画像』のテーマをより掘り下げる為の学習であった。

<活動内容>

市川ゼミでは、上記授業の一方、ゲスト講演会、テレビ局スタジオ見学、京都研修合宿を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習 : A・B・C

実施日 : 2019 年 5 月 18 日 (土)

講演者 : 石丸 彰彦 氏 (株式会社 TBS テレビ編成局)

演 題 : テレビ局の目指すもの

実施施設 : 中央大学 多摩キャンパス 11430 教室

実施内容 : メディアの転換期にある現在、テレビ局はどんな未来像を描いているのか、又、テレビ局はどんな人物を求めているのか? 本学 OB でもある石丸氏から「就活」へのアドバイスも併せて、講演していただいた。

成 果 : 市川ゼミの 2・3・4 年生のみならず、FLP ジャーナリズムプログラムの他ゼミ生、特殊講義 (放送メディア論) 受講生も幅広く参加し、盛況だった。講演後も、およそ一時間にわたって石丸氏に個別質疑が続いた。メディア志望の人間にとっては、極めて実践的な講座となった。秋以降の「就活」にも有効な一日となった。

対象演習：A

実施日：2019年6月29日（土）

実施都市：東京都港区赤坂

実施場所：TBS（『王様のブランチ』生放送スタジオ）

実施内容：生放送スタジオに入り、フロアで2時間（12：00～14：00）見学。番組終了後、元ドラマディレクター（現経営企画局）の今井夏木氏から「テレビの仕事」の実際についてレクチャーがあり、その後参加者全員が今井氏に各々、質問をして回答をいただいた。そのあと、市川の案内で近くの店で、「見学総括」を兼ねた食事会后、解散。

成果：例年、実施している企画だが、「百聞は一見に如かず」で、この企画を通して「テレビの仕事」について、具体的なイメージを掴み、「就活」準備にも的を得た取り組みが出来るようになる。実施後、全員に「見学レポート」を提出させているが、明らかにモチベーションの向上が見られる。

対象演習：A・B・C

実施日：2019年8月29日（木）～31日（土）

実施都市：京都市中京区・右京区

実施場所：(1)堀木エリ子&アソシエーツ

(2)東映京都太秦撮影所

実施内容：(1)和紙のアート・デザイナーの第一人者堀木エリ子氏のショー・ルームを訪ねた。氏のこれまで手掛けた作品の実物・映像をチーフ・スタッフの細尾真由美氏の解説付きで、鑑賞した。堀木氏の活動は国内外に広がり、海外での成果や、首相官邸や成田空港での「仕事」も紹介された。予習をして臨んだゼミ生からの質問も多く、予定時間を大きく超える見学会となった。

(2)太秦の見学は、市川ゼミでは三回目となったが今回は撮影中のスタジオはなかった。しかし幸い、東映京都撮影所の下戸製作部長と森井敦プロデューサーの懇切な対応をしていただいた。京撮の作品のデモンストレーションビデオを観たあと、両氏の案内で撮影スタジオを三か所と美術のスタンバイルームを見学した。とりわけ現在放送中の『科捜研の女』（ANB）のスタジオが、ゼミ生の関心をそそるものだった。

成果：京都の研修合宿も、市川ゼミでは3回目であったが、今回は2・3・4年生の内12名が参加した。見学先ではもちろん、食事や夜の余暇の際でもゼミ生の交流の機会が生まれ、特に4年生の「就活」体験の話は2・3年生には大きな刺激となったようだ。また宿泊先も「京都東急ホテル」をエコノミーな料金で利用できたので、良き「社会体験」となった。後日、提出させた研修レポートでは、「京都」で貴重なカルチャー体験が出来たとの感想が異口同音に綴られていた。

FLP演習B・C

<テーマ>

放送文化論

<授業の概要>

今年度は、「令和」改元と重なった。正に「時代」の転換期にあたった。

市川ゼミでは、今年度は「1980年代」のディケードを取り上げた。全28本のテーマが、悉く現在に繋がっていることに驚いた。以下、取り上げた評論と著者名を列記する。

- 80年代総論・・・・・・・・・・・・・・・・市川哲夫
- 昭和天皇崩御と日本人・・・・・・・・保阪正康
- ソ連崩壊の予兆～アフガン侵攻・・・・・・・・橋爪大三郎
- 「萬歳」から「漫才」、そして「MANZAI」・・・・・・・・沢田隆治
- アイドルにとっての80年代・・・・・・・・中森明夫
- ドラマ『大地の子』～中国残留孤児とは何か・・・・・・・・岡崎榮
- 校内暴力でヒーローになった「金八」の生徒・・・・・・・・柳井満
- 中曽根政治と安倍政治・・・・・・・・保阪正康
- 向田邦子の「昭和」・・・・・・・・関川夏央
- 『金曜日の妻たちへ』誕生のレシピ・・・・・・・・飯島敏宏
- 東京ディズニーランドはなぜ成功したか・・・・・・・・桐山秀樹
- 「ニューアカデミズム」はなぜ一世風靡したのか・・・・・・・・仲正昌樹
- 「ロス疑惑」騒動とメディアの変貌・・・・・・・・青木理
- ロス五輪が導いたスポーツ界のコペルニクス的大転回・・・・玉木正之
- 日本経済のファウスト症候群の原点「プラザ合意」・・・・浜矩子
- 『ニュースステーション』の面期と試行錯誤・・・・・・・・高村裕
- 雑誌『東京人』が生まれたころ・・・・・・・・川本三郎
- 「おじさん改造講座」誕生秘話・・・・・・・・清水ちなみ
- 『男女七人夏物語』を生んだ楽天的エネルギーとは・・・・鎌田敏夫
- 村上春樹からハルキ・ムラカミへ・・・・・・・・市川真人
- 大韓航空機爆破事件～対「北朝鮮」観変貌のきっかけ・・・・石高健次
- 国境を越えた和解～上海列車事故補償問題・・・・・・・・船山真
- リクルート事件の実像と、その時代の「空気」・・・・・・・・宗像紀夫
- おたく・新人類・宮崎事件～80年代精神とその後・・・・中森明夫
- 「ベルリンの壁」崩壊と東欧市民「革命」・・・・・・・・佐藤優

以上の「多種多様」なテーマで、1980年代を浮き彫りして、今日の国内外の諸課題の原点を検証した。

<活動内容>

ゼミナールでは毎回、輪番で発表者が約 30 分、テーマについて研究発表、質疑を行う、そして、その中で浮かび上がった論点についてゼミ生全員でディスカッションを約 30 分。最後に、市川がその回のテーマについて、解題と総括を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2019 年 5 月 18 日（土）

講演者：石丸 彰彦 氏（株式会社 TBS テレビ編成局）

演 題：テレビ局の目指すもの

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11430 教室

実施内容：メディアの転換期にある現在、テレビ局はどんな未来像を描いているのか、又、テレビ局はどんな人物を求めているのか？本学 OB でもある石丸氏から「就活」へのアドバイスも併せて、講演していただいた。

成 果：市川ゼミの 2・3・4 年生のみならず、FLP ジャーナリズムプログラムの他ゼミ生、特殊講義（放送メディア論）受講生も幅広く参加し、盛況だった。講演後も、およそ一時間にわたって石丸氏に個別質疑が続いた。メディア志望の人間にとっては、極めて実践的な講座となった。秋以降の「就活」にも有効な一日となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2019 年 8 月 29 日（木）～31 日（土）

実施都市：京都市中京区・右京区

実施場所：(1)堀木エリ子&アソシエーツ
(2)東映京都太秦撮影所

実施内容：(1)和紙のアート・デザイナーの第一人者堀木エリ子氏のショー・ルームを訪ねた。氏のこれまで手掛けた作品の実物・映像をチーフ・スタッフの細尾真由美氏の解説付きで、鑑賞した。堀木氏の活動は国内外に広がり、海外での成果や、首相官邸や成田空港での「仕事」も紹介された。予習をして臨んだゼミ生からの質問も多く、予定時間を大きく超える見学会となった。
(2)太秦の見学は、市川ゼミでは三回目となったが今回は撮影中のスタジオはなかった。しかし幸い、東映京都撮影所の下戸製作部長と森井敦プロデューサーの懇切な対応をしていただいた。京撮の作品のデモンストレーションビデオを観たあと、両氏の案内で撮影スタジオを三か所と美術のスタンバイルームを見学した。とりわけ現在放送中の『科捜研の女』（ANB）のスタジオが、ゼミ生の関心をそそるものだった。

成 果：京都の研修合宿も、市川ゼミでは 3 回目であったが、今回は 2・3・4 年生の内 12 名が参加した。見学先ではもちろん、食事や夜の余暇の際でもゼミ生の交流の機会が生まれ、特に 4 年生の「就活」体験の話は 2・3 年生には大きな刺激となったようだ。また宿泊先も「京都東急ホテル」をエコノミーな料金で利用で

きたので、良き「社会体験」となった。後日、提出させた研修レポートでは、「京都」で貴重なカルチャー体験が出来たとの感想が異口同音に綴られていた。

ゼミ全体の成果については、直接マス・メディアの「就活」に結びついたり、ゼミ生全員のジャーナリズムについての理解が一段と高まった。とりわけ現代の転換期に至る、1980年代への歴史認識を持つことになった。

小職は、20年3月末日で退任する。08年以来F L Pジャーナリズムプログラムの教員として、ゼミ生とともに「放送文化」について学習をしてきた。選抜試験を経てゼミに入った諸君なので、学習意欲も高かった。志望を叶えメディアに就職したゼミ生も多い。

20年4月以降は、市川の後任としてTBSの後輩の山崎恒成氏が就任する。

※今年度も、A・B・Cの合同の企画がいくつかあり、2・3・4年生の交流が図られゼミ生間の絆が強化された。

(5) 松野 良一 (国際情報学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

放送用番組の制作およびノンフィクション執筆の実践

<授業の概要>

「多摩探検隊」、「地域ドキュメンタリー」、「にっぽん列島探検隊」の制作
「中央評論」のグラビア、特集などへの執筆、出版活動

<活動内容>

多様な能力開発およびジャーナリストマインドの育成のために、実践的な活動を行なった。
主として、①実際にケーブルテレビで放送するための番組制作、②各種活字メディアへの執筆活動、を2本柱とした。

①番組制作については、ケーブルテレビ向けの番組「多摩探検隊」および「にっぽん列島探検隊」の2本を制作した。視聴世帯可能世帯数は、多摩探検隊はJCOM系列の約270万世帯、にっぽん列島探検隊はイッツコム系列の約68万世帯である。2019年度からネット配信を主とすることにした。代わりに、イッツコムにて、「にっぽん列島探検隊」として放送することにした。

②執筆活動については、学内のメディアである『中央評論』に定期的にルポルタージュ等を投稿し掲載された。

1. 番組「多摩探検隊」¹制作

放送月	企 画	D	番 P	進行状況
12 月	肥沼信次医師続編	桑山	桑山	放送済み
19 年 1 月	満蒙開拓団-前編-	久保寺	久保寺	放送済み
2 月	満蒙開拓団-後編-	久保寺	久保寺	放送済み
3 月	さようなら多摩探検隊、 また逢う日まで	井土	井土	放送済み
20 年 2 月	ハンセン病	畠山	畠山	配信中
2 月	台湾人日本兵	安	安	配信中

¹東京・多摩地域のケーブルテレビ局3局、J:COM系列15局、九州地域の2局の計20局（視聴可能世帯数:約270万）で放送されている10分間の地域再発見番組。なお2019年3月放送「さようなら多摩探検隊、また逢う日まで」をもって番組での放送は終了となった。

2. 番組「にっぽん列島探検隊」²制作

放送月	番組回	使用 VTR	キャスター	番 P
19 年 1 月	39 回	B29 特集	梅田	佐藤
2 月	〃	〃	〃	〃
3 月	40 回	満蒙開拓団	梅田	飯嶋
9 月	41 回	台湾人日本兵		安
10 月	〃	〃		〃
11 月	42 回	ハンセン病		畠山
12 月	〃	〃		〃

3. 執筆プロジェクト

中央評論グラビア

掲載時期	執筆者	内容
2019 年夏号	森 ひかる	阿波丸事件
2019 年秋号	柳沢 直己	日系人収容所
2019 年冬号	飯嶋 将太	調布飛行場

² 佐世保ケーブルテレビと東急沿線イッツコムエリア（約 68 万世帯）で放送されている全国の土地に密着した 30 分番組。

4. コンテスト受賞歴について

日時	コンテスト名	賞	作品	制作者	時間	内容
2019 年 8 月	全国自作視聴覚教材コンクール	最優秀賞（文部科学大臣賞）	「ペンシルロケットー国分寺から飛んだ夢ー」	明田夕芽	10 分	世界でもトップクラスの技術を誇る日本の宇宙開発。すべては「ペンシルロケット」と呼ばれる、僅か 23cm の小型ロケットから始まりました。当時国分寺市で行われた実験に携わった、ロケット設計者の垣見恒男さんにお話を伺うとともに、日本の宇宙開発の歴史を紹介。さらに、近年国分寺市で子供向けに開催されている、ペットボトルロケットの製作体験にも密着しました。
2019 年 10 月	東京ドキュメンタリー映画祭 2019	①ノミネート ②一般劇場公開	①『私は何者であるのか…』ーある台湾人学徒の証言ー ②「拓魂ーある満蒙開拓団員の証言ー」	①松本弥彩暉 ②久保寺隼	① 20 分 ② 18 分	①太平洋戦争末期、日本の戦況が悪化し、政府は学徒勤労動員を行いました。その対象は当時、日本の統治下にあった台湾からの留学生も例外ではありませんでした。中央大学に在学していた梁敬宣（りょう けいせん）さんは、台湾人でありながら、日本人として戦争に参加。しかし、終戦後、中国人として「戦勝国」の人間という扱いを受けることとなります。戦争を機に、日本と台湾の間で生きることになった梁さんは、「自分はいったい何者なのか…」という問いに一生苦しめられることとなります。戦争に翻弄された元台湾人学徒

					の人生を迫りました。 ②東京都多摩市聖蹟桜ヶ丘にある拓魂公苑。毎年4月、全国拓魂祭が開かれる。満蒙開拓に関する慰霊祭で1963年から続いている。この慰霊祭に毎年参加しているのが中込敏郎さん。かつて中込さんは家族と共に憧れの地、満州へと渡った。しかし、ソ連参戦によって、穏やかな生活は一瞬にして逃避生活に変わり、約8万人もの民間人の命が奪われた。満蒙開拓とは一体何だったのか。ある元開拓団員の証言をもとに描く。
2019年 11月	「地方の時代」映像祭 市民・学生・自治体 部門	① 奨励賞 ② 奨励賞	①「九死一生ーある日本兵の記憶ー」 ②「ハンセン病を生きて」	①安徳祐 ②畠山桃子	① 27分 ② 25分 ①東京都奥多摩湖が見渡せる場所に立つ台湾出身戦没者慰霊碑。この地を選んだのは台湾の風景に似ていたからだという。元台湾人日本兵の呉正男さん(91)は、「私もここに入る予定だった」と話す。日本統治時代の台湾に生まれ、13歳で日本へ。軍国主義教育を受け、日本軍への入隊。戦争、特攻隊、カザフスタン抑留という「不運」続きの人生だった。しかし、彼は自身の人生を「幸運な青春」と振り返る。呉さんの半生を追った。 ②東京都東村山市の国立ハンセン病療養所「多磨全生園」。ここに60年以上暮らす山内きみ江さんは幼いと

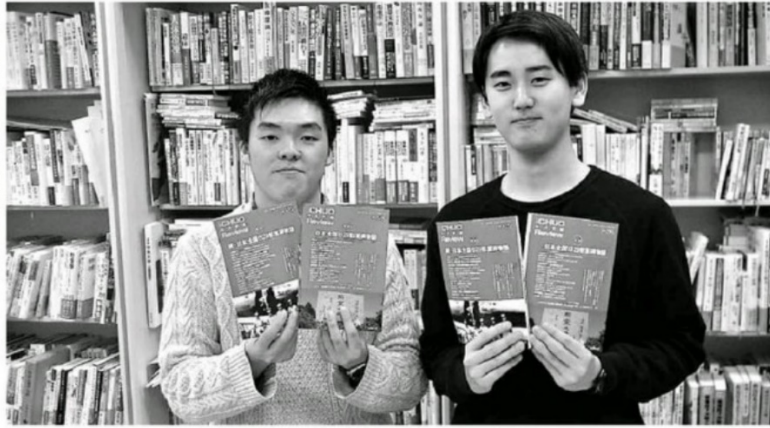
					きにハンセン病を発症し、ハンセン病は自然治癒したものの、世間の目は冷たく、都内の療養所に移り住んだ。そこで、彼女は、恋に落ちて結婚。夫の死後、きみ江さんは再び孤独に。2012年に、保育園が多磨全生園の敷地内に移転して来た。園児と交流していく中で、指のなくなった手で、子どもたちと握手することができるようになっていく。
2019年 11月	第三回ヤングリポーター・コンペティション	日本赤十字社賞	「米国ユタ州の日系人収容所を訪ねて」	柳沢直己	第二次世界大戦中、米国に住む日系人は、潜在的なスパイとなることを疑われ、「敵性外国人」として強制収容されました。その暗い歴史から70年以上が経過した現在、再び、「米国は敵性外国人を強制収容すべきだ」という主張がインターネット上にあふれ出しています。それを知った柳沢は、日系人強制収容の歴史に興味を持ち、米国ユタ州へと向かいます。そこで出会ったのは、幼少期に強制収容された経験を持つ日系人のテッド・ナガタ（八三）さんとリリー・ユリコ・ナカイ・ハーベイ（八七）さんでした。サソリと寒さに悩まされ続けた収容所生活、終戦後も続いた差別、現在も残るトラウマ。柳沢は、取材の最後に、トパーズ収

						容所跡地を訪れ、今も残る日系人の生活の痕跡を見つけます。そして、日系人収容所の歴史を若い世代が後世につないでいく必要性を実感します。
2019年 2月	東京ビデオ フェスティ バル	入 賞	①「九死一生 ーある日本兵 の記憶ー」 ②「ハンセン 病を生きて」 ③「拓魂ーあ る満蒙開拓団 員の証言ー」	①上記と同 じ ②上記と同 じ ③上記と同 じ	① 19 分 ② 19 分 ③ 18 分	①上記と同じ ②上記と同じ ③上記と同じ

5. 松野ゼミの活動について取り上げた新聞記事・テレビ番組について

2019年	掲載紙・出演番組	取り上げられた活動	
3月31日	朝日新聞	ゼミ活動(B29慰霊碑調査)の紹介	資料①
8月2日	文化放送 「一美が訊く」	ゼミ活動(B29慰霊碑調査)の紹介	
8月27日	NHK 山口放送局 「情報維新!やまぐち」	ゼミ活動の紹介	
9月13日	読売新聞	「ペンシルロケットー国分寺から飛んだ夢ー」	資料②
12月29日	毎日新聞	「米国ユタ州の日系人収容所を訪ねて」	

本の出版に携わった佐藤仁紀さん(左)と谷井健吾さん(八王子市の中央大学)



中大・松野ゼミ生 全国31の碑取材し本に

中央大学(八王子市)の学生が、全国にある米軍爆撃機の慰霊碑にまつわる話を本にまとめた。約2年前に出版した「日本全国B29慰霊碑物語」の続編。2冊合わせて北は秋田から南は沖縄・石垣にある計31の碑を調べた。その調査を通じて学生たちは「戦争とは何か」を考えた。昨年12月に続編を出したのは、松野良一教授のゼミの学生たち。ゼミでは2006年と17年に、青梅市と東村山市にあるB29慰霊碑取材し、多摩地域のケーブルテレビなどで放映された。その後、「全国にどれくらいのB29に関する慰霊碑があるのか」との疑問から調査、取材した。

「市民同士 敵味方ないと気付かされた」

谷井さんは「なぜ敵国の兵士を弔うのか」という疑問を抱いていた。碑建立に携わった人や、被爆死した米兵の親族……。そこで出会ったのが歴史研究家の森重昭さんだった。2016年5月にオバマ米大統領(当時)が現職として初めて広島を訪れた際、抱擁した相手だ。「敵国の人間としてではなく、一人の人間として」という森さんの言葉に心を揺さぶられた。「市民同士では敵も味方もないと気付かされた」

総合政策学部2年の佐藤仁紀さん(20)は、宮崎県沖に墜落したB29の慰霊祭取材した。印象に残るのは、元特攻隊の男性と、墜落機から唯一生還した米兵との慰霊祭での出会い。「戦後70年以上経て仲良くなる。恨むべきは戦争で、兵士ではないとわかった」

本は中央大学出版部からで1部300円。問い合わせは同出版部(042・674・2359)へ。

(瀧口信之)

B29慰霊碑通じ戦争考えた

資料①

宇宙開発追う映像最優秀

教材コンクール 中央大OG明田さん制作



元ロケット設計者
恒見 恒男さん(89)

中央大学多摩キャンパス(八王子市)の卒業生が在学中に手がけた短編ドキュメンタリー映像が、「全国自作視聴覚教材コンクール」(日本視聴覚教育協会主催、文部科学省後援)の社会教育部門で最優秀賞を受賞した。制作した広告会社員の明田夕芽さん(29)は「当時は大変だと感じることもあったけど、作って良かった」と喜んでいる。

国分寺のロケット取材



明田夕芽さん

受賞作は、国分寺市で戦後に発射実験が行われたペンシルロケットの製作秘話を追った「ペンシルロケット 国分寺から飛んだ夢」。

国分寺から飛んだ夢 宇宙開発の地」と記す。中央大でジャーナリ

ペンシルロケット 全長23センチ、小型ロケット。1955年4月、東京大学生産技術研究所の糸川英夫博士によって初めて、国分寺市内で発射実験が行われた。後に、より大きなベビーロケット、カップロケットへと改良が重ねられた。

つと気になっていたとい

市の広報誌「国分寺」に、市民に発射実験を巡る歴史を聞くなどして調べた。その後、科学ジャーナリストらに話を聞いた。実験当時のロケットの飛行性能を測る装置がなく、1層おきに紙を置いて水平方向に飛ばして、紙の破けた位置などから、打ち上げたときの軌道や速度を推定していたとい

ともに、ペンシルロケットの設計に携わった元自動車メーカーの技術者、恒見恒男さんも訪ねた。インタビューは作品にも収録されており、国分寺市には、戦時中に使用された銃の試射場の跡地があり、発射実験の地に選ばれたことなどを語っている。

振りためた映像は10時間以上。ゼミ仲間協力も得て、パソコンの編集ソフトで約10分にまとめた。ナレーション、映像は表示させるテロップのほか、宇宙航空研究開発機構(JAXA)から提供を受けた実験映像を組み合わせて、3年生の秋にようやく編集作業を終えたという。

ゼミ生の作品は、ケーブルテレビで放送されており、「ペンシルロケット」も国分寺から飛んだ夢」も2017年11月、全国の19局で流された。明田さんは今春に中央大を卒業したが、今年6月ゼミの後輩がコンクールへの出品に協力しているのでは」と、本人には

伝えるに苦労したという。コンクールでは、幅広い世代が学べる教材と評価され、社会教育部門の最優秀賞に選ばれた。13日に千代田区で表彰式が行われる明田さんは、視聴者の気持ちになって撮る

のは難しかった。多くの人の見てもらえたら、うれし」と話している。作品は、ゼミで制作した映像をまとめたサイト「多摩探検隊」(<http://www.tamantan.tv/>)で閲覧できる。

資料②

6. 合宿について

・2019年12月21日、22日。静岡県伊東市「山喜旅館」にてゼミを開催。野良猫写真家のプレビュー、多摩探検隊の簡易構成表添削を行った。

7. 実態調査・見学調査・講演会

対象演習：B

実施日：2019年4月14日(日)

実施都市：東京都大田区

実施場所：照栄院

実施内容：ドキュメンタリー「BC級戦犯の教誨師」の制作
成 果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：B

実施日：2019年5月13日(月)～16日(木)

実施都市：熊本県熊本市

実施場所：伊藤隆一郎氏宅・他

実施内容：多摩探検隊「水俣病」の制作
成 果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実施日：2019年5月15日(水)

実施都市：東京都豊島区

実施場所：第一イン池袋

実施内容：多摩探検隊「韓国人パイロット」の制作
成 果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：B

実施日：2019年5月18日(土)

実施都市：東京都品川区

実施場所：明晴学園

実施内容：多摩探検隊「樺太残留邦人」の制作
成 果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実施日：2019年5月23日(木)

実施都市：東京都西多摩郡

実施場所：笠松展望園

実施内容：多摩探検隊「九死一生—ある台湾人日本兵の記憶—」の制作
成 果：制作した番組はCATVで放送。WEBでも配信した。

対象演習：A・B

実施日：2019年5月23日(木)

実施都市：東京都東村山市

実施場所：国立療養所多磨全生園

実施内容：多摩探検隊「ハンセン病を生きて」の制作

成果：制作した番組はCATVで放送。WEBでも配信した。

対象演習：A・B

実施日：2019年5月24日(金)～25日(土)

実施都市：北海道札幌市

実施場所：藤野聖山園・樺太資料館

実施内容：多摩探検隊「樺太残留邦人」の制作

成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実施日：2019年5月25日(土)

講演者：深尾 裕之 氏(国土交通省)

演題：航空戦史史料の収集と分析方法

実施都市：東京都千代田区

実施施設：国会図書館

実施内容：マイクロフィルムの使用方法の学習

成果：資料調査の幅が更に広がった。

対象演習：B

実施日：2019年5月26日(日)

実施都市：東京都千代田区

実施場所：靖国神社靖国偕行文庫

実施内容：ドキュメンタリー「BC級戦犯の教誨師」の制作

成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：B

実施日：2019年5月27日(月)

実施都市：神奈川県川崎市

実施場所：明長寺

実施内容：ドキュメンタリー「BC級戦犯の教誨師」の制作

成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実施日：2019年6月6日(木)

実施都市：東京都府中市
実施場所：松村昭彦氏宅
実施内容：多摩探検隊「三億円事件」制作の為の実態調査
成 果：三億円事件の当時の状況の把握。

対象演習：A
実 施 日：2019 年 6 月 11 日(火)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：丸山第二町内会館
実施内容：「相模補給廠」の制作
成 果：取材内容を執筆し、アウトプットする予定。

対象演習：B
実 施 日：2019 年 6 月 12 日(水)
実施都市：長野県松本市
実施場所：長野地方裁判所松本支部
実施内容：ドキュメンタリー「BC 級戦犯の教誨師」の制作
成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2019 年 6 月 14 日(金)
実施都市：東京都江東区
実施場所：砂町文化センター
実施内容：多摩探検隊「清瀬と結核」の制作
成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：B
実 施 日：2019 年 6 月 16 日(日)～19 日(水)
実施都市：大邱広域市（韓国）
実施場所：信明高校・他
実施内容：多摩探検隊「韓国人パイロット」の制作
成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B
実 施 日：2019 年 6 月 22 日(土)
実施都市：東京都大田区
実施場所：池上会館
実施内容：ドキュメンタリー「BC 級戦犯の教誨師」の制作
成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：B

実施日：2019年6月23日(日)

実施都市：群馬県高崎市

実施場所：ホテルメトロポリタン高崎

実施内容：ドキュメンタリー「BC級戦犯の教誨師」の制作
成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実施日：2019年7月7日(日)

実施都市：東京都荒川区

実施場所：佐田野渉氏宅

実施内容：ドキュメンタリー「最後のBC級戦犯」の制作
成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実施日：2019年7月21日(日)

実施都市：東京都中野区

実施場所：なかのZERO大ホール

実施内容：多摩探検隊「北ベトナムの日本人歌手」の制作
成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A

実施日：2019年7月31日(水)

実施都市：東京都東村山市

実施場所：国立療養所多磨全生園

実施内容：多摩探検隊「ハンセン病を生きて」の制作
成果：制作した番組はCATVで放送。WEBでも配信した。

対象演習：A・B

実施日：2019年8月6日(火)～8日(木)

実施都市：鹿児島県南九州市

実施場所：知覧特攻平和会館

実施内容：ドキュメンタリー「B25搭乗員慰霊碑」の制作
成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実施日：2019年8月9日(金)

実施都市：東京都調布市

実施場所：調布市郷土博物館

実施内容：多摩探検隊「新選組」の制作
成 果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年8月9日(金)
講 演 者：宮川 清志 氏（近藤勇生家子孫）
演 題：多摩の新選組について
実施都市：東京都調布市
実施施設：郷土博物館
実施内容：多摩探検隊「新選組」の制作
成 果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年8月12日(月)
実施都市：群馬県高崎市
実施場所：信澤智恵子氏宅
実施内容：ドキュメンタリー「BC級戦犯の教誨師」の制作
成 果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年8月25日(日)
実施都市：東京都渋谷区
実施場所：PLAZA マリーナ
実施内容：多摩探検隊「ネパール人留学生」の制作
成 果：取材内容を執筆し、アウトプットする予定。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年9月5日(木)
実施都市：神奈川県川崎市
実施場所：明長寺
実施内容：ドキュメンタリー「BC級戦犯の教誨師」の制作
成 果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年9月6日(金)
実施都市：東京都町田市
実施場所：スガナミ楽器町田店
実施内容：多摩探検隊「全盲の姉妹ピアニスト」の制作
成 果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実施日：2019年9月10日(火)

実施都市：東京都福生市

実施場所：新井勝紘氏宅

実施内容：多摩探検隊「五日市憲法」の制作

成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実施日：2019年9月15日(日)

実施都市：東京都町田市

実施場所：木村りえ氏・りさ氏宅

実施内容：多摩探検隊「全盲の姉妹ピアニスト」の制作

成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実施日：2019年9月18日(水)

実施都市：東京都羽村市

実施場所：ヴィラ多摩ビル

実施内容：多摩探検隊「五日市憲法」の制作

成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：B

実施日：2019年9月20日(金)

実施都市：群馬県高崎市

実施場所：信澤智恵子氏宅・信澤寿氏お墓

実施内容：ドキュメンタリー「BC級戦犯の教誨師」の制作

成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A

実施日：2019年9月20日(金)～22日(日)

実施都市：福岡県北九州市

実施場所：戸畑市民会館・他

実施内容：多摩探検隊「全盲の姉妹ピアニスト」の制作

成果：制作した番組はWEBで配信予定。

対象演習：A・B

実施日：2019年9月21日(土)

実施都市：東京都大田区

実施場所：照栄院

実施内容：ドキュメンタリー「BC 級戦犯の教誨師」の制作
成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：B

実 施 日：2019 年 9 月 26 日(木)

実施都市：東京都八王子市

実施場所：小中澤麻里氏宅

実施内容：多摩探検隊「水俣病」の制作

成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B

実 施 日：2019 年 9 月 28 日(土)～30 日(月)

実施都市：岐阜県加茂郡・郡上市

実施場所：藤井宏氏宅・佐藤ハルエ氏宅

実施内容：「黒川開拓団」の制作

成 果：取材内容を執筆し、アウトプットする予定。

対象演習：A・B

実 施 日：2019 年 9 月 29 日(日)

実施都市：東京都日野市

実施場所：日野宿脇本陣跡・佐藤彦五郎新撰組資料館

実施内容：多摩探検隊「新選組」の制作

成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A

実 施 日：2019 年 10 月 5 日(土)

実施都市：東京都目黒区

実施場所：山村茂雄氏宅

実施内容：「第五福竜丸」の制作

成 果：取材内容を執筆し、アウトプットする予定。

対象演習：A

実 施 日：2019 年 10 月 19 日(土)

実施都市：東京都あきる野市

実施場所：深沢家土蔵

実施内容：多摩探検隊「五日市憲法」の制作

成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・C

実 施 日：2019 年 10 月 20 日(日)～24 日(木)
実施都市：広島県広島市
実施場所：森重昭氏宅・他
実施内容：ドキュメンタリー「被爆死した米兵を追って」の制作
成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：B

実 施 日：2019 年 10 月 22 日(火)
実施都市：群馬県高崎市
実施場所：信澤智恵子氏宅・信澤寿氏お墓
実施内容：ドキュメンタリー「BC 級戦犯の教誨師」の制作
成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A

実 施 日：2019 年 10 月 28 日(月)
実施都市：東京都東村山市
実施場所：国立療養所多磨全生園
実施内容：多摩探検隊「ハンセン病を生きて」の制作
成 果：制作した番組は CATV で放送。WEB でも配信した。

対象演習：A

実 施 日：2019 年 11 月 10 日(日)
実施都市：東京都日野市
実施場所：新選組のふるさと歴史館
実施内容：多摩探検隊「新選組」の制作
成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A

実 施 日：2019 年 11 月 16 日(土)～18 日(月)
実施都市：大阪府吹田市
実施場所：関西大学千里山キャンパス
実施内容：「地方の時代」映像祭への出席
成 果：「九死一生ーある台湾人日本兵の記憶ー」、「ハンセン病を生きて」が奨励賞を受賞

対象演習：A

実 施 日：2019 年 11 月 16 日(土)
実施都市：東京都足立区
実施場所：青木佳子氏宅

実施内容：「第五福竜丸」の制作

成 果：取材内容を執筆し、アウトプットする予定。

対象演習：A

実 施 日：2019 年 12 月 14 日(土)

実施都市：東京都町田市

実施場所：養運寺

実施内容：ドキュメンタリー「町田に墜落した B29」の制作

成 果：制作した番組は WEB で配信予定。

対象演習：A・B

実 施 日：2019 年 12 月 21 日(土)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：伊東市立木下空太郎記念館

実施内容：合宿の開催

成 果：合宿中にプレビューした「野良猫写真家」は WEB で配信予定。

（6）村田 雅之（国際情報学部・教授）

FLP演習C

<テーマ>

現代社会の変容研究—デジタル革命による社会の変容について—

<授業の概要>

メディアやコミュニケーションの在り方に着目し、21世紀の現代社会がどのように変容しつつあり今後どのような方向に向かうのかを、デジタル革命の視点により研究する。

<活動内容>

大橋正和先生のゼミを直接に引き継いでいるため、基本方針として、テーマ、目的、進行等については、昨年度までの大橋ゼミの内容をそのまま継続している。

Facebook 上のグループを活用した PBL の手法を用いて、関心を持った研究テーマを探索・発見し、そのテーマに沿った調査研究活動を行った。メンバーが4年次のみであるため、今年度の研究はグループ単位ではなく個人単位とした。ゼミにおいては、共通テーマである「現代社会の変容」、「Social Media の社会への影響」、「第4次産業革命 (Fourth Industrial Revolution)」などを意識しながら、最新の事例と研究成果について、レジュメあるいは口頭による紹介、報告、議論を行った。各メンバーの具体的な研究内容例は、「Mixed Reality (複合現実)」、「Generation Z (Z 世代)」、「地域仮想通貨」、「Twitter トренд」、「シェアリングエコノミー」、「スマートコントラクト」などであった。

上記の共通テーマや、デジタル技術を導入した先鋭的な事例（たとえば「自動運転」「VR」「MR」「HoloLens」など）については、各自の卒業論文における節や項の一部に、本ゼミにおいて獲得した知識や議論の内容を取り込むことを意識した進行を行った。この進行と連動して、「目次の構成」、「学会の論文書式」（『社会学評論スタイルガイド』の活用）、「情報デザイン」、「ppt スライドの作成」など、研究発表系のレクチャーを追加導入した。また、本学の卒業後に、(在学中は使用可能な) SPSS などの統計分析ソフトが使えない環境で分析を行う状況を想定して、仮想データを対象とする Excel データ分析のワークショップを実施した。

なお、「2019 年度 FLP 期末成果報告会（ジャーナリズムプログラム）」(12 月 14 日) では、原僚介君が発表した。

講義で提示した最新映像や紹介内容から、自動運転技術の関連ビジネスに関心を持った受講生たちが、自主的に「東京モーターショー」の見学に行くなど、デジタル革命に関する各自の関心を拡張することには繋がったと考える。

一方で、就職活動および所属学部の卒業論文執筆の時期と重なったために、本ゼミでの研究進捗が思いのほか滞り、学外での研究発表に結実しなかったことが大きな反省点となった。



自動運転技術の最新ビジネスに関心を持ち、東京モーターショーを見学した受講生たち

(7) 荻野 博司 (全学連携教育機構・客員教授)

FLP 演習 A

＜テーマ＞

ジャーナリズムが社会にもたらす影響の深さと広さ

＜授業の概要＞

さまざまな学習を通じて、憲法 21 条に支えられた国民の知る権利への奉仕者としてのジャーナリスト像を確立することを目指している。

授業は①ゼミ生が提出する課題作文の講評、②日々の報道の分析、③ジャーナリズムが直面する問題をめぐる検証、の 3 本立てとした。ゼミ生の多くがジャーナリズムの世界を進路と考えていることから、①の作文は与えられた課題をもとに 800 字の作文を毎週のゼミに提出し、他のゼミ生も交えて講評を加えている。ジャーナリストの「基礎力」である課題発見力、分析力、取材力、論理構成力、表現力をつけるために不可欠であり、その強化に資するものと確信している。ただ、新聞社や通信社、NHK などの入社試験を突破することを最終目的とはせず、他の領域に進んだ場合にも不可欠な能力を身に着けることになる考える。

②では、その時々的重要なテーマについて、各メディアがどんな視点から報道しているかを、比較検証することに重点を置いている。近年、政権運営や政策運営、安全保障など重要な問題の多くで、メディアのスタンスの違いが目につくようになっている。記事や映像を通じて、その背景を考えることは、将来の進路を決めるうえでも極めて貴重だろう。③では、取材する側の論理（取材の自由、知る権利など）、取材を受ける側の論理（プライバシー、メディアスクラム、忘れられる権利など）がテーマとなり、関連の文献を輪読してきた。

担当教員は 38 年間、朝日新聞社で経済部記者、ニューヨーク特派員、論説委員などを務め、さまざまな現場を歩いた。その経験を踏まえて学生との意見交換をもとに授業を進める。

＜活動内容＞

毎週のゼミの内容は上記の通りだが、学生の進路決定に不可欠なものとして、新聞社や放送局で採用の実務にあたっているジャーナリスト経験者をお招きする機会を設けている。また、メディアの第一線を体感するための見学調査も実施している。教室を離れ、実社会にも踏み出して幅広い情報を吸収することが特徴である。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

【メディア訪問と意見交換】

対象演習：A・B

実施日：2019年5月31日(金)

実施都市：東京都渋谷区など

実施場所：株式会社河出書房新社・株式会社ジェイ・キャスト

実施内容：両社の経営トップや役員と直接面談し、出版社、インターネットニュースの現状を知ることを目指した。質問内容はゼミ生に任せたが、できるだけ本音を引き出すように事前に指導した。名門出版社で、ヒット作品を数多く世に送り出

している河出だが、出版不況のなかでいかに読者を確保するのか、収益を維持するのかに腐心していることを知ることができた。一方、インターネットニュースサイトの大手であるジェイ・キャスト社では、さまざまなライバル競争の激しい業界の状況や収益の仕組みなど、ソーシャルメディアが置かれている現況を学んだ。

成 果：どうしても新聞や放送局に限定して論じがちなメディアの世界を幅広い視点からとらえなおすことができた。また、デジタル化が及ぼす影響を幅広く考える機会となった。

【主要メディア説明会】

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019年9月～12月

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 6607教室

実施内容：読売、朝日、NHK、毎日、日経の主要メディア各社を対象に、それぞれ採用業務を担当する記者経験者をお招きし、自社の特長や将来像、採用したい人材像、デジタル戦略などを幅広く聞いた。ゼミ生に加えて、ジャーナリズムに関心のある他ゼミ生にも参加を呼びかけ、熱のこもった質疑が続いた。

成 果：一方的な会社説明会とは異なり、参加学生がさまざまな角度からの質問を浴びせたことで、各社の違いが浮き彫りになった。とくに先方としては聞かれたいような課題について直接質問できたことは、ゼミ生らの質問能力を高める効果があった。

F L P 演習 B ・ C

<テーマ>

ジャーナリズムが社会にもたらす影響の深さと広さ

<授業の概要>

さまざまな学習を通じて、憲法 21 条に支えられた国民の知る権利への奉仕者としてのジャーナリスト像を確立することを目指している。

授業は、演習 A と同じく、①ゼミ生が提出する課題作文の講評、②日々の報道の分析、③ジャーナリズムが直面する問題をめぐる検証、の 3 本立てとした。ゼミ生の多くがジャーナリズムの世界に挑戦していることから、①の作文は与えられた課題をもとに 800 字の作文を毎週のゼミに提出し、他のゼミ生も交えて講評を加えている。ジャーナリストの「基礎力」である課題発見力、分析力、取材力、論理構成力、表現力をつけるために不可欠であり、その強化に資するものと確信している。ただ、新聞社や通信社、NHK などの入社試験を突破することを最終目的とはせず、他の領域に進んだ場合にも不可欠な能力を身に着けることになると考える。

②では、その時々的重要なテーマについて、各メディアがどんな視点から報道しているかを、比較検証することに重点を置いている。近年、政権運営や政策運営、安全保障など重要な問題の多くで、メディアのスタンスの違いが目につくようになっている。記事や映像を通じて、その背景を考えることは、将来の進路を決めるうえでも極めて貴重だろう。③では、取材する側の論理（取材の自由、知る権利など）、取材を受ける側の論理（プライバシー、メディアスクラム、忘れられる権利など）がテーマとなり、関連の文献を輪読してきた。

また、メディアに内定した 4 年生から、入社試験の体験などを話してもらう機会も設けた。

担当教員は 38 年間、朝日新聞社で経済部記者、ニューヨーク特派員、論説委員などを務め、さまざまな現場を歩いた。その経験を踏まえて学生との意見交換をもとに授業を進める。

<活動内容>

毎週のゼミの内容は上記の通りだが、学生の進路決定に不可欠なものとして、新聞社や放送局で採用の実務にあたっているジャーナリスト経験者をお招きする機会を設けている。また、メディアの第一線を体感するための見学調査も実施している。教室を離れ、実社会にも踏み出して幅広い情報を吸収することが特徴である。

<実態調査・見学調査・講演会>

【メディア訪問と意見交換】

対象演習：A・B

実施日：2019年5月31日(金)

実施都市：東京都渋谷区など

実施場所：株式会社河出書房新社・株式会社ジェイ・キャスト

実施内容：両社の経営トップや役員と直接面談し、出版社、インターネットニュースの現状を知ることを目指した。質問内容はゼミ生に任せたが、できるだけ本音を引

き出すように事前に指導した。名門出版社で、ヒット作品を数多く世に送り出している河出だが、出版不況のなかでいかに読者を確保するのか、収益を維持するのかに腐心していることを知ることができた。一方、インターネットニュースサイトの大手であるジェイ・キャスト社では、さまざまなライバル競争の激しい業界の状況や収益の仕組みなど、ソーシャルメディアが置かれている現況を学んだ。

成 果：どうしても新聞や放送局に限定して論じがちなメディアの世界を幅広い視点からとらえなおすことができた。また、デジタル化が及ぼす影響を幅広く考える機会となった。

【主要メディア説明会】

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019年9月～12月

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 6607教室

実施内容：読売、朝日、NHK、毎日、日経の主要メディア各社を対象に、それぞれ採用業務を担当する記者経験者をお招きし、自社の特長や将来像、採用したい人材像、デジタル戦略などを幅広く聞いた。ゼミ生に加えて、ジャーナリズムに関心のある他ゼミ生にも参加を呼びかけ、熱のこもった質疑が続いた。また、講師が属するメディアに内定している4年生にも特別に参加を求め、自らの体験を語ってもらう機会も設けた。

成 果：一方的な会社説明会とは異なり、参加学生がさまざまな角度からの質問を浴びせたことで、各社の違いが浮き彫りになった。とくに先方としては聞かれたいような課題について直接質問できたことは、ゼミ生らの質問能力を高める効果があった。

Ⅲ. 国際協力プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

21 世紀、人類の抱えるもっとも深刻な問題は、アジア、中東、アフリカ、中南米諸国に広く見られる貧困問題です。地球上の多くの人々が、依然として経済的に厳しい貧困な状況に喘いでおり、栄養、人口、教育、衛生疾病、人権、環境、時には難民、紛争などの側面で、様々な深刻な問題が生じています。

途上国の経済社会が、この厳しい貧困の悪循環から抜け出して、持続的な成長の軌道に乗るには、そこに住んでいる人々自身による自立した自助努力が不可欠です。まだ未成熟の市場の機能を強めるような民間の産業や企業を開発育成していくことが重要ですが、さらに社会の様々な領域で効率的な政府が積極的に介入し、単に市場機能だけでは解決できない深刻な構造的な問題を解決していかなければなりません。幅広い分野にわたる社会開発、ハード・ソフトのインフラ整備、計画的な経済開発の推進など、今後も長い時間をかけて継続的に全力で取り組むべき問題が山積しています。

同時に、貧困問題の解決には、南北間の継続的かつ大規模な国際協力も不可欠な条件になっています。豊かな先進国が、途上国との緊密な協力のもとに、資金面、人材面、貿易面、情報面の幅広い分野で、今後も長期間にわたって継続して積極的に開発問題に参加しなければ、人類の貧困問題の根本的な解決は極めて困難と考えられます。国家レベルでの多様な国際協力、NGO など民間レベルでの国際協力、さらに、先進国の優れた技術の国際移転や途上国におけるグローバル企業の活動などが、貧しい途上国の経済社会の活性化（テイクオフ）に非常に重要な貢献をしていることは、確かな事実です。

国際協力の諸活動を支え主導しているのは、開発問題に関する様々な分野で高度に優れた専門能力をもつ人材です。すなわち、高度な語学力による国際コミュニケーション能力、柔軟な異文化理解・異文化適応能力、途上国問題に関する国際政治や経済社会の分析における高度な専門的知識・技術などが、国際協力に参加する人材にとって不可欠の個人的資質能力として強く求められています。異文化社会の複雑な社会経済構造を的確に分析し、様々な困難な環境の中でも経済社会の発展の方策を具体的に模索試行する、逞しい精神力と高度な専門能力を持った人材こそが、21 世紀の人类的な課題に挑戦することができるのです。

「国際協力プログラム」は、貧困問題の解決という、21 世紀の人类的課題に挑戦する人材の基礎的な専門能力を養成する場として設定されました。国際的なコミュニケーション能力を継続的に強化するとともに、複数学部にまたがる様々な開発問題の専門科目群の学修を進めていきます。

さらに、本プログラム独自に開講する演習科目の履修を通じて、複数の担当教員とより緊密に協力しながら様々な視点から開発問題の専門的な研究を行い、総合的かつ体系的な能力育成を目標にしています。特に、途上国社会に密着した現地感覚と鋭い問題意識を深めるよう、アジアなどでの現地社会調査「Project-Based Field Work」による調査報告書を執筆する、実践的教育を重視しています。

2. 2019 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
1	小森谷 徳純	経済学部	1	2	-	合併（A・B）
2	中川 康弘	経済学部	7	-	-	単独（A）
3	林 光洋	経済学部	14	9	7	単独（A・B・C）
4	清水 武則	商学部	4	3	-	合併（A・B）
5	武石 智香子	商学部	1	9	6	合併（A・B）/単独（C）
6	平澤 敦	商学部	12	6	7	単独（A・B・C）
7	高橋 宏明	文学部	8	-	-	単独（A）
8	新原 道信	文学部	6	9	2	単独（A・B・C）
9	野宮 大志郎	文学部	-	-	1	単独（C）
10	中迫 俊逸	国際経営学部	3	1	-	合併（A・B）
11	伊藤 晋	全学連携教育機構	13	4	1	単独（A・B・C）
12	稲葉 誠	全学連携教育機構	5	-	-	単独（A）
13	佐々木 弘世	全学連携教育機構	-	20	17	単独（B・C）
合計			74	63	41	

3. プログラムスケジュール

- 4 月 履修ガイダンス
第一回部門授業担当者委員会
- 6 月 2020 年度募集に伴う総合ガイダンス
- 7 月 第二回部門授業担当者委員会
- 9 月 2020 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
- 11 月 2020 年度募集に伴う選考試験
- 12 月 第三回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）
- 3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

期末成果報告会

- (1) 実 施 日： 2019 年 12 月 14 日(土) 10:00～
実 施 場 所： 中央大学 多摩キャンパス 3453、3454、3455 教室
実 施 内 容： 各ゼミによる年度活動報告
- (2) 実 施 日： 2019 年 12 月 14 日(土) 16:30～
実 施 場 所： 中央大学 多摩キャンパス 3551 教室
実 施 内 容： 特別講演
テ ー マ： アフリカの難民問題と開発援助に期待される役割
講 演 者： 花谷 厚 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA））

5. これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先

国際協力機構（JICA）、日本国際協力センター（JICE）、海外産業人材育成協会（HIDA）、日本貿易保険、伊藤忠商事、日本郵船、全日本空輸、日本航空インターナショナル、ANA テレマート、シンガポール航空、エバー航空、東日本旅客鉄道、東海旅客鉄道、山九、JTB 首都圏、エイチ・アイ・エス、三菱東京 UFJ 銀行、三菱 UFJ 信託銀行、三井住友銀行、みずほフィナンシャルグループ、横浜銀行、信金中央金庫、大和証券、岡三証券、石川島播磨重工業、キヤノン、日産自動車、NEC、日本 IBM、日立製作所、デンソー、ブリヂストン、清水建設、三井物産、大王製紙、中外製薬、船井総合研究所、アビームコンサルティング、日食、国分グループ本社、セブン-イレブン・ジャパン、マザーハウス、LIXIL、日本放送協会（NHK）、日本経済新聞社、北海道新聞社、テレビ信州、コナミデジタルエンタテインメント、KDDI、AIU 高校生国際交流プログラム事務局、日本赤十字社、国家・地方公務員（厚生労働省、会計検査院、都庁、県庁、市役所など）、東京大学大学院農学生命科学研究科、東京大学大学院新領域創成科学研究科学科、一橋大学国際・公共政策大学院、一橋大学大学院社会学研究科総合社会学研究科、名古屋大学大学院国際協力研究科、大阪大学大学院高等司法研究科、慶應義塾大学法科大学院、早稲田大学大学院法務研究科、中央大学大学院（経済学研究科、商学研究科、文学研究科、総合政策研究科、公共政策研究科）など

(1) 小森谷 徳純 (経済学部・准教授)

FLP 演習 B

<テーマ>

グローバル経済環境における多国籍企業

<授業の概要>

本演習では経済学を用いて多国籍企業に関する様々なトピックをみていく。現在のグローバル経済環境が多国籍企業にどのような変化を促すのか、あるいは多国籍企業が国々にどのような変化をもたらすのかなどがその例である。そして各トピックの中にどのような問題が存在しているのかを考える。

その上で具体的な課題について研究を進めていくことになるが、どのようなトピックの、どのような課題に挑戦するかは履修者の問題意識次第である。

演習 B では、経済学 (経済学入門、国際経済学) を「考えるためのツール」として用いて、多国籍企業に関する具体的な課題について本格的な研究 (グループ研究) を行い、論文を執筆していく。

<活動内容>

2019 年度の小森谷ゼミはグループ研究に従事した。研究を始めるにあたっての関心は、日本企業の進出先市場におけるブランド力であり、その後、日本での企業不祥事が進出先市場における企業ブランド力にどのような影響を与えるか、また企業の CSR 活動がどの程度ブランド力に反映されるのかを具体的な研究テーマとした。

実際の研究では進出先市場として中国を設定し研究を行った。9 月中旬には上海にて実態調査を行い、日本企業の日本国内における不祥事や CSR 活動が、中国市場における日本企業のブランド力にどのような、そしてどの程度影響を及ぼすのかについて理解するための材料を得た。

研究を論文として完全にまとめあげるには至らなかったが、実態調査でのヒヤリング調査の結果を考察した研究ノートが本年度の研究成果である。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習 : B

実施日 : 2019 年 9 月 16 日 (月) ~ 22 日 (日)

実施都市 : 上海市 (中国)

実施場所 : 上海市内

実施内容 : 2 名のゼミ生と次頁の表の通り実態調査を行った。内容は企業・団体・大学への訪問が 5 件、個人へのヒヤリングが 5 件である。なお表において個人名は伏せてある。

成果 : 研究ノートをまとめるにあたり重要なヒヤリング調査となった。

国外実態調査（詳細）

日付	曜日	時間帯	活動内容
9月16日	月	夜	羽田空港集合，MM899（26:45），機中泊
9月17日	火	午前	上海浦東国際空港着（5:00），浦東空港からホテル，①不二越（10時半）
		午後	②三笠翔吉貿易（上海）有限公司（15時） A氏（20代女性）（17時）九州通和律師事務所
		夜	ホテル泊
9月18日	水	全日	③上海愛阿陸発服装整理有限公司 昆山分公司（8時～8時半にホテル発）
		夜	ホテル泊
9月19日	木	午前	④上海外国語大学（9:00～9:45）
		午後	B氏（30代男性）（15時）世紀大道，C氏（20代女性）（17時）人民広場
		夜	ホテル泊
9月20日	金	午前	⑤ジェトロ・上海事務所（10:00～11:00）
		午後	D氏（20代女性）（14時），E氏（20代女性）（15時）人民広場
		夜	ホテル泊
9月21日	土	全日	自由時間
		夜	上海浦東国際空港へ，MM898（25:10），機中泊
9月22日	日	午前	羽田空港着（5:05），解散



上海愛阿陸発服装整理有限公司にて

(2) 中川 康弘 (経済学部・准教授)

FLP演習A

<テーマ>

日本語教育学から考える多文化共生・グローバル社会

<授業の概要>

昨今、日本語教育は産業構造を下支えする外国人材の確保や日本文化紹介のツールとして語られがちだが、ゼミでは、日本語教育を社会的文脈で捉え、単に外国人に日本語を教えるという面のみならず、他者との共生に向かう「学」として扱う。

具体的には、前期は関連文献や教授法の入門書から日本語を外国語としてみる目を養いつつ、日本語使用の実態、ことばと社会、ことばと権力に係る問題について各自の関心に沿って調べ、言語の正しさや規範について考える。同時に日本語教育に係る学外施設等を訪れ、多文化共生に対する自らの問いを形成していく。後期は、海外の大学で日本語を学ぶ現地の学生と交流、フィールド調査を行い、国際協力としての日本語教育の役割について考察し、設定した課題をまとめ、「自分のことば」によって発表につなげていくことを目指す。

<活動内容>

中川ゼミでは、『外国語学』を主文献に、国内外の日本語教育・言語教育事情に関する日本語・英語文献を輪読し、言語と社会、国際協力と日本語教育の関係について知識を深めた。

後期は、海外実態調査を視野に入れて調査方法に触れ、発表の仕方や論文のまとめ方の基礎などを学んだ。それらの学びに関連させて行った活動を以下に記す。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2019年5月17日(金)

講演者：福永 由佳 氏 (国立国語研究所)

演 題：日本の多言語・多文化状況と言語教育の役割

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 3013教室

実施内容：同研究所の紹介、及び講演者の研究領域である在日パキスタン人の言語生活に係る研究成果を聞き、それ踏まえて日本の多言語多文化状況と課題について意見を交わした。

成 果：日本における在住外国人が日常の風景となり、多文化共生という語も定着した昨今、その内実はどうか、どのような状況、諸課題を抱えているのか、言語と文化の切り口から各自が考える機会となった。今後のゼミでの学修の動機付けに大いにつながったと思われる。

対象演習：A

実施日：2019年6月21日(金)

実施都市：東京都八王子市

実施場所：八王子市立第五中学校夜間学級

実施内容：同校の前田校長より夜間学級の概要説明を受けた後、ゼミ生が英語、理科、数学、国語、社会の各教室に入り、学習支援を行った。

成 果：中学校夜間学級において多く学んでいるのが外国人であるという日本の現状を知るとともに、生徒たちに学習支援を直接行ったことで、教えることの難しさや楽しさ、具体的な個人と意見を交わすことの重要性、在住外国人への親近感などを感じとることができたと考える。なお同活動に係るゼミ生の報告は、本学ホームページ（FLP、経済学部）にも掲載された。

<https://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/gp/collaborate/news/2019/06/44298/>

対象演習：A

実 施 日：2019年7月12日（金）

講 演 者：矢崎 理恵 氏（社会福祉法人さぼうと21 理事）

演 題：生活支援と日本語支援から日本に受け入れた難民と我々の関係を考える

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 3112教室

実施内容：東京都品川区においてミャンマー、シリア等からの難民への生活・日本語支援を行っている矢崎氏を招き、支援の実際についての話を聞くとともに、企業や行政、市民ボランティアなどを巻き込む同団体の活動体制やネットワーキング、団体運営のコツなどについても意見を交わした。

成 果：日本の難民受け入れ状況が先進国に比して低いこと、難民という背景からくる生活、日本語支援の特殊性などについて理解を深めた。また企業や行政とネットワークを構築していく団体運営のあり方や、青年海外協力隊日本語教師（フィリピン）を経て、同団体に関わることになっていった同氏のライフストーリーを知ること、草の根レベルでの国際協力のスタイルについて学ぶことができた。

対象演習：A

実 施 日：2019年7月14日（日）

実施都市：東京都新宿区

実施場所：JICA地球ひろば

実施内容：展示物から途上国支援の現状、SDG s への理解を深めるとともに、本学のOGでもある青年海外協力隊日本語教師経験者（タイ）から、JICAボランティアの活動についての説明をうかがった。

成 果：JICA事業、とりわけ多職種あり歴史も長い青年海外協力隊について学ぶとともに、本学のOGでもある隊員経験者と意見交換ができたことで、JICAボランティアを身近に感じることはできたと考える。なおゼミでの訪問は、JICA地球ひろばの訪問者ページにも紹介された。

https://www.jica.go.jp/mobile/hiroba/about/experience/visitor/2019/190714_01.html

対象演習：A

実施日：2019年8月27日(火)～29日(木)

実施都市：福島県いわき市

実施場所：ホテルハワイアンズ福島

実施内容：質的調査の方法論について、文献や事例をもとに理論と実践を学ぶとともに、研究倫理やデータ解釈や既述の仕方などを学習した。またグループ学習を通じて秋に行う海外実態調査の研究計画について話し合った。

成果：ライフストーリー・インタビュー、フィールドワークの理論的背景と基本的手順を学ぶことで、実態調査の準備ができたと考える。特に、語り手の語る現実聞き手との相互行為から作られるという立場をとるライフストーリー法を学んだことは、他者との対話から異文化を理解することに重きを置く本ゼミの学生たちにとって有意義であったと思われる。

対象演習：A

実施日：2019年10月29日(火)～4日(月)

実施都市：フエ（ベトナム）

実施場所：フエ大学外国語大学・特別支援学校

実施内容：同大学日本語学科を訪れ、ゼミ生7名がグループに分かれベトナム人日本語教師や学生へのインタビュー、同大学派遣の青年海外協力隊日本語教師へのインタビューを行った。あわせて授業見学や学生たちと協働のフィールドワークも実施した。また同地の特別支援学校にも赴き、青年海外協力隊障害児・者支援隊員へのインタビューと参与観察も行った。

成果：4月からの学修の成果を踏まえ、各自がグループに分かれて調査を確実に行うことができた。また現地教師や学生との関わりを通じて、国際協力の基本である、具体的な個人と対話し接することの重要性を原体験として学んだと思われる。加えて、青年海外協力隊員への調査、交流から、国際協力の最前線を感じることもできたと考える。

対象演習：A

実施日：2019年12月16日(月)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：独立行政法人国際交流基金

実施内容：海外への日本語・日本文化発信という同団体事業を理解し、開発援助という側面ではない言語文化を通じた国際協力について考える機会を得た。

当日は、日本語教育事業のチーム長、広報部次長、及び人事担当者など数名による事業説明を受けたあと、ゼミ生たちが質疑応答をする流れで行われた。

成 果：開発協力、人道的支援等ではない、日本語教育、日本文化という切り口から国際協力につながる同団体の存在が、学生たちにとっては新鮮に映ったように思われる。人事の話などでは意見交換に熱が入り学生たちも刺激を受けていた。また同団体のスタッフからも、後日、その熱心な姿勢について好印象、高評価をいただいた。

対象演習：A

実 施 日：2019年12月19日(木)

実施都市：東京都八王子市

実施場所：東京都立南多摩中等教育学校

実施内容：ベトナムでの実態調査の成果を出張報告の形で中学生に対して行った。内容は、成果報告会で使用したものを中学生向けにアレンジした。

成 果：同校ではスタディツアーで本年3月にベトナム訪問の行事を控えていることもあり、生徒たちはゼミ生たちの調査結果に興味深く聞いていた。ゼミ生たちも、自らの成果を中学生に報告することで、伝えることの楽しさ、難しさを学んだように思われる。同時に、成果を外部に発信し、還元していくことも、マクロな面で国際協力の方法の一つであると経験を通じて理解したに違いない。またゼミ生の一人が同校のOGだったということもあり、先輩として母校で発表したこともよい学びにつながったと考える。なお同活動は、ゼミ生により執筆された報告が、本学ホームページ（FLP、総合政策学部）にも掲載された。

<https://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/gp/flp/news/2020/01/47574/>

対象演習：A

実 施 日：2020年1月25日(土)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：認定NPO法人地球学校・独立行政法人国際協力機構（JICA）横浜・海外移住資料館

実施内容：本学OGであり日本語教師でもある同NPOの理事長から、横浜で展開している外国人児童・生徒への学習支援の実際について話を伺い、ゼミ生たちもサポートに回った。その後、JICA横浜・海外移住資料館に赴き、担当者から日系移民の話を伺った。

成 果：外国人児童・生徒への日本語・学修支援の現場を訪問し、実際に支援に参加することで、国内の多文化共生の状況を把握し、生活言語と学習言語の違い、学習支援の難しさなどを肌で感じる事ができたと考える。またJICA横浜・海外移住資料館を訪れることで、日系人の歴史やコロニア語（日系ブラジル人の言語）、継承日本語の存在を知ると同時に、日系社会への支援というJICA事業の一側面も理解できたと思われる。

(3) 林 光洋 (経済学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、掘って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・衛生・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1年単位のゼミではなく、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェア・トレード

<活動内容>

2019年度は、開発経済学（2冊）、社会開発、フェアトレードの分野のテキストを合計4冊使用して学習しました。5月後半の1週間、11月後半の1週間を使い、中央大学（多摩キャンパス）の生協店舗でフェアトレード・フェアを実施（下記写真参照）したり、11月上旬の白門祭ではフェアトレードカフェを出店したりして、実践的にフェアトレードについて学習し、中央大学のキャンパスを中心に普及、啓蒙・啓発にも努めました。後期には、4班に分かれて、『ゴミ問題の解決のためのアプローチ－環境教育の有効性－』、『スラム改善における「住民主体型開発」の可能性－居住環境の安定性と衛生施設に主眼を置いて－』、『BOP ビジネスにおける連携の重要性－NGOs に焦点を当てて－』、『中国における少数民族への公用語教育とその影響』という4編のグループ論文を執筆しました。それら研究の成果をFLP国際協力プログラム期末成果報告会で発表しました。

下記の通り、訪問授業や模擬授業を実施したり、外部から専門家を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、開発分

野の最新情報を吸収し、開発分野のネットワークを形成するように努力しました。活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。



中央大学生協の店舗で、秋のフェアトレード・フェアを実施

【訪問授業等】

1) 訪問授業（自主的に実施）

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 10 月～12 月（下記「訪問リスト」を参照）

実 施 場 所 : 高校 4 校・中学校 1 校（下記「訪問リスト」を参照）

実施内容/成果：林ゼミ 4 年生が前年度に実施した海外現地調査（インドネシア）の経験や結果を材料として使用しながら、途上国の基礎的な状況、貧困の特徴、貧困に陥る要因、貧困解決の方法等について「国際協力セミナー」というテーマで高校生に対して参加型の授業/ワークショップを実施。授業時に高校生と中学生に対して質問票を配布し、開発教育の効果、開発教育で留意すべきこと等についての調査も実施。高校生と中学生に対する途上国の開発・国際協力の啓発推進や情報提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習。2 年生は、再来年度の準備も兼ねて、4 年生のサポート部隊として参加

訪問先リスト

訪問先	日時	対象学年	コマ数
中央大学附属横浜中学校	10月23日	中学2年生	5コマ
	11:45～15:10		
	10月25日		
中央大学附属高校	8:45～11:35	高校2年生	1コマ
	11月7日		
中央大学杉並高校	15:30～16:30	高校1～3年生	1コマ
	11月15日		
中央大学高校	16:00～17:30	高校2年生	1コマ
	11月18日		
神奈川県立相模原高校	14:00～15:50	高校1年生	1コマ
	12月9日		
	15:10～15:50		

2) 模擬授業（白門祭期間のミニオープンキャンパス）

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019年11月4日（月）

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 3114教室

実施内容/成果: 林ゼミ4年生が前年度に実施した海外現地調査（インドネシア）の経験や結果を材料として用い、特にインドネシアの乳幼児への予防接種（ワクチン）に焦点を当てて、ミニオープンキャンパスに参加してくれた高校生やその保護者に対して模擬授業を実施。途上国の予防接種と乳幼児の健康の現状把握や解決策検討の機会提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。2年生は、再来年度の準備も兼ねて、4年生のサポート部隊として参加

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1) フェアトレードについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019年5月20日（月）～24日（金）、11月1日（金）～4日（月）、
11月18日（月）～22日（金）

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 生協店舗、ペデ下生協店舗前

実施内容/成果: a) 5月と11月の2回、中央大学生協の店舗でフェアトレード・フェアを、b) 11月の白門祭でフェアトレード商品の販売会をそれぞれ開催し、実践的にフェアトレードを学習すると同時に、学内の学生、教職員にフェアトレードを普及、啓蒙・啓発

2) フィリピンのストリートチルドレンについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 5 月 28 日 (火)

講 演 者 : 伊藤 道雄 氏 (特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター
21)

辻本 紀子 氏 (特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター
21)

演 題 : フィリピンの路上で暮らす若者に雇用と未来を: ストリートチルドレン・ゼロに向けた ACC21 の挑戦

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7203 教室・7409 教室

実施内容/成果: アジア・コミュニティ・センター21 (ACC21) が、フィリピンのカウンターパート、ChildHope とともに実施している、フィリピンのストリートチルドレン向け人づくり支援プロジェクトの現状と成果、問題点について学習

3) 途上国の防災分野における国際協力について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 6 月 4 日 (火)

講 演 者 : 辻 佳輝 氏 (日本赤十字社事業局救護・福祉部防災業務課課長)

演 題 : イラク、マレーシア、インドネシアにおける難民保護、災害復興と開発協力: UNHCR と日本赤十字社での経験から

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7203 教室・7409 教室

実施内容/成果: JICA、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)、外務省を経て日本赤十字社に勤務する講演者から、イラク、マレーシア、インドネシアで経験した事業の説明をしてもらい、難民保護活動、災害後の緊急支援、復興支援について学習

4) 中国における日本の外交と国際協力について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 6 月 6 日 (木)

講 演 者 : 入江 遥 氏 (外務省)

演 題 : 対中国の日本の外交戦略と国際協力

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7507 教室

実施内容/成果: 中国に対する日本の外交戦略および国際協力の概要および課題について学習

5) 人材育成分野における国際協力について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 6 月 11 日 (火)

講 演 者 : 町田 晋太郎 氏 (一般財団法人日本国際協力センター (JICE))

演 題 : ODA を通じての途上国向け人材育成事業

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7507 教室

実施内容/成果：JICEがこれまで実施してきた日本の大学院等で学位を取得するための支援を行なう留学生受入支援事業や海外から研修生や視察者を招いて行なう国際研修事業を説明してもらい、日本のODAを通じての途上国向け人材育成事業について学習

6) 仕事としての国際協力について学ぶ

対 象 演 習：A・B・C

実 施 期 間：2019年6月18日（火）

講 演 者：松本 彰 氏（A&M コンサルタント有限会社）

演 題：開発コンサルタントが経験した途上国における国際協力

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7409 教室

実施内容/成果：講演者の30年以上にわたる国際協力の経験から、これまで実施してきた国際協力の具体的な内容、国際協力に求められていること、国際協力に従事する際に気をつけること等について学習

7) 商社の国際協力について学ぶ

対 象 演 習：A・B・C

実 施 期 間：2019年9月24日（火）

講 演 者：山田 晃一 氏（三井物産株式会社プロジェクト本部プロジェクト開発第二部第二営業室マネージャー）

演 題：世界から電気のない村をなくそう：アジア・アフリカにおける分散電源への挑戦

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7102 教室・7507 教室

実施内容/成果：アジア、アフリカの途上諸国で山田氏が進めている三井物産の「分散型太陽光発電事業」の詳細を説明してもらい、商社が民間ベースで行なっている国際協力について学習

8) ユニセフの予防接種分野における支援活動について学ぶ

対 象 演 習：A・B・C

実 施 期 間：2019年10月28日（月）・29日（火）、11月1日（金）、12月4日（水）・6日（金）

講 演 者：高円 承子 氏（日本ユニセフ協会学校事業部）

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 5401 教室、中央大学 多摩キャンパス 生協店舗、多摩センター駅前

実施内容/成果：日本ユニセフ協会と連携して、a) 高円承子さんを招いての講演会（外部に公開、白門祭期間中の11月1日）、b) 生協店舗での募金活動（10月28日・29日）、c) 多摩センター駅前での募金活動（12月4日・6日）、それぞれを実施し、途上国の子どもたちの健康および予防接種について学習。集まった約14万5,000円の寄付金は世界の子どもたちにワクチンを届けてもらうために寄付

9) バイ（二国間）の援助機関が行なう国際協力について学ぶ

対 象 演 習：A・B・C

実施期間：2019年11月12日（火）

講演者：戸川 正人 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）監事）

川本 寛之 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）青年海外協力隊事務局海外業務第一課課長）

田中 理 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）国際協力人材部健康管理課課長）

演 題：アジア、アフリカ等途上諸国の開発と JICA の役割

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7102 教室・7507 教室

実施内容/成果：サブサハラアフリカおよびアジアにおいてバイ（二国間）の援助機関である JICA がどのような国際協力を実施しているのかについて、また、国際協力分野にはどのような仕事があり、そのような仕事に従事するためにはどのような能力が求められているのかについて学習

10) マルチ（多国間）の援助機関が行なう国際協力について学ぶ

対象演習：A・B・C

実施期間：2019年11月26日（火）

講演者：大森 功一 氏（世界銀行東京事務所上級広報担当官）

演 題：アフリカをはじめとする途上諸国における開発課題と世界銀行の役割

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7507 教室

実施内容/成果：サブサハラアフリカにおいてマルチ（多国間）の援助機関である世界銀行がどのような国際協力を実施しているのかについて、また、世界銀行をはじめとする国際機関にはどのような仕事があり、そのような仕事に従事するためにはどのような能力が求められているのかについて学習

11) サブサハラアフリカで実施する技術協力プロジェクトについて学ぶ

対象演習：A・B・C

実施期間：2019年12月10日（火）

講演者：石川 渚 氏（株式会社 JIN 開発コンサルタント）

演 題：途上国開発の現場：ウガンダ、ナイジェリアにおける技術協力の事例から

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7102 教室・7507 教室

実施内容/成果：サブサハラアフリカのウガンダで実施している「北部ウガンダ生計向上支援プロジェクト」およびナイジェリアで実施している「ナイジェリアの栄養改善能力強化プロジェクト」の Progress を説明してもらい、日本のサブサハラアフリカ向け技術協力プロジェクトについて学習

【参考 URL】

1) フェアトレード・フェアを実施

<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/05/10670/>

- <http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/11/11657/>
- 2) 特別授業（アジア・コミュニティ・センター21）を実施
<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/06/10798/>
- 3) 特別授業（日本赤十字社）を実施
<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/06/10851/>
- 4) 特別授業（三井物産）を実施
<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/10/11338/>
<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2019/09/45644/>
- 5) ユニセフ関連のイベントを実施
<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2020/01/11842/>
- 6) 特別授業（JICA）を実施
<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/12/11717/>
- 7) 特別授業（世界銀行）を実施
<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2020/01/11853/>
- 8) 特別授業（JIN）を実施
<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2019/12/47315/>

F L P 演習 B

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、抛って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・衛生・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1 年単位のゼミではなく、3 年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェア・トレード

<活動内容>

2019 年度は、日本語のテキストとして『フィリピンー急成長する若き「大国」』（井出穰治、2017 年）、『貧困と闘う知：教育、医療、金融、ガバナンス』（E. デュフロ、2017 年）を、英語のテキストとして Key Indicators for Asia and the Pacific 2016 (ADB、2016 年)、Philippines: Fostering More Inclusive Growth (World Bank、2011 年) を輪読し、知識を獲得するとともに、英語文献・資料の使用に慣れるように努めました。また、林ゼミの中心的イベントであり、ほぼすべてのプロセス・作業を学生が行なう 3 年次の 1 年間の研究プロジェクトも実施しました。前年度末の 2019 年 2 月から本格的にスタートし、研究対象国・テーマを決め、経済学部等の奨学金に応募して資金を確保し、研究計画書を作成し、国内事前調査を行ない、訪問先のアポイントメントをとりつけ、ロジスティクスの手配をし、フィリピンでの海外現地調査（8 月末から 2 週間）を実施し、最終的に、2020 年 3 月、英語版および日本語版の本格的な研究論文を完成させました。

このプロジェクトでは、フィリピンのインクルーシブな人間開発を全体のテーマに掲げ、その下で、1) 「ソーシャルキャピタル、コミュニティ防災、住民の自助・共助の関係」、2)

「保健医療従事者へのトレーニングおよび彼らの間の連携がマニラおよび周辺地域の保健所の提供する妊産婦向け保健医療サービスに果たす役割」、3)「フィリピンの職業訓練がストーリーユースの人間開発に果たす役割」、4)「ソーシャルビジネスと女性のエンパワーメント」の4つの個別のテーマで研究を行ないました。外部から専門家を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、研究に必要な知識や情報の獲得に努めました。また、現地調査実施後は、さまざまな機会（経済学部プレゼンテーション大会、FLP 国際協力プログラム期末成果報告会、etc.）を利用して研究成果を発表しました。活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。



フィリピン大学で研究計画のプレゼンテーションと文化交流を実施

【訪問授業等】

1) 訪問授業（自主的に実施）

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 10 月～12 月（下記「訪問リスト」を参照）

実 施 場 所 : 高校 4 校・中学校 1 校（下記「訪問リスト」を参照）

実施内容/成果：林ゼミ 4 年生が前年度に実施した海外現地調査（インドネシア）の経験や結果を材料として使用しながら、途上国の基礎的な状況、貧困の特徴、貧困に陥る要因、貧困解決の方法等について「国際協力セミナー」というテーマで高校生に対して参加型の授業/ワークショップを実施。授業時に高校生と中学生に対して質問票を配布し、開発教育の効果、開発教育で留意すべきこと等についての調査も実施。高校生と中学生に対する途上国の開発・国際協力の啓発推進や情報提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習。2 年生は、再来年度の準備も兼ねて、4 年生のサポート部隊として参加

訪問先リスト

訪問先	日時	対象学年	コマ数
中央大学附属横浜中学校	10月23日	中学2年生	5コマ
	11:45～15:10		
	10月25日		
中央大学附属高校	8:45～11:35	高校2年生	1コマ
	11月7日		
中央大学杉並高校	15:30～16:30	高校1～3年生	1コマ
	11月15日		
中央大学高校	16:00～17:30	高校2年生	1コマ
	11月18日		
神奈川県立相模原高校	14:00～15:50	高校1年生	1コマ
	12月9日		
	15:10～15:50		

2) 模擬授業（白門祭期間のミニオープンキャンパス）

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019年11月4日（月）

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 3114教室

実施内容/成果: 林ゼミ4年生が前年度に実施した海外現地調査（インドネシア）の経験や結果を材料として用い、特にインドネシアの乳幼児への予防接種（ワクチン）に焦点を当てて、ミニオープンキャンパスに参加してくれた高校生やその保護者に対して模擬授業を実施。途上国の予防接種と乳幼児の健康の現状把握や解決策検討の機会提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。2年生は、再来年度の準備も兼ねて、4年生のサポート部隊として参加

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会、取材等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1) フェアトレードについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019年5月20日（月）～24日（金）、11月1日（金）～4日（月）、11月18日（月）～22日（金）

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 生協店舗、ペデ下生協店舗前

実施内容/成果: a) 5月と11月の2回、中央大学生協の店舗でフェアトレード・フェアを、b) 11月の白門祭でフェアトレード商品の販売会をそれぞれ開催し、実践的にフェアトレードを学習すると同時に、学内の学生、教職員にフェアトレードを普及、啓蒙・啓発

2) フィリピンのストリートチルドレンについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 5 月 28 日 (火)

講 演 者 : 伊藤 道雄 氏 (特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター
21)

辻本 紀子 氏 (特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター
21)

演 題 : フィリピンの路上で暮らす若者に雇用と未来を: ストリートチルドレン・ゼロに向けた ACC21 の挑戦

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7203 教室・7409 教室

実施内容/成果: アジア・コミュニティ・センター21 (ACC21) が、フィリピンのカウンターパート、ChildHope とともに実施している、フィリピンのストリートチルドレン向け人づくり支援プロジェクトの現状と成果、問題点について学習

3) 途上国の防災分野における国際協力について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 6 月 4 日 (火)

講 演 者 : 辻 佳輝 氏 (日本赤十字社事業局救護・福祉部防災業務課課長)

演 題 : イラク、マレーシア、インドネシアにおける難民保護、災害復興と開発協力: UNHCR と日本赤十字社での経験から

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7203 教室・7409 教室

実施内容/成果: JICA、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)、外務省を経て日本赤十字社に勤務する講演者から、イラク、マレーシア、インドネシアで経験した事業の説明をしてもらい、難民保護活動、災害後の緊急支援、復興支援について学習

4) 中国における日本の外交と国際協力について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 6 月 6 日 (木)

講 演 者 : 入江 遥 氏 (外務省)

演 題 : 対中国の日本の外交戦略と国際協力

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7507 教室

実施内容/成果: 中国に対する日本の外交戦略および国際協力の概要および課題について学習

5) 人材育成分野における国際協力について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 6 月 11 日 (火)

講 演 者 : 町田 晋太朗 氏 (一般財団法人日本国際協力センター (JICE))

演 題 : ODA を通じての途上国向け人材育成事業

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7507 教室

実施内容/成果：JICEがこれまで実施してきた日本の大学院等で学位を取得するための支援を行なう留学生受入支援事業や海外から研修生や視察者を招いて行なう国際研修事業を説明してもらい、日本のODAを通じての途上国向け人材育成事業について学習

6) コミュニティ防災について学ぶ

対象演習：B

実施期間：2019年6月17日（月）

実施場所：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（神奈川県藤沢市）

実施内容/成果：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスのラジブ・ショウ教授を訪ね、東南アジアにおけるコミュニティ防災や防災教育、NGOの役割について学習

7) 仕事としての国際協力について学ぶ

対象演習：A・B・C

実施期間：2019年6月18日（火）

講演者：松本 彰氏（A&M コンサルタント有限会社）

演題：開発コンサルタントが経験した途上国における国際協力

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7409 教室

実施内容/成果：講演者の30年以上にわたる国際協力の経験から、これまで実施してきた国際協力の具体的な内容、国際協力に求められていること、国際協力に従事する際に気をつけること等について学習

8) コミュニティ防災について学ぶ

対象演習：B

実施期間：2019年6月28日（金）

実施場所：日本キリスト教会館（東京都新宿区）

実施内容/成果：特別非営利活動法人CWS Japanの小美野剛氏を訪ね、アジアのコミュニティ防災やNGOネットワークについて学習

9) フィリピンのBOPビジネスについて学ぶ

対象演習：B

実施期間：2019年7月4日（木）

実施場所：吉祥寺駅周辺（東京都武蔵野市）

実施内容/成果：立命館大学の船橋豊子教授を訪ね、フィリピンのBOPビジネスについて学習

10) ストリートユース向けノンフォーマル教育について学ぶ

対象演習：B

実施期間：2019年7月5日（金）

実施場所：認定NPO法人国境なき子どもたち（KnK）（東京都新宿区）

実施内容/成果：KnKの久野由里子氏を訪ね、フィリピンにおけるストリートユースの実態および彼らへのノンフォーマル教育について学習

11) 日本の地域防災と防災評価について学ぶ

- 対 象 演 習 : B
実 施 期 間 : 2019 年 7 月 5 日 (金)
実 施 場 所 : 東京大学生産技術研究所 (東京都目黒区)
実施内容/成果 : 東京大学生産技術研究所の加藤孝明教授を訪ね、日本の地域防災やまちづくり手法、防災評価について学習
- 12) フィリピンの職業訓練について学ぶ
対 象 演 習 : B
実 施 期 間 : 2019 年 7 月 12 日 (金)
実 施 場 所 : 特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター21 (東京都目黒区)
実施内容/成果 : ACC21 の伊藤氏、辻本氏を訪ね、ACC21 が支援している ChildHope/MMDC の職業訓練について学習
- 13) ソーシャルキャピタルと災害について学ぶ
対 象 演 習 : B
実 施 期 間 : 2019 年 7 月 17 日 (木)
実 施 場 所 : 日本大学 (東京都千代田区)
実施内容/成果 : 日本大学法学部の稲葉陽二教授を訪ね、ソーシャルキャピタルと災害の関係性について学習
- 14) DAC 評価について学ぶ
対 象 演 習 : B
実 施 期 間 : 2019 年 7 月 29 日 (月)
実 施 場 所 : 独立行政法人国際協力機構 (JICA) (東京都千代田区)
実施内容/成果 : 中央大学全学連携教育機構の伊藤晋特任教授を訪ね、職業訓練の分析手法である DAC 評価について学習
- 15) DAC 評価について学ぶ
対 象 演 習 : B
実 施 期 間 : 2019 年 8 月 2 日 (金)
実 施 場 所 : 独立行政法人国際協力機構 (JICA) (東京都千代田区)
実施内容/成果 : 現地駐在の経験がある JICA の田中沙恵氏を訪ね、フィリピンの保健医療の現状や都市地方の医療格差について学習
- 16) BOP ビジネスとマイクロファイナンスについて学ぶ
対 象 演 習 : B
実 施 期 間 : 2019 年 8 月 5 日 (月)
実 施 場 所 : 立教大学 (東京都豊島区)
実施内容/成果 : 立教大学の林倬史名誉教授からフィリピンの BOP ビジネスやマイクロファイナンスについて学習
- 17) DAC 評価について学ぶ
対 象 演 習 : B
実 施 期 間 : 2019 年 8 月 5 日 (月)

- 実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）市ヶ谷（東京都新宿区）
実施内容/成果：JICA 研究所次長の伏見勝利氏を訪ね、現地調査における職業訓練の分析手法である DAC 評価について学習
- 18) JICA の民間連携事業について学ぶ
対象演習：B
実施期間：2019 年 8 月 8 日（木）
実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）竹橋ビル（東京都千代田区）
実施内容/成果：JICA の実施している民間連携事業の事例紹介をしてもらい、JICA の民間連携事業に関する学習
- 19) 民間企業のソーシャルビジネスについて学ぶ
対象演習：B
実施期間：2019 年 8 月 19 日（月）
実施場所：株式会社スルシィ（東京都品川区）
実施内容/成果：スルシィ社の事業内容やフィリピン現地の状況を説明してもらい、ソーシャルビジネスについて学習
- 20) 民間企業の途上国ビジネスについて学ぶ
対象演習：B
実施期間：2019 年 8 月 26 日（月）
実施場所：株式会社ファミリーマート（東京都港区）
実施内容/成果：ファミリーマートの途上国におけるビジネス展開を説明してもらい、実際にフィリピンでビジネスをした経験から学習
- 21) フィリピンのインクルーシブな人間開発について学ぶ
対象演習：B
実施期間：2019 年 8 月 31 日（土）～9 月 14 日（土）
実施場所：マニラおよびその周辺（フィリピン）
実施内容/成果：フィリピンにおいて、4 つの個別のテーマ、a) コミュニティ防災、b) 保健医療従事者の訓練と彼らの連携、c) ストリートユース向け職業訓練、d) ソーシャルビジネスと女性のエンパワーメントそれぞれを現地調査し、インクルーシブな人間開発について学習
- 22) OJT による職業訓練について学ぶ
対象演習：B
実施期間：2019 年 9 月 4 日（水）・8 日（日）
講演者：Ms. Yachiyo Nakamura (Uniquease Restaurant)
演題：OJT for Street Youth in the Philippines
実施場所：Uniquease Restaurant in Makati City、マニラ首都圏（フィリピン）
実施内容/成果：OJT を通して、訓練生はどのようなスキルを学んで吸収し、それが就業につながったのかについて学習
- 23) ストリートユース向けノンフォーマル教育について学ぶ
対象演習：B

- 実施期間 : 2019 年 9 月 6 日 (金)
講演者 : Ms. Maria Linglingay (Kokkyou naki Kodomotachi)
演 題 : Life Skill Training for Street Youth in the Philippines
実施場所 : KnK in Caloocan City・マニラ首都圏 (フィリピン)
実施内容/成果 : KnK が実施しているストリートユースへのノンフォーマル教育の概要、
成果、課題について学習
- 24) NGO によるコミュニティ防災について学ぶ
対象演習 : B
実施期間 : 2019 年 9 月 7 日 (土)
講演者 : Dr. Manuel “Ka Noli” A. Abinales (Buklod Tao)
演 題 : The Effects of CDRR Programs on the Community and Residents
実施場所 : Buklod Tao Center・マニラ首都圏 (フィリピン)
実施内容/成果 : KnK が実施しているストリートユースへのノンフォーマル教育の概要、
成果、課題について学習
- 25) ストリートユース向け職業訓練について学ぶ
対象演習 : B
実施期間 : 2019 年 9 月 10 日 (火)
講演者 : Mr. Allan Bantasan (ChildHope)
演 題 : Job training for Street Youth in the Philippines
実施場所 : ChildHope in Tayuman・マニラ首都圏 (フィリピン)
実施内容/成果 : ChildHope が実施しているストリートユースへの職業訓練について学習
- 26) 商社の国際協力について学ぶ
対象演習 : A・B・C
実施期間 : 2019 年 9 月 24 日 (火)
講演者 : 山田 晃一 氏 (三井物産株式会社プロジェクト本部プロジェクト開発
第二部第二営業室マネージャー)
演 題 : 世界から電気のない村をなくそう : アジア・アフリカにおける分散電
源への挑戦
実施場所 : 中央大学 多摩キャンパス 7102 教室・7507 教室
実施内容/成果 : アジア、アフリカの途上諸国で山田氏が進めている三井物産の「分散
型太陽光発電事業」の詳細を説明してもらい、商社が民間ベースで行
なっている国際協力について学習
- 27) ユニセフの予防接種分野における支援活動について学ぶ
対象演習 : A・B・C
実施期間 : 2019 年 10 月 28 日 (月)・29 日 (火)、11 月 1 日 (金)、12 月 4 日 (水)・
6 日 (金)
講演者 : 高円 承子 氏 (日本ユニセフ協会学校事業部)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 5401 教室、中央大学 多摩キャンパス
生協店舗、多摩センター駅前

実施内容/成果：日本ユニセフ協会と連携して、a) 高円承子さんを招いての講演会（外部に公開、白門祭期間中の 11 月 1 日）、b) 生協店舗での募金活動（10 月 28 日・29 日）、c) 多摩センター駅前での募金活動（12 月 4 日・6 日）、それぞれを実施し、途上国の子どもたちの健康および予防接種について学習。集まった約 14 万 5,000 円の寄付金は世界の子どもたちにワクチンを届けてもらうために寄付

28) 日本の地方におけるコミュニティ防災について学ぶ

対象演習：B

実施期間：2019 年 11 月 2 日（土）～3 日（日）

実施場所：盛岡ふれあい覆馬場プラザ（岩手県盛岡市）

実施内容/成果：盛岡の NGO によって実施された防災イベント「カエルキャラバン」に参加し、盛岡市住民が何を通じて防災を学び、どの程度の防災に関する知識を有し、どの程度コミュニティでその知識を共有し、どの程度コミュニティで防災活動をしているのかについて学習

29) バイ（二国間）の援助機関が行なう国際協力について学ぶ

対象演習：A・B・C

実施期間：2019 年 11 月 12 日（火）

講演者：戸川 正人 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）監事）
川本 寛之 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）青年海外協力隊事務局海外業務第一課課長）
田中 理 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）国際協力人材部健康管理課課長）

演 題：アジア、アフリカ等途上諸国の開発と JICA の役割

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7102 教室・7507 教室

実施内容/成果：サブサハラアフリカおよびアジアにおいてバイ（二国間）の援助機関である JICA がどのような国際協力を実施しているのかについて、また、国際協力分野にはどのような仕事があり、そのような仕事に従事するためにはどのような能力が求められているのかについて学習

30) 日本の都市部におけるコミュニティ防災について学ぶ

対象演習：B

実施期間：2019 年 11 月 17 日（日）

実施場所：一寺言問集会所（東京都墨田区）

実施内容/成果：東京都の NGO によって実施された防災イベント「カエルキャラバン」に参加し、墨田区住民が何を通じて防災を学び、どの程度の防災に関する知識を有し、どの程度コミュニティでその知識を共有し、どの程度コミュニティで防災活動をしているのかについて学習

31) フィリピン研究の論文で注意すべき点について学ぶ

対 象 演 習 : B

実 施 期 間 : 2019 年 11 月 19 日 (火)

実 施 場 所 : 独立行政法人国際協力機構 (JICA) 本部 (東京都千代田区)

実施内容/成果 : 戸川氏、川本氏、田中氏 (11 月 12 日に特別授業を実施) をはじめとする JICA の人たちの前で、学生たちが論文の中間報告を行ない、助言、コメント、情報等をもらい、今後修正すべき点を学習

32) マルチ (多国間) の援助機関が行なう国際協力について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 11 月 26 日 (火)

講 演 者 : 大森 功一 氏 (世界銀行東京事務所上級広報担当官)

演 題 : アフリカをはじめとする途上諸国における開発課題と世界銀行の役割

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7507 教室

実施内容/成果 : サブサハラアフリカにおいてマルチ (多国間) の援助機関である世界銀行がどのような国際協力を実施しているのかについて、また、世界銀行をはじめとする国際機関にはどのような仕事があり、そのような仕事に従事するためにはどのような能力が求められているのかについて学習

33) サブサハラアフリカで実施する技術協力プロジェクトについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 12 月 10 日 (火)

講 演 者 : 石川 渚 氏 (株式会社 JIN 開発コンサルタント)

演 題 : 途上国開発の現場 : ウガンダ、ナイジェリアにおける技術協力の事例から

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7102 教室、・7507 教室

実施内容/成果 : サブサハラアフリカのウガンダで実施している「北部ウガンダ生計向上支援プロジェクト」およびナイジェリアで実施している「ナイジェリアの栄養改善能力強化プロジェクト」の Progress を説明してもらい、日本のサブサハラアフリカ向け技術協力プロジェクトについて学習

【参考 URL】

1) フェアトレード・フェアを実施

<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/05/10670/>

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/11/11657/>

2) 特別授業 (アジア・コミュニティ・センター21) を実施

<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/06/10798/>

3) 特別授業 (日本赤十字社) を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/06/10851/>

4) 特別授業 (三井物産) を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/10/11338/>

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2019/09/45644/>

5) ユニセフ関連のイベントを実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2020/01/11842/>

6) 特別授業（JICA）を実施

<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/12/11717/>

7) 特別授業（世界銀行）を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2020/01/11853/>

8) 特別授業（JIN）を実施

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2019/12/47315/>

FLP演習C

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・衛生・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1年単位のゼミではなく、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェア・トレード

<活動内容>

2019年度は、特に卒業論文の完成に向けて、研究計画書作りと幾度にもわたる論文の中間報告に時間を割きました。メンバー全員が卒業（修了）論文を書きあげました。卒業論文の作成に加えて、下記のように、外部から専門家を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、研究に必要な知識や情報の獲得に努めました。

本年度は、下記の通り、2019年10月から12月にかけて、高校4校、中学校1校に対して訪問授業を自主的に実施し、ゼミ学生がこれまで学んだり、経験したりした開発、国際協力関連のことをより若い世代に伝えるとともに、学生自身の知識の整理を行ないました。また、前年度までと同様、日本ユニセフ協会と連携して、講演会、募金活動を企画し、10月から11月にかけて実施しました。

前年度までの活動で得た知識・経験、本年度の活動の結果は、訪問授業、オープンキャンパスの模擬授業、FLP 国際協力プログラム期末成果報告会等を利用して発表しました。活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。



中央大学高校で訪問授業を実施

【訪問授業等】

1) 訪問授業（自主的に実施）

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 10 月～12 月（下記「訪問リスト」を参照）

実 施 場 所 : 高校 4 校・中学校 1 校（下記「訪問リスト」を参照）

実施内容/成果：前年度に実施した海外現地調査（インドネシア）の経験や結果を材料として使用しながら、途上国の基礎的な状況、貧困の特徴、貧困に陥る要因、貧困解決の方法等について「国際協力セミナー」というテーマで高校生に対して参加型の授業/ワークショップを実施。授業時に高校生と中学生に対して質問票を配布し、開発教育の効果、開発教育で留意すべきこと等についての調査も実施。高校生と中学生に対する途上国の開発・国際協力の啓発推進や情報提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習

訪問先リスト

訪問先	日時	対象学年	コマ数
中央大学附属横浜中学校	10 月 23 日	中学 2 年生	5 コマ
	11:45～15:10		
	10 月 25 日		
中央大学附属高校	8:45～11:35	高校 2 年生	1 コマ
	11 月 7 日		
	15:30～16:30		

中央大学杉並高校	11 月 15 日 16:00～17:30	高校 1～3 年生	1 コマ
中央大学高校	11 月 18 日 14:00～15:50	高校 2 年生	1 コマ
神奈川県立相模原高校	12 月 9 日 15:10～15:50	高校 1 年生	1 コマ

2) 模擬授業（白門祭期間のミニオープンキャンパス）

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 11 月 4 日（月）

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 3114 教室

実施内容/成果 : 前年度に実施した海外現地調査（インドネシア）の経験や結果を材料として用い、特にインドネシアの乳幼児への予防接種（ワクチン）に焦点を当てて、ミニオープンキャンパスに参加してくれた高校生やその保護者に対して模擬授業を実施。途上国の予防接種と乳幼児の健康の現状把握や解決策検討の機会提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1) フェアトレードについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 5 月 20 日（月）～24 日（金）・11 月 1 日（金）～4 日（月）・
11 月 18 日（月）～22 日（金）

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 生協店舗、ペデ下生協店舗前

実施内容/成果 : a) 5 月と 11 月の 2 回、中央大学生協の店舗でフェアトレード・フェアを、b) 11 月の白門祭でフェアトレード商品の販売会をそれぞれ開催し、実践的にフェアトレードを学習すると同時に、学内の学生、教職員にフェアトレードを普及、啓蒙・啓発

2) フィリピンのストリートチルドレンについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 5 月 28 日（火）

講 演 者 : 伊藤 道雄 氏（特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター 21）

辻本 紀子 氏（特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター 21）

演 題 : フィリピンの路上で暮らす若者に雇用と未来を：ストリートチルドレン・ゼロに向けた ACC21 の挑戦

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7203 教室・7409 教室

実施内容/成果：アジア・コミュニティ・センター21（ACC21）が、フィリピンのカウンターパート、ChildHope とともに実施している、フィリピンのストリートチルドレン向け人づくり支援プロジェクトの現状と成果、問題点について学習

3) 途上国の防災分野における国際協力について学ぶ

対象演習：A・B・C

実施期間：2019年6月4日（火）

講演者：辻 佳輝 氏（日本赤十字社事業局救護・福祉部防災業務課課長）

演題：イラク、マレーシア、インドネシアにおける難民保護、災害復興と開発協力：UNHCR と日本赤十字社での経験から

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7203 教室・7409 教室

実施内容/成果：JICA、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）、外務省を経て日本赤十字社に勤務する講演者から、イラク、マレーシア、インドネシアで経験した事業の説明をしてもらい、難民保護活動、災害後の緊急支援、復興支援について学習

4) 中国における日本の外交と国際協力について学ぶ

対象演習：A・B・C

実施期間：2019年6月6日（木）

講演者：入江 遥 氏（外務省）

演題：対中国の日本の外交戦略と国際協力

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7507 教室

実施内容/成果：中国に対する日本の外交戦略および国際協力の概要および課題について学習

5) 人材育成分野における国際協力について学ぶ

対象演習：A・B・C

実施期間：2019年6月11日（火）

講演者：町田 晋太郎 氏（一般財団法人日本国際協力センター（JICE））

演題：ODA を通じての途上国向け人材育成事業

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7507 教室

実施内容/成果：JICE がこれまで実施してきた日本の大学院等で学位を取得するための支援を行なう留学生受入支援事業や海外から研修生や視察者を招いて行なう国際研修事業を説明してもらい、日本の ODA を通じての途上国向け人材育成事業について学習

6) 仕事としての国際協力について学ぶ

対象演習：A・B・C

実施期間：2019年6月18日（火）

講演者：松本 彰 氏（A&M コンサルタント有限公司）

演題：開発コンサルタントが経験した途上国における国際協力

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7409 教室

実施内容/成果：講演者の30年以上にわたる国際協力の経験から、これまで実施してきた国際協力の具体的な内容、国際協力に求められていること、国際協力に従事する際に気をつけること等について学習

7) 商社の国際協力について学ぶ

対 象 演 習：A・B・C

実 施 期 間：2019年9月24日（火）

講 演 者：山田 晃一 氏（三井物産株式会社プロジェクト本部プロジェクト開発第二部第二営業室マネージャー）

演 題：世界から電気のない村をなくそう：アジア・アフリカにおける分散電源への挑戦

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7102 教室・7507 教室

実施内容/成果：アジア、アフリカの途上諸国で山田氏が進めている三井物産の「分散型太陽光発電事業」の詳細を説明してもらい、商社が民間ベースで行なっている国際協力について学習

8) ユニセフの予防接種分野における支援活動について学ぶ

対 象 演 習：A・B・C

実 施 期 間：2019年10月28日（月）・29日（火）、11月1日（金）、12月4日（水）・6日（金）

講 演 者：高円 承子 氏（日本ユニセフ協会学校事業部）

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 5401 教室、中央大学 多摩キャンパス 生協店舗、多摩センター駅前

実施内容/成果：日本ユニセフ協会と連携して、a) 高円承子さんを招いての講演会（外部に公開、白門祭期間中の11月1日）、b) 生協店舗での募金活動（10月28日・29日）、c) 多摩センター駅前での募金活動（12月4日・6日）、それぞれを実施し、途上国の子どもたちの健康および予防接種について学習。集まった約14万5,000円の寄付金は世界の子どもたちにワクチンを届けてもらうために寄付

9) バイ（二国間）の援助機関が行なう国際協力について学ぶ

対 象 演 習：A・B・C

実 施 期 間：2019年11月12日（火）

講 演 者：戸川 正人 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）監事）

川本 寛之 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）青年海外協力隊事務局海外業務第一課課長）

田中 理 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）国際協力人材部健康管理課課長）

演 題：アジア、アフリカ等途上諸国の開発と JICA の役割

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7102 教室・7507 教室

実施内容/成果：サブサハラアフリカおよびアジアにおいてバイ（二国間）の援助機関である JICA がどのような国際協力を実施しているのかについて、ま

た、国際協力分野にはどのような仕事があり、そのような仕事に従事するためにはどのような能力が求められているのかについて学習

10) マルチ（多国間）の援助機関が行なう国際協力について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 11 月 26 日（火）

講 演 者 : 大森 功一 氏（世界銀行東京事務所上級広報担当官）

演 題 : アフリカをはじめとする途上諸国における開発課題と世界銀行の役割

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7507 教室

実施内容/成果 : サブサハラアフリカにおいてマルチ（多国間）の援助機関である世界銀行がどのような国際協力を実施しているのかについて、また、世界銀行をはじめとする国際機関にはどのような仕事があり、そのような仕事に従事するためにはどのような能力が求められているのかについて学習

11) サブサハラアフリカで実施する技術協力プロジェクトについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2019 年 12 月 10 日（火）

講 演 者 : 石川 渚 氏（株式会社 JIN 開発コンサルタント）

演 題 : 途上国開発の現場：ウガンダ、ナイジェリアにおける技術協力の事例から

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7102 教室・7507 教室

実施内容/成果 : サブサハラアフリカのウガンダで実施している「北部ウガンダ生計向上支援プロジェクト」およびナイジェリアで実施している「ナイジェリアの栄養改善能力強化プロジェクト」の Progress を説明してもらい、日本のサブサハラアフリカ向け技術協力プロジェクトについて学習

【参考 URL】

1) フェアトレード・フェアを実施

<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/05/10670/>

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/11/11657/>

2) 特別授業（アジア・コミュニティ・センター21）を実施

<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/06/10798/>

3) 特別授業（日本赤十字社）を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/06/10851/>

4) 特別授業（三井物産）を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/10/11338/>

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2019/09/45644/>

5) ユニセフ関連のイベントを実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2020/01/11842/>

6) 特別授業（JICA）を実施

<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2019/12/11717/>

7) 特別授業（世界銀行）を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2020/01/11853/>

8) 特別授業（JIN）を実施

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2019/12/47315/>

(4) 清水 武則 (商学部・特任教授)

FLP 演習 A・B

<テーマ>

モンゴルにおける観光産業発展の可能性 (現地貢献型ゼミ)

<授業の概要>

【A 生】

本ゼミは途上国支援の実務経験を有する中大 OB で在モンゴル大使を務めた教員の指導の下に、開発途上国の具体的課題と解決方法を探求するもの。モンゴルやベトナム、ミャンマーと言った開発途上国の情報収集と分析のためゼミ員はネット等を積極的に活用し情報集収を行う。また、卓上調査に加え、本ゼミでは、モンゴル最高学府であるモンゴル国立大学日本語学科とも協力。更に、卓上調査に加え、開発途上国で活躍する先輩 OB、OG、有名商社や金融、国際旅行で活躍する社会人や大使館員との面談や交流を行ったりしながら、その過程で学生のリサーチ力、対人関係能力、分析力、論理構成能力、プレゼンテーション能力を鍛え国際人として活躍する基礎を養成する。

【B 生】

2 年次のリサーチをさらに専門的に掘り下げるため、インターネット情報のみならず、内外のモンゴル関係者や観光業専門家のインタビューなどを中心にしつつも、モンゴルにおけるフィールドワークに重点をおいて引きつづき、モンゴルの観光産業の可能性と課題について探求する。

<活動内容>

A ゼミ生は、前期においては、担当教授によるモンゴルの政治経済文化歴史、観光事情等の基礎講座に参加して、モンゴル事情の把握に努めたほか、各自がモンゴル以外のアジアの開発途上国の観光事情 (観光地、特色、お土産等) をリサーチして発表した。9 月に行った現地調査では、B ゼミ生とともに、南ゴビの恐竜の故郷として著名な観光地であるバヤンザク (炎の崖) 周辺の観光事情を調査した。また、首都では外務省、モンゴル観光協会、モンゴル国立大学観光専門家等にインタビューしたほか、モンゴル国立大学日本語学科、ハンガイ大学学生とモンゴルのデパートやお土産売り場を探索し、日本人向けのお土産があるか否かを調査した。更に、モンゴルを訪問中の日本人に対して、モンゴル観光に対する評価に関するアンケート調査を実施した。また、モンゴル国立大学日本語学科、新モンゴル高校、太陽日本語学校を訪問し日本とモンゴルについて意見交換を実施した。これらのリサーチを報告書として作成した。

B ゼミ生は、後期は A ゼミ生と基本的に同じであるが、前期においては、モンゴルの観光情報を SNS などで発信する方途を研究したり、モンゴルで実施するアンケートの作成等の活動を行いゼミ内で発表した。A ゼミ生同様、総括報告書を作成した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2019年5月21日(火)

講演者：安達 要吉 氏(株式会社MJツアーズ)

演 題：海外旅行の現状と課題

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 5204教室

実施内容：モンゴル観光の草分けであり、日本ツアーオペレーター協会の会長を歴任した人の、モンゴル観光の魅力と課題等の講義を受けた。

成 果：日本のモンゴル向け観光の現状を理解し、モンゴルでの実施したリサーチ結果をまとめるにも有益であった。

対象演習：A・B

実施日：2019年6月25日(火)

講演者：アルザフグイ・デルゲルマー 氏(在京モンゴル大使館)

演 題：モンゴル経済の現状と観光開発

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 5204教室

実施内容：モンゴル経済とモンゴルの観光の現状についての講義を受けた。

成 果：モンゴル訪問前に、モンゴル経済や観光の基礎知識を獲得する上で大変有益であった。

対象演習：A・B

実施日：2019年9月4日(水)～14日(土)

実施都市：ウランバートル(モンゴル)

実施場所：モンゴル国ウランバートル市南ゴビ県・他

実施内容：観光地であるゴビ視察(地方のツーリズムの現状)、首都でモンゴル政府・観光関係者との懇談、大使館、JICA、三菱商事訪問、国立大学日本語学科とハンガイ大学学生とお土産共同リサーチ、日本人観光客へのアンケート実施、モンゴル国立大学、新モンゴル学園、太陽日本語学校での日本語学習者との交流、草原マラソンへの参加などを行った。

成 果：総括報告書を作成したが、現地事情視察が十二分に反映されている。

(5) 武石 智香子 (商学部・教授)

F L P 演習 A・B

<テーマ>

Diversity and Organizing Principle

<授業の概要>

地球規模課題の解決には、異なる文化的・社会的背景を持つ人々の間での意思決定が成立することが不可欠である。1年次において異文化コミュニケーションの難しさや、“financial freedom”という新しい考え方の潮流について気づきがあった。その問題意識を土台にして、国際的に伝承している組織原理に関する古典・実証分析の考え方・質的調査について学ぶ。

課題 1 (春学期～秋学期) 国際的に読まれている組織原理の古典について英語で読んで各人の考えをまとめ、討論をする。

課題 2 (春学期～夏季) 移民と異文化コミュニケーションについて調査企画と実施。

課題 3 (秋学期) 英語で term paper を書いて提出する。

<活動内容>

武石ゼミ B は、前期に「国民」と「民族」、および「組織原理」に関する古典について熟考し、真に国際的な組織原理の在り方について考えることとなった。文化的多様性を維持しながら、排他的にならない国の在り方には何が必要か。これまで移民を受け入れ、そしてそれが EU 離脱の大きな問題となった英国に実態調査に行くこととなった。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習 : B

実施日 : 2019年7月2日(火)

講演者 : 福島 由利子 氏 (ウェラワーリー)

演題 : 日本における外国人女性に対するDVの現状と被害者支援について

実施施設 : 中央大学 多摩キャンパス 5601教室

実施内容 : 日本におけるDV問題が深刻である中で、特に外国人の妻が被害を受けやすいことについて、データに基づいた講演がなされた。

成果 : 日本における外国人妻に対するDVの凄惨な実態と、子ども世代への深刻な影響について、次世代社会の中核となる学生たちが当事者意識を持つことが出来た。

対象演習 : B

実施日 : 2019年10月29日(火)～11月5日(木)

実施都市 : ロンドン (イギリス)

実施場所 : Institute of Directors・他

実施内容 : 下記の日程で実態調査を実施した。

2019年10月30日 (水)

ドーハ経由 ヒースロー空港着

2019年10月31日（木）

09:30-11:00 EBRD

12:00- Institute of Directors 本部建物見学・昼食兼懇親会

19:00- Oriental Club 建物見学・夕食

2019年11月1日（金）

09:00- Federico Farini博士

12:00- Migration Museum

2019年11月2日（土）

Black Archives Museum

14:00- 2-hour East London Walking Tour

18:00- So Restaurant

2019年11月3日（日）

バッキンガム宮殿・大英博物館

2019年11月4日（月）→11月5日（火）

17:55- 成田空港着

成 果：日本人として育ち、英国で暮らす、ロンドン白門会の先輩方より、大変貴重な体験の機会を与えて頂いた。Oriental Club やInstitute of Directors など、英国の上流階級ネットワークの世界を垣間見ることが出来た。同じくロンドン白門会からは、何日にも渡って温かい薫陶を受けることができ、So Restaurant など、先輩方の起業家精神にあふれるロンドンでの生き様から、学生たちは大きな刺激を受けていた。

EBRD では、世界的な問題となっている AMR の問題について話を聞き、世界的な課題に対してアンテナを張り続けることが重要であることについて、日本での自分たちの日常と比較しつつ、学生たちは痛感するところ大であった。

学生が自分たちでアポをとったFarini博士、移民博物館、そしてブラックアーカイブミュージアムでは、先の英国のきらびやかな上流階級とは対照的な「移民」の適応までの道程、特に、自ら移民の道を選んだ第一世代に対し、知らぬ間に文化的葛藤の中にのみ込まれていく第二世代のアイデンティティの問題について深く考える機会を与えてくれた。その適応ためのコミュニティとインテグレーション、そしてアートの大切さについて、Brixton Tour などからも実地で学ぶことが出来た。



EBRD



Institute of Directors



Oriental Club



Interview with Dr. Farini



Migration Museum



Brixton Tour

FLP演習C

<テーマ>

Diversity and Organizing Principle

<授業の概要>

地球規模課題の解決には、異なる文化的・社会的背景を持つ人々の間での意思決定が成立することが不可欠である。FLP1 年次において国内の問題であっても意思決定が非常に難しいことを学び、2 年次において移民との異文化コミュニケーションのあり方について模索した、その問題意識を土台にして、国際的に伝承している組織原理に関する古典の考え方を学び、質的調査を実施した。

<活動内容>

FLP 武石ゼミ C 生は、A 生の頃より一貫してダイバーシティと社会的弱者の問題に取り組み、同 2017 年度においてはさらに、米国からフルブライト教員をお招きして、米国では国内の問題であっても意思決定が非常に難しいことを学んだ。B 生としては、自分たちの世代においておそらく最も深刻な日本の問題、すなわち、少子高齢化の問題を、世界に通用する多様性の尊重という観点に配慮しながら、世界の課題先進国としての解決法を考えるべく、まずは移民との異文化コミュニケーションのあり方について模索した。C 生としては、通底するダイバーシティおよび異文化コミュニケーション尊重という問題意識を土台にして、先進課題に関する IT を使った問題のソリューションの可能性についてヒントを得るため、中国上海・杭州・蘇州において質的調査を実施した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2019年8月30日(金)～9月6日(金)

実施都市：上海・杭州・蘇州（中国）

実施場所：上海理工大学・浙江工業大学・他

実施内容：都市と地方の格差縮小に活用できるか

成果：下記の日程で実態調査および交流会を実施した。

Aug 31 (Sat) 到着（蘇州）拙政園・常熟玖树

Sep 1st (Sun) 西湖

Sep 2nd (Mon)（杭州）浙江工業大学・亲橙里(チンチェンリー)・アリババ城下町

Sep 3rd (Tue)（上海）理工大学

Sep 4th (Wed) コクヨ訪問・互人多訪問

Sep 5th (Thu) 富士通訪問

Sep 6th (Fri) 上海発帰国



蘇州 拙政園



蘇州のホテル



杭州 浙江工業大学



アリババ城下町



上海理工大学





コクヨ上海



互人多



富士通上海



(6) 平澤 敦 (商学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

企業・産業の国際比較～グローバル思考養成のために

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

平澤敦ゼミ A は、「Peach はアジアでリーディング LCC になりうるのか～Peach のビジネスモデルを手掛かりとして～」(4 名、以下 LCC 班)、「インバウンド需要拡大に伴う宿泊施設の不足解消に向けての一提案 ～ポータルサイト活用による民泊推進に注目して～」(4 名、以下民泊班)、「流行にハマる若年女性の消費者行動に関する一考察～タピオカブームのケースに注目して～」(4 名、以下タピオカ班)をそれぞれグループテーマとして研究を進めた。

LCC 班は IATA のデータや、各地域の LCC の普及度について現状分析を行い、Peach 社の取り組みから、リーディング LCC になれる可能性があるのではないかと考え、その理由づけや客観性について考察した。

民泊班は、わが国における宿泊施設の不足という観点に着目し、わが国における民泊の現状分析等を通じ、ポータルサイトを活用してより民泊の普及促進が可能になるのではないかという点につき考察を重ねた。

タピオカ班は、現在若年女性の間で普及しているタピオカに着目し、消費者行動論の観点から、その特異性を考察した。タピオカはその味というよりも、インスタグラムとのタイアップで、若年女性の注目の的となり、これらは若年女性にみられる特異な消費者行動のケースではないかと捉えた。

これらの研究成果は、年度末成果報告会にて公表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・C

実施日：2019年10月10日(木)～14日(月)

実施都市：シンガポール(シンガポール)

実施場所：JETROシンガポール事務所・他

実施内容：シンガポールにおける宿泊事情、和牛ブランド、タピオカ飲料、LCCの普及度についてのヒアリング

成果：宿泊事情については、現地のホテル(セントレジス等)の見学およびホテルと民泊の事情、和牛ブランドについては現地スーパーの見学、品揃え割合、タピオカ飲料については各店舗での売り上げ推移、LCCについてはフラッグキャリア等との利用率の問題等につき調査を通じて成果が得られた。

対象演習：A

実施日：2019年10月25日(金)

実施都市：東京都中央区

実施場所：ハーチ株式会社

実施内容：民泊に関するポータルサイトのケースについてヒアリング

成果：ポータルサイトの構成要素を考察する上で様々な示唆が得られた。

F L P 演習 B

<テーマ>

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

平澤敦ゼミ B は、本年度、「新興国におけるスマートシティの課題と展望」(2名)および「ムスリムフレンドリーな日本へ」(4名)をテーマとし、研究を行った。前者については世界における位置づけを概観した後、アジア地域に絞ってその動向を把握し、マレーシアにおけるイスカンダル計画に着目して考察を重ねた。後者については、特ハラール認知やハラール食に着目し、ハラール食の受入れの環境整備について研究を進めた。

これら研究の成果は年度末の成果報告会にて公表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2019年10月30日(水)～11月3日(日)

実施都市：クアラルンプール(マレーシア)

実施場所：JETROクアラルンプール・他

実施内容：スマートシティの現況およびハラール認知等についてヒアリングを行った。

成果：イスカンダル計画のメリット、デメリットおよびその現況、ハラールの認知、ハラールの食堂等を訪問し、それぞれ問題点についての回答を得て、研究にフィードバックすることができた。

F L P 演習 C

<テーマ>

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

平澤敦ゼミCは、本年度、和牛ブランドのアジアにおける認知を研究テーマとした。

和牛ブランドが実際のところ正しく認知されていないのではないかという問題意識のもと、マーケティングにおけるブランディングを応用させて研究を進め、成果報告会にて公表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・C

実施日：2019年10月10日(木)～14日(月)

実施都市：シンガポール（シンガポール）

実施場所：JETROシンガポール事務所・他

実施内容：シンガポールにおける宿泊事情、和牛ブランド、タピオカ飲料、LCCの普及度についてのヒアリング

成果：宿泊事情については、現地のホテル（セントレジス等）の見学およびホテルと民泊の事情、和牛ブランドについては現地スーパーの見学、品揃え割合、タピオカ飲料については各店舗での売り上げ推移、LCCについてはフラッグキャリア等との利用率の問題等につき調査を通じて成果が得られた。

(7) 高橋 宏明 (文学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

東南アジアにおける社会発展と文化協力

<授業の概要>

20 世紀後半以降、東南アジア大陸部の国々 (タイ、ミャンマー、ベトナム、カンボジア、ラオス) では、民主化と人権弾圧、経済発展と社会格差、貧困削減と人間開発、民族対立と宗教紛争、児童労働と人身売買、文化遺産保存修復活動と観光開発など、さまざまな問題に直面してきました。21 世紀に入り、各国は、グローバル化の中で、急激な経済成長を遂げる一方、国内には多くの課題を抱えています。

本授業では、こうした問題を解決に導く一つの方法として、社会開発と文化協力の視点からアプローチします。文献研究とフィールド調査を進めながら、現地社会を内在的に理解し、現地社会に適した解決方法を模索し、提示していきます。

<活動内容>

2019 年度の本授業では、前期は、2 つのグループ (4 人一組×2 グループ) に分かれて「グループ・リサーチ」、「グループ・ディスカッション」、「グループ・プレゼンテーション」等の授業形式で進めつつ、①情報収集・読解・分析・編集の力、②問題発見・解決力③文書作成・計画立案・策定力、等の能力を向上することに力を注ぎました。その過程で、現地調査に必要な専門的技術と幅広い知識を習得し、8 月のカンボジア現地調査の諸準備を進めました。

後期は、カンボジア現地調査の結果を踏まえ、個人発表 (毎回 1~2 名) とグループ発表 (毎回 1 グループ) を繰り返し、全体討論を積み重ねて、12 月の国際プログラムの報告会に向けて発表の準備をしました。その過程で、個人研究テーマを発展させ、個々の研究力 (情報収集・分析力と文書作成力) やプレゼンテーション力の向上に努めました。

<実態調査>

対象演習 : A

実施日 : 2019年8月27日 (火) ~ 9月8日 (日)

実施都市 : プノンペン・シエムリアップ (カンボジア)

実施場所 : プノンペン大学、カンボジア日本人材開発センター (CJCC)、文化芸術省、ジャパンハート、公益財団法人CIESF、難民を助ける会、カンボジア地雷対策センター (CMAC)、共生フォーラム、プノンペン国立博物館・他

実施内容 : プノンペン市内では、プノンペン大学、カンボジア日本人材開発センター (CJCC)、文化芸術省対外関係局、日本のNGOであるジャパンハート、難民を助ける会・車いす工房、公益財団法人CIESF・リーダーズアカデミーを訪問し、経済成長著しい中で各種の教育機関が直面する課題、紛争後の社会復興の進捗状況、開発援助の進展具合などについて、聞き取り調査を実施しました。また、JICA専門家

や現地NGOスタッフを個別に訪ね、近年の社会変化や経済格差などに関するテーマでインタビューを行いました。

シエムリアップ市内では、アンコール遺跡保存事務所、カンボジア地雷対策センター(CMAC)地雷博物館、共生フォーラム・職業訓練校などを訪問し、地方における社会復興の現況、教育事情と教育機関の課題、経済開発状況などについて、聞き取り調査を行いました。

- 成 果：経済成長の著しい首都プノンペンと地方の観光都市シエムリアップを調査することによって、都市部と地方社会の比較・考察が可能となり、途上国の多様な経済成長の進捗状況、進行過程を肌で実感することができました。また、グローバル化の進む世界の現状を、同時代に生きる我われ自身の問題として理解できるようになりました。同時に、脱紛争国カンボジアにおける経済発展の光と影、貧富の格差の実相、社会矛盾などを垣間見る契機となりました。
- 同調査内容の詳細については、12月の国際協力プログラムの報告会にて、2名の個人発表（「経済発展と医療格差」「内戦の地雷被害者の戦後社会復帰支援」と2つのグループ発表（「交通インフラ事業から考える国際援助の在り方」「教育から見るカンボジアの発展とNPOのあり方」）として報告されました。さらに、FLP国際協力プログラムの現地実態報告書として、8本のレポートにまとめられました。各ゼミ生にとって、こうした現地体験および現地実態調査は、個々人の学びの動機づけの明確化、モチベーションの向上、そして将来の目標設定に繋がったと考えられます。

(8) 新原 道信 (文学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する国際フィールドワーク

<授業の概要>

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係(「国際協力」の根幹となるべき関係性)〉を創るのか?——いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手——〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さんや『バナナと日本人』『東南アジアを知る』などの著者・鶴見良行さん——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや鶴見さんのような方をお手本としつつ、以下のようなかたちで、“フィールドワークの力(自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力)”を蓄えていきます。

(1) 社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解します。

(2) それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、異質で多様なひとたちと“ともに創ることを始める”ためのフィールドワークの方法を学んでいきます。私(新原)がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えします。

(3) 国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査(国際フィールドワーク)にむけて準備をすすめていきます。

海外実態調査は、計画立案・実施も含めてゼミ生中心に実行していきます。またゼミの途中で留学や長期の国際フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部(法、経、商、文、総合政策、理工)から多才な学生が集まり、総勢90名で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4 ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。

普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、新潟県魚沼市と台湾でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、台湾調査の充実に努めました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2019年8月19日(月)～21日(水)

実施都市：新潟県魚沼市

実施場所：魚沼市内

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめた。国際ゼミ生は、台湾のフィールドとの比較研究を行いました。

対象演習：A・B・C

実施日：2019年8月27日(火)～31日(土)

実施都市：台北市(台湾)

実施場所：国軍歴史文化館・他

実施内容：事前行った横浜等でのフィールドワーク、魚沼でのフィールドワークと比較し、台湾における観光開発、アイデンティティ、コロニアリズムなどの切口から地域調査を行いました。

成 果：ゼミのなかで研鑽を積んできた国際フィールドワークの手法を実践し、台湾社会の構造の把握と台湾人の情動を理解することを達成しました。その成果は、成果報告会および成果報告書（ゼミ論文集）のかたちでとりまとめました。内容的には、例年以上の充実したものとなりました。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019年9月9日（月）～11日（水）

実施都市：新潟県魚沼市

実施場所：魚沼市内

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成 果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。国際ゼミ生は、台湾のフィールドとの比較研究を行いました。

FLP演習B

<テーマ>

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する国際フィールドワーク

<授業の概要>

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係（「国際協力」の根幹となるべき関係性）〉を創るのか？——いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手——〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さんや『バナナと日本人』『東南アジアを知る』などの著者・鶴見良行さん——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや鶴見さんのような方をお手本としつつ、以下のようなかたちで、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきます。

(1) 社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解します。

(2) それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、異質で多様なひとたちと“ともに創ることを始める”ためのフィールドワークの方法を学んでいきます。私（新原）がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えします。

(3) 国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査（国際フィールドワーク）にむけて準備をすすめていきます。海外実態調査は、計画立案・実施も含めてゼミ生中心に実行していきます。またゼミの途中で留学や長期の国際フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢90名で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、

調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4 ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。

普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、新潟県魚沼市と台湾でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、台湾調査の充実に努めました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2019年8月19日(月)～21日(水)

実施都市：新潟県魚沼市

実施場所：魚沼市内

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめた。国際ゼミ生は、台湾のフィールドとの比較研究を行いました。

対象演習：A・B・C

実施日：2019年8月27日(火)～31日(土)

実施都市：台北市(台湾)

実施場所：国軍歴史文化館・他

実施内容：事前行った横浜等でのフィールドワーク、魚沼でのフィールドワークと比較し、台湾における観光開発、アイデンティティ、コロニアリズムなどの切口から地域調査を行いました。

成果：ゼミのなかで研鑽を積んできた国際フィールドワークの手法を実践し、台湾社会の構造の把握と台湾人の情動を理解することを達成しました。その成果は、

成果報告会および成果報告書（ゼミ論文集）のかたちでとりまとめました。内容的には、例年以上の充実したものとなりました。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019年9月9日（月）～11日（水）

実施都市：新潟県魚沼市

実施場所：魚沼市内

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成 果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。国際ゼミ生は、台湾のフィールドとの比較研究を行いました。

FLP演習C

<テーマ>

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する国際フィールドワーク

<授業の概要>

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係（「国際協力」の根幹となるべき関係性）〉を創るのか？——いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手——〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さんや『バナナと日本人』『東南アジアを知る』などの著者・鶴見良行さん——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや鶴見さんのような方をお手本としつつ、以下のようなかたちで、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきます。

(1) 社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解します。

(2) それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、異質で多様なひとたちと“ともに創ることを始める”ためのフィールドワークの方法を学んでいきます。私（新原）がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えします。

(3) 国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査（国際フィールドワーク）にむけて準備をすすめていきます。海外実態調査は、計画立案・実施も含めてゼミ生中心に実行していきます。またゼミの途中で留学や長期の国際フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢90名で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、

調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4 ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。

普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、新潟県魚沼市と台湾でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、台湾調査の充実に努めました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2019年8月19日(月)～21日(水)

実施都市：新潟県魚沼市

実施場所：魚沼市内

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめた。国際ゼミ生は、台湾のフィールドとの比較研究を行いました。

対象演習：A・B・C

実施日：2019年8月27日(火)～31日(土)

実施都市：台北市(台湾)

実施場所：国軍歴史文化館・他

実施内容：事前行った横浜等でのフィールドワーク、魚沼でのフィールドワークと比較し、台湾における観光開発、アイデンティティ、コロニアリズムなどの切口から地域調査を行いました。

成果：ゼミのなかで研鑽を積んできた国際フィールドワークの手法を実践し、台湾社会の構造の把握と台湾人の情動を理解することを達成しました。その成果は、

成果報告会および成果報告書（ゼミ論文集）のかたちでとりまとめました。内容的には、例年以上の充実したものとなりました。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019年9月9日（月）～11日（水）

実施都市：新潟県魚沼市

実施場所：魚沼市内

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成 果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。国際ゼミ生は、台湾のフィールドとの比較研究を行いました。

(9) 野宮 大志郎 (文学部・教授)

FLP演習C

<テーマ>

世界に働きかける：グローバルな市民社会活動の創造

<授業の概要>

社会は、その中に住む個人を強制しある特定の方向に仕向ける力を持つ。戦争での兵隊志願者はその最たる現れであろう。しかし、個人はその「社会の力」にだまって従うばかりではない。自分の権利や考えに基づき、時には社会の力に抗しても行動する主体さらには社会変革を担うエージェンシーとなりうる。そうしたエージェンシーとしての個人が集まることで市民社会が成立する。

本演習では、社会の構造的力から観察を始め、その力に対抗するもの、変革をめざすものとしてのエージェンシーをまず理解する。次に、市民社会概念について理解し、かつ実際にそれがどの様に現れるかを学ぶ。最後に、市民社会の現代的現れであるグローバル市民社会についていくつかの事例を観察して学ぶ。

本演習の最終的な目標は、たとえ小さなことでも自ら社会に対して働きかけ、社会に資する行動や理解を創り出していく人を育てることである。

(10) 中迫 俊逸 (国際経営学部・教授)

FLP 演習 A・B

<テーマ>

ビジネス・コミュニケーションとその関連分野の研究

<授業の概要>

本演習においては、(1) 異文化コミュニケーションの理論と実践の研究(2) 海外研修及び(3) ビジネス英語のトレーニングを行いました。ビジネス・コミュニケーションの研究においては、受講生による個人発表を行っていただきました。海外研修では、マレーシアとドバイに行き、日系企業や現地企業等でインタビューを行いました。インタビュー項目は各種文献等を通じて作成し、インタビュー相手に事前に送付するのでかなり早い段階から準備を行いました。また、研修後は報告書の作成と FLP 国際協力期末成果報告会で口頭発表を行っていただきました。ビジネス英語のトレーニングとしては、ほぼ毎回の講義で音声教材とほぼ同時に話させ、平常点をつけました。

<活動内容>

インタビューを行い、理論と実践の両面からの体験学習をさせること。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2019年10月31日(木)～11月4日(月)

実施都市：ドバイ (アラブ首長国連邦)

実施場所：JETRO Dubai Office

実施内容：UAE (アラブ首長国連邦) では、Shiekh Mohammed Centre for Cultural Understanding、JETRO Dubai OfficeおよびDubai Museumを訪問した。

成果：Shiekh Mohammed Centre for Cultural Understandingでは、イスラム教および中近東の文化について英語で講義を受け、学生達は事前に用意していたインタビュー項目について、インタビューを行った。JETRO Dubai Officeでは、ドバイにおけるビジネス、特に2020 EXPOに関わること、緑化政策、ごみ処理、ファッション等について、学生達が事前学習で調べてさらに尋ねたいと思っていたことに関してインタビューを行った。その際、JETRO Dubai Officeの職員からも講義の形式でドバイのビジネスと経済に関する事柄を学生達は学んだ。Dubai Museumでは、Dubaiの発展の歴史を再確認した。全体を通じて、学生達は英語によるコミュニケーションの重要性をさらに強く認識させることができた。また、事前学習は十分に行ってから各訪問先を訪問した。秋学期ではさらに事後学習を行い、学習成果を学生達に文書でまとめさせる指導を行い、例年通り11月末までに論文を提出させた。

(11) 伊藤 晋 (全学連携教育機構・特任教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

開発問題と国際協力の基本的理解と研究

<授業の概要>

本演習では、開発途上国の抱える様々な問題、及びその解決に向けた多様な国際協力についての基本的な理解を深め、国際協力の成果とその望ましいあり方について研究します。

前期では、開発途上国が直面する主要な開発問題、国際協力の体制、国際協力の歴史的展開、国際協力の主要な支援アプローチについて研究し、後期では、主要地域における事例研究等を行うとともに、グループ論文を作成します。また、開発理論・戦略・潮流等関連事項については、随時紹介・議論します。

演習では、具体的な開発プロジェクトの事例研究も行うことで、実践的なアプローチや手法を学ぶとともに、映像教材等を用いて国際協力の実態・課題も検証します。

<活動内容>

2019年度の伊藤Aゼミでは、前期には開発経済学、国際協力の基本的な理解を深めるため、高橋 和志、山形 辰史編著『国際協力ってなんだろうー現場に生きる開発経済学』岩波書店(2010年)、高柳彰夫、大橋正明編著『SDGsを学ぶー国際開発・国際協力入門』法律文化社(2018年)をテキストとして、輪読を実施しました。また、Aゼミグループ論文のテーマについては、A生による議論の結果、「難民が日本社会に自立基盤を築くためには」と「プラスチック問題と日本ー国際協力の視点からー」とし、夏季休暇中に文献研究、関連団体・企業への訪問等を実施しました。後期には、グループ論文に関する文献研究、関連団体・企業への訪問等を継続し、論文を作成するとともに、D. カーラン、J. アペル『善意で貧困はなくせるのか?ー貧乏人の行動経済学』みすず書房(2013年)をテキストとして輪読しました。

また、国際協力においては、援助から如何に民間ビジネスに橋渡しするかが重要、との観点から、「日経ソーシャルビジネスコンテスト」にゼミとして応募しました。

<国外実態調査>

対象演習：A・B

実施日：2019年8月4日(日)～10日(土)

実施都市：マニラ首都圏及びラグナ州(フィリピン)

訪問機関：フィリピン中央銀行、フィリピン国家経済開発庁、フィリピン土地銀行、フィリピン・マイクロファイナンス協議会、カサガナカ協同組合、フィリピン開発学研究所、フィリピン大学ロスバニョス校公共政策・開発学部、世界銀行フィリピン事務所、The Center for Agriculture and Rural Development、アジア開発銀行本部、The CARD-MRI Development Institute, Inc. 他

実施内容：貧困脱却の重要な手段とされるマイクロファイナンス(MF)がフィリピンでは国

際的に見ても発展しているにも関わらず、未だ貧困率が高い、という2つの事実から、同国でMFが貧困層に寄与し、貧困率低下に貢献するために必要な対応策について研究し提言を行いました。

成 果：フィリピンの農業セクターを中心とした貧困の現状、農業セクターの特性、フィリピンにおけるMFの発展の経緯、MF機関の現状、MFに関する法規制、フィリピンにおける金融包摂等について、多角的に検証するとともに、実際にMFを借りている貧困層の方々にインタビューを実施することで、背景にある貧困問題や文化等についても理解することが出来ました。また、フィリピン政府・国際開発機関・NGO等による解決策とその限界について、調査を実施しました。これらを踏まえ、問題解決に向けた提言を行いました。



ラグナ州におけるマイクロファイナンス機関による説明

<特別授業>

実 施 日：2019年6月7日(金)

講 演 者：Teresa Mendoza 氏（政策研究大学院大学・元フィリピン農業省）

演 題：フィリピンの農業セクターの現状と課題：貧困問題の解決に向けて

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 6706 教室

実施内容：フィリピンの貧困問題及び農業セクターの現状と課題、及びその解決に一定の貢献をしているマイクロファイナンスについてご講演頂くとともに、意見交換を実施しました。

成 果：フィリピンの貧困問題と農民の関係、農業セクターの特性等について理解を深めることが出来ました。また、実態調査に向け、現状の理解と仮説について学生から説明し、有益なコメントを頂きました。

実 施 日：2019 年 9 月 27 日(金)

講 演 者：柏木 幹夫 氏（アジア開発銀行、国際農業開発基金）

演 題：国際開発金融機関の支援形態と資金調達：譲許性と財務健全性の間で

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 6706 教室

実施内容：アジア開発銀行と国際農業開発基金の財務局長としてのご経験を踏まえ、両機関における資金調達の方法と課題、財務健全性の重要性、供与資金の譲許性を高める取組み等についてご説明頂くとともに、国際開発金融機関の今後の意義、国際機関の意思決定の在り方等についてもお話頂きました。

成 果：通常、国際機関の援助業務に関心が向きますが、その業務を資金的に可能にする資金調達の重要性と課題について理解を深めることが出来ました。また、資金調達及び財務健全性の重要性については、フィリピン実態調査において研究中であるマイクロファイナンスにも繋がることを理解しました。

実 施 日：2019 年 10 月 11 日(金)

講 演 者：田中 沙恵 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）ジュニア専門員（保健）、元青年海外協力隊員（フィリピン母子保健））

演 題：フィリピンの母子保健の現状と課題：協力隊活動の視点から

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11210 教室

実施内容：フィリピンにおける青年海外協力隊員として母子保健業務に携わった経験等を踏まえ、フィリピンにおける母子保健の現状と課題についてご説明頂くとともに、宗教、文化に対する理解の重要性等についてもお話頂きました。

成 果：フィリピンにおける母子保健の現状と課題やフィリピンの公的機関の問題について理解を深めるとともに、ボランティアや国際協力の在り方についても大変重要な示唆を頂きました。

F L P 演習 B

<テーマ>

国外実態調査を通じた開発問題の研究と国際協力の検証

<授業の概要>

本演習では、演習 A で培った国際協力に関する基本的な理解を踏まえ、国外実態調査を通じて、開発途上国の抱える様々な開発問題についての理解を深め、国際協力に関する具体的な事例、方法論を学びつつ、国際協力の成果とその望ましいあり方について研究します。

前期では、開発問題全般及び国際協力の歴史的展開についてレビューを行いつつ、国外実態調査対象国の政治、経済、主要開発課題、実施されている国際協力等について、様々な角度から考察します。後期は、国外実態調査を踏まえ、より明確になった問題意識に基づき、実態調査対象国の各開発課題について、①歴史的な変遷、②域内近隣諸国や他地域等との比較分析、③国際協力が果たした／果たしている役割等の観点も織り交ぜつつ、分析を行います。また、開発理論・戦略・潮流等関連事項については、各開発課題の分析過程で随時紹介・議論します。

演習では、具体的な開発プロジェクトの事例研究も行うことで、実践的なアプローチや手法を学ぶとともに、映像教材等を用いて国際協力の実態・課題も検証します。

<活動内容>

2019 年度の伊藤 B ゼミでは、夏季休暇期間に実施するフィリピンでの国外実態調査のテーマをマイクロファイナンスと決め、前期では、フィリピンのみならず、他国を含めたマイクロファイナンスに関する英語を含めた文献研究を集中的に進め、毎回、10 本前後の論文について議論しました。その後、研究計画書を作成するとともに、訪問先のアポイントメントの取り付け、ロジスティクスの手配をし、フィリピンでの国外実態調査を実施しました。後期では、調査結果の取り纏めや、更なる文献研究等を行い、グループ論文を執筆しました。

<国外実態調査>

対象演習：A・B

実施日：2019 年 8 月 4 日(日)～10 日(土)

実施都市：マニラ首都圏及びラグナ州（フィリピン）

訪問機関：フィリピン中央銀行、フィリピン国家経済開発庁、フィリピン土地銀行、フィリピン・マイクロファイナンス協議会、カサガナカ協同組合、フィリピン開発学研究所、フィリピン大学ロスバニョス校公共政策・開発学部、世界銀行フィリピン事務所、The Center for Agriculture and Rural Development、アジア開発銀行本部、The CARD-MRI Development Institute, Inc. 他

実施内容：貧困脱却の重要な手段とされるマイクロファイナンス（MF）がフィリピンでは国際的に見ても発展しているにも関わらず、未だ貧困率が高い、という 2 つの事実から、同国で MF が貧困層に寄与し、貧困率低下に貢献するために必要な対応策について研究し提言を行いました。

成 果：フィリピンの農業セクターを中心とした貧困の現状、農業セクターの特性、フィリピンにおける MF の発展の経緯、MF 機関の現状、MF に関する法規制、フィリピンにおける金融包摂等について、多角的に検証するとともに、実際に MF を借りている貧困層の方々にインタビューを実施することで、背景にある貧困問題や文化等についても理解することが出来ました。また、フィリピン政府・国際開発機関・NGO 等による解決策とその限界について、調査を実施しました。これらを踏まえ、問題解決に向けた提言を行いました。



マニラ首都圏におけるマイクロファイナンスを実施する共同組合による説明

<特別授業>

実 施 日：2019 年 6 月 7 日(金)

講 演 者：Teresa Mendoza 氏（政策研究大学院大学・元フィリピン農業省）

演 題：フィリピンの農業セクターの現状と課題：貧困問題の解決に向けて

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 6706 教室

実施内容：フィリピンの貧困問題及び農業セクターの現状と課題、及びその解決に一定の貢献をしているマイクロファイナンスについてご講演頂くとともに、意見交換を実施しました。

成 果：フィリピンの貧困問題と農民の関係、農業セクターの特性等について理解を深めることが出来ました。また、実態調査に向け、現状の理解と仮説について学生から説明し、有益なコメントを頂きました。

実 施 日：2019 年 9 月 27 日(金)

講 演 者：柏木 幹夫 氏（アジア開発銀行、国際農業開発基金）

演 題：国際開発金融機関の支援形態と資金調達：譲許性と財務健全性の間で

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 6706 教室

実施内容：アジア開発銀行と国際農業開発基金の財務局長としてのご経験を踏まえ、両機関における資金調達の方法と課題、財務健全性の重要性、供与資金の譲許性を高める取組み等についてご説明頂くとともに、国際開発金融機関の今後の意義、国際機関の意思決定の在り方等についてもお話頂きました。

成 果：通常、国際機関の援助業務に関心が向きますが、その業務を資金的に可能にする資金調達の重要性と課題について理解を深めることが出来ました。また、資金調達及び財務健全性の重要性については、フィリピン実態調査において研究中であるマイクロファイナンスにも繋がることを理解しました。

実 施 日：2019 年 10 月 11 日(金)

講 演 者：田中 沙恵 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）ジュニア専門員（保健）、元青年海外協力隊員（フィリピン母子保健））

演 題：フィリピンの母子保健の現状と課題：協力隊活動の視点から

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 11210 教室

実施内容：フィリピンにおける青年海外協力隊員として母子保健業務に携わった経験等を踏まえ、フィリピンにおける母子保健の現状と課題についてご説明頂くとともに、宗教、文化に対する理解の重要性等についてもお話頂きました。

成 果：フィリピンにおける母子保健の現状と課題やフィリピンの公的機関の問題について理解を深めるとともに、ボランティアや国際協力の在り方についても大変重要な示唆を頂きました。

F L P 演習 C

<テーマ>

国際協力の現実、成果、課題の検証

<授業の概要>

本演習では、演習 A、B で培った国際協力に関する基本的な理解を踏まえ、開発途上国の抱える様々な開発問題に対する国際協力に関し、新たな潮流や国際協力の成果とその望ましいあり方について研究しつつ、各自の問題意識に基づき、修了論文を作成します。

演習では、具体的な開発プロジェクトの事例研究も行うことで、実践的なアプローチや手法を学ぶとともに、映像教材等を用いて国際協力の実態・課題も検証します。

(12) 稲葉 誠 (全学連携教育機構・客員教授)

FLP演習A

<テーマ>

国際協力（開発途上国援助）の潮流と新たな取り組み

<授業の概要>

グローバル化により「人、物、資金、情報」が急速かつ多量に世界中を移動する現在、貧困/飢餓、気候変動、感染症、テロ/治安問題などの国境を越えた地球規模課題に焦点を当て、より具体的に日本と国際社会との相互依存関係を認識し、国際相互協力の重要性、必要性を学習しました。また社会経済開発による格差拡大とそれに伴う社会不安が顕著となっていること、急速な開発により固有の文化や習慣等が消滅し、コミュニティのアイデンティティや人間としての尊厳が失われる例も見られることなどから、格差の是正や文化の継承、平和構築/維持に係る国際社会や国家の役割を議論し、併せてコミュニティやNGO・民間企業等の期待される役割についても議論しました。特にこれまでの様な国家（行政）や国際機関主導による社会経済開発には限界があること、住民自身や民間企業等による社会経済開発が益々重要となっており、住民やコミュニティが主体となりNGO/民間企業等と行政とが協働した持続的
社会経済開発の在り方、今後日本の果たすべき役割について考えました。本授業では、講師自身が現在実際に開発途上諸国で行っている農業・農村開発、コミュニティ開発、フードバリューチェーン形成による産業振興といった様々な活動等をリアルタイムにゼミ学生に紹介し、それらを具体的教材として開発途上国における農業・農村開発、コミュニティ開発の課題、社会経済開発事業の持続性に必要な要点等について議論・学習しました。今年度具体的事例として紹介した国はインドネシア、ラオス、ベトナム、ミャンマー、モンゴル、ルワンダ、コロンビア、インドなどです。特に最近日本企業の進出が著しいインドネシア、ベトナム、ラオスなどASEAN諸国については、従来のODA事業に加え、その数倍規模の民間投資及び企業活動が行われている現況を紹介し、途上国の社会経済開発事業における民間企業の役割と責任、期待等についても議論しました。更に経済発展と同時に深刻化している地域間格差、貧困増大、環境問題などの諸課題についても実際の事例を題材として議論・学習しました。また援助や公共事業など、ドナーや行政主導による社会経済開発事業の課題について議論し、持続的
社会経済開発のための住民主導型事業、住民と行政が一体となった協働型開発事業について議論・学習しました。

<活動内容>

稲葉ゼミでは、JICAが現在タイ国チェンマイ市近郊並びにミャンマー国境近くのメーアイ郡パートンコン村等で実施している技術協力プロジェクト「タイ地元産品の収穫後管理及び地域開発プロジェクト」並びに「コミュニティ起業家振興プロジェクト；D-HOPE」とも連携し、住民主導型持続的地域開発の在り方について学ぶと共に、現地プロジェクト活動の更なる改善に資するため、日本の若者の視点からの体験型ツーリズム活動、住民グループが生産する土産物、文化・習慣保存活動などを評価・議論し、環境保全活動とも調和する地域振興活動の在り方や住民の所得向上活動、文化習慣保存活動等について現地住民グループ、活

動実施プロジェクト等に報告しました。

<実態調査>

対象演習：A

実施日：2019年8月31日(土)～9月6日(金)

実施都市：タイ国チェンマイ県ドイサケット郡・メーアーイ郡・他

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）技術協力プロジェクト・現地民間企業・他

実施内容：現地実態調査研修のテーマは本演習の内容に沿った形でゼミ生自身によって議論され、研修先は現在に至るまで数多くのODA/NGOプロジェクトが実施され、日本の民間企業進出の著しい反面、地域格差も拡大しているタイ国を選び、その中でも経済発展に伴い都市部と地方との地域格差が拡大している北西地域（チェンマイ県郊外及びミャンマー国境メーアーイ郡）を取り上げました。同地域は1990年代後半のアジア経済危機後の社会経済混乱の中で、日本政府や世界銀行などドナー等が連携/協調して、民主化支援、地方分権化支援を積極的・継続的に実施している地域でもあり、タイ国内でも貧困率の高い地域での社会経済開発事業の在り方を調査・学習し、社会経済開発に係る日本政府の貢献やタイ国北西地域開発の諸課題について学びました。D-HOPEプロジェクト及び「タイ地元産品の収穫後管理及び地域開発プロジェクト」訪問では両プロジェクト活動の視察や関係者らとの討論と共に、現地住民グループや現地民間企業が行っている様々な地域振興活動を視察し、日本の若者としての視点から活動を観察・評価を行い、持続的地域振興のための各種提案を行いました。

成果：JICA専門家や現地関係者らから、途上国での日本の貢献と課題についての具体的な説明を聞き、今後の日本の貢献、特にゼミ学生自身の将来の国際貢献の可能性についてのイメージや理解を深めました。またバートンコン村長や現地住民グループ等との討議により、住民と行政とが一体となって実施する地域開発について学ぶと共に、外国人、特に若者の視点からの魅力ある観光開発/地域振興に必要な活動、事項等について現地関係者らと議論し提案を行うことにより、開発途上国における地域開発、住民主導型開発等についての関心を高めました。帰国後はバートンコン村を事例としてコミュニティベースツーリズムや一村一品運動などによる持続的地域開発、コミュニティ開発のあり方を議論しました。



(13) 佐々木 弘世 (全学連携教育機構・兼任講師)

F L P 演習 B

＜テーマ＞

国際協力論研究—海外実態調査による実証的研究—

＜授業の概要＞

これまで日本の ODA の協力が集中的に供与され、また過去に世界銀行による「東アジアの奇跡」レポート等によりその目覚ましい経済社会発展が大きく取り上げられた東南アジア地域での現地実態調査を実施する。現地調査においては現地の住民が直面していた、或いは直面している多くの開発課題についての構造やその複雑さを直接確認し、そうした開発課題の解消に向け先方政府や地域住民等と共に実施されてきた国際協力プロジェクトの支援現場や関連する支援機関(NGO 等)を訪問し国際協力により達成された具体的な成果とその限界等について分析し理解する。

＜活動内容＞

2019 年度の本ゼミでは、前期では夏季休暇期間に実施するミャンマー（ヤンゴン市）での現地調査を効果・効率的に実施するために必要となる関連の先行研究及び調査研究レポートの精読を中心に各種の準備学習・作業を実施した。現地調査を実施した後の後期では、グループ毎に調査結果の取り纏めや必要に応じ参考文献の精読、国内での有識者に対するインタビュー調査等の追加調査を実施し最終報告書の取り纏めを行った。

上記の B ゼミ独自の活動に加え下記の様な、(1)外部講師を招聘しての最新の国際協力の動向等に関する講話、(2)国際協力に関連する施設等の訪問や同施設を利用したワークショップ、等を実施することにより国際協力に対する総合的・包括的な理解の促進にも努めた。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

講演会（合同ゼミ）

対象演習：B・C

実施日：2019 年 5 月 17 日（金）

講演者：青柳 仁士 氏（一般財団法人 SDGs アンブレラ代表理事）

実施内容：2016 年より開始されている「持続可能な開発目標(SDGs)」の効果的な実施には社会各層からの広範な参加がその鍵を握るとされているがその中でも特に重要であるとされている民間セクター（民間企業）による CSV(各々のビジネスを通じた環境問題等の社会的課題の解決を目指す)活動についてその概念及び日本の企業の具体的な取り組みについて理解を深めた。

成果：SDGs 及び開発途上国の社会経済開発に必要な民間企業のビジネスを通じた効果的な国際協力の現状及びその課題についての知識を深めるよい機会となった。また幾つかの本邦民間企業と欧米企業の CSV 活動に関する具体的な事例及び各企業の経営戦略における CSV の位置づけ等に関する説明によりその基本的な考え方の差異、現状と様々な課題についても自由討議を通じて理解を深めるこ

とが出来た。

講演会

対象演習：B

実施日：2019年6月28日（金）

講演者：北澤 仁 氏（株式会社日本総合研究所取締役・中央大学ミャンマー白門会幹事長）

実施内容：ミャンマーで実施予定の現地実態調査の準備作業として同国の産業人材育成の現状とその問題点について同国を中心に産業人材の育成に関する事業を長年に亘り携わってきた講師の経験からミャンマーでの産業人材育成の現状及び他の東南アジア諸国との違い等についての説明を受けた。

成果：近年急増しているミャンマーに進出する日系企業が求める現地での人材要件に関する詳しい説明と現地の大学等での産業人材育成に関する教育制度やカリキュラム及び教官の資質の問題点等について現地での豊富な事例の紹介は現地調査を行う上で大変重要な情報となった。

訪問調査

対象演習：B

実施日：2019年7月2日（火）

実施都市：東京都千代田区

訪問先：独立行政法人国際協力機構（JICA）本部産業開発・公共政策部エネルギーグループ

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）本部

実施内容：8月に実施予定のミャンマーでの現地実態調査の準備作業の一環としてミャンマーを中心とする東南アジア地域全体のエネルギー（エネルギーの需給バランス、再生可能エネルギー導入の現状、無電化地域対策、PPP支援の現状、域内のエネルギー供給ネットワーク等）状況及びミャンマーで JICA が実施中の送配電網整備計画、電力分野人材育成計画等の関連プロジェクト等の現状と課題についてゼミ生によるインタビュー調査を行った。

成果：東南アジア及びミャンマーにおける電力を中心とするエネルギー分野の現状・課題及び今後の需給予測等に対する極めて示唆に富む説明があった。ミャンマーで実施された当該分野での JICA 協力について詳細な解説とデーターの提供があり現地調査を進めるにあたって極めて有益かつ貴重な訪問調査となった。

訪問調査

対象演習：B

実施日：2019年7月23日（火）

実施都市：東京都千代田区

訪問先：独立行政法人国際協力機構（JICA）本部人間開発部基礎教育グループ

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）本部

内 容：現地実態調査の準備作業の一環としてミャンマーにおける基礎教育の現状と課題に関して現在 JICA が同国で実施している技術協力の詳細、特に従来の暗記重視型教育から思考能力開発型教育への転換を強力に支援するために実施中のカリキュラム改革、教科書改訂及び教員の再訓練に関するプロジェクトの詳細及び問題点等についてゼミ生によるインタビュー調査を行った。

成 果：ミャンマーでの基礎教育分野の諸課題を特定することを目的として実施された ADB、UNESCO、USAID 及び JICA による膨大な調査の結果及び関連の情報・データの提供があり、又基礎教育分野での国際協力（特に技術協力）実施の難しさ等に関する様々なエピソード等を聴取することができ現地調査を進めるにあたって極めて有益かつ貴重な訪問調査となった。

現地実態調査

対象演習：B

実 施 日：2019 年 8 月 4 日（日）～9 日（金）

実施都市：ヤンゴン市及びその近郊（ミャンマー連邦共和国）

実施施設：独立行政法人国際協力機構（JICA）ミャンマー事務所・ヤンゴン外国語大学・国際連合開発計画（UNDP）駐ミャンマー代表事務所・僧院及び僧院学校（Payar Phyu Monastery）・ティラワ経済特別区・初等教育カリキュラム改善計画プロジェクトオフィス・ミャンマー白門会・他

実施内容：近年東南アジア地域の最後のフロンティアとして世界の注目を集めるミャンマーを訪問し同国の経済・社会開発の現状とその課題を理解するための現地調査を実施した。同国滞在中にはヤンゴン外国語大学学生との討議・交流やジャカルタ近郊の多くの日系企業が進出中のティラワ経済特別区、UNDP 現地駐在事務所を訪問し現在ミャンマーが抱えている経済格差問題、ロヒンギャ問題及び劣悪なインフラ状況等について意見交換及びインタビュー調査を行った。また仏教徒が多数を占めるミャンマー社会で重要な役割を果たしている僧院及び附設されている僧院学校やマイノリティーの女性の就業を支援するため日本人により起業された Shin Phyu Lay を訪問し貧困者や障害者等の社会的弱者の現状と支援の具体的な在り方等について意見交換を行った。

成 果：上記の様な関連機関・関係者・プロジェクト現場の訪問及び面談を通じ ASEAN の後発国の一つであるミャンマーでの経済・社会開発の現状や極めて多様な民族・宗教・言語・文化・自然を抱える同国で今後拡大し続ける地域格差・経済格差・民族格差を是正しながら国家としての統一と安定した経済・社会発展をいかに進めて行くのか、そのために早急に解決すべき課題とその様な課題解決に期待される国際協力の果たすべき役割についての詳細調査を実施することができた。また、ヤンゴン外国語大学等での現地大学生との交流を通じ先方の鋭い問題意識や洞察力と国際関係に関する幅広い見識に触れ大いに触発された。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：B・C

実施日：2019年12月6日（金）

講演者：花谷 厚 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）社会基盤・平和構築部平和構築シニアアドバイザー）

内 容：シリア、イラク、南スーダン、ミャンマー等での武力紛争及びそれに伴う難民問題が国際社会の平和と安定の極めて大きな脅威となっている中で現代の紛争の特徴やその主な原因についての理解を深めた。更に紛争後の復興や紛争の発生を未然に防ぐことを目的とする平和構築支援について講師が直接関わった南スーダンやウガンダの事例を通してその具体的支援の現状と課題についての解説を踏まえ自由討議を行った。

効 果：紛争の定義に関する時代的な変遷や現在大きな問題となっている暴力的紛争の発生メカニズムについて多くの資料や事例を通して深く理解する大変貴重な機会となった。また現在国際協力の非常に大きな柱となっている国連等によるPKO(平和維持活動)をはじめとする様々な平和構築支援の理念・制度的な枠組み及び日本の平和構築支援の特徴と現状及び今後の課題等について考える大変貴重な機会となった。

講演会（特別セミナー）

対 象 者：B・C 及び希望者

実施日：2019年12月19日（木）

講演者：山口 彩子 氏（三井住友海上火災保険株式会社経営企画部サステナビリティ推進室課長）

内 容：2016年からスタートしている「持続可能な開発目標(SDGs)」の重要な担い手の一つである民間企業による SDGs 達成への貢献について同社の経営戦略や日常の企業活動との関係性についての説明を受けた。特に現在世界中の多くの民間企業が掲げるようになっているCSV活動（Creating Shared Value）や企業と投資家との関係性を考える上で重要なESG(Environment・Social・Governance)投資の実践について同社の豊富な活動事例についての解説を踏まえ自由討議を行った。

成 果：近年国際協力のより効果的な実施について民間企業のビジネス活動を通じての参画に対する期待が極めて大きくなっているが、我が国の金融関連企業の中でいち早く SDGs への貢献をその経営理念の中に取り入れ全社を挙げて取り組みの強化を図っている三井住友海上火災保険株式会社の具体的な例は今後の国際協力のより効果的な実施を考える上で極めて示唆に富む内容であり、また受講生にとっては国際協力が様々な主体によって担われている事を理解し併せて将来の各自のキャリア形成を考える上で大変貴重な場となった。

合同ワークショップ

対 象 者 : B・C

実 施 日 : 2019 年 12 月 21 日 (土)

実施都市 : 東京都新宿区

実施場所 : JICA 地球ひろば (独立行政法人国際協力機構 (JICA) 市ヶ谷ビル)

内 容 : 国際協力の具体的な実施手段である開発プロジェクトの形成手法について現在 JICA、USAID、GIZ 等多くの国際協力実施機関で採用されている住民参加型プロジェクト形成手法 (PCM) の具体的な進め方についてパキスタンの実例を基にグループワークによるワークショップを実施した。

成 果 : 開発途上国において現地住民が直面している各種の開発課題の解決を目指して実施される開発プロジェクトについて、「問題発見・確定 ➡ 計画策定 ➡ 実施のモニタリング ➡ 評価 ➡ 評価から導き出された教訓のフィードバック」、といった一連のサイクルの詳細についてワークショップを通じて体験することができ、特に国際協力の現場での開発問題の発見・確定がいかに重要でありまた大変困難な作業であるかについての理解を深めることができた。

FLP演習C

<テーマ>

国際協力論（上級）

<授業の概要>

これまで履修してきた「演習 A」及び「演習 B」での学習を十分に踏まえながら、各人が開発途上国の開発問題や国際協力の在り方等に関する個別のテーマを設定し最終論文の形で取り纏めることを目指す。

<活動内容>

2019 年度のゼミでは、前期では各ゼミ生が FLP でのこれまでの学習を通じて深めた国際協力における関心領域やそこでの問題意識を取り纏めた事項をゼミにおいて発表しながら夫々の最終論文のテーマ設定の準備作業を行った。併せて国際協力の現状を取り上げた文献の輪読や国際開発支援に関する最新のテーマ等について自由討議を行った。後期では激動する国際情勢や新たな開発潮流等について取り纏められた論文及びレポートの輪読やゼミ生による各自の論文作成の進捗に応じた中間発表と全体討議を行いながら最終論文を完成させた。

上記の C ゼミ独自の学習に加え、(1)外部講師を招聘しての最新の国際協力の動向等に関する講話、(2)国際協力に関連する機関等の訪問や同施設を利用しての課外学習、等を実施することにより国際協力に対する総合的・包括的な理解を促進した。

<実態調査・見学調査・講演会>

講演会（合同ゼミ）

対象演習：B・C

実施日：2019 年 5 月 17 日（金）

講演者：青柳 仁士 氏（一般財団法人 SDGs アントレプレナーズ代表理事）

内 容：2016 年より開始されている「持続可能な開発目標 (SDGs)」の効果的な実施には社会各層からの広範な参加がその鍵を握るとされているがその中でも特に重要であるとされている民間セクター（民間企業）による CSV (各々のビジネスを通じた環境問題等の社会的課題の解決を目指す) 活動についてその概念及び日本の企業の具体的な取り組みについて理解を深めた。

成 果：SDGs 及び開発途上国の社会経済開発に必要となる民間企業のビジネスを通じた効果的な国際協力の現状及びその課題についての知識を深めるよい機会となった。また幾つかの本邦民間企業と欧米企業の CSV 活動に関する具体的な事例及び各企業の経営戦略における CSV の位置づけ等に関する説明によりその基本的な考え方の差異、現状と様々な課題についても自由討議を通じて理解を深めることができた。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：B・C

実施日：2019年12月6日（金）

講演者：花谷 厚 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）社会基盤・平和構築部平和構築シニアアドバイザー）

内 容：シリア、イラク、南スーダン、ミャンマー等での武力紛争及びそれに伴う難民問題が国際社会の平和と安定の極めて大きな脅威となっている中で現代の紛争の特徴やその主な原因についての理解を深めた。更に復興や紛争の発生を未然に防ぐことを目的とする平和構築支援について講師が直接関わった南スーダンやウガンダの事例を通してその具体的支援の現状と課題についての解説を踏まえ自由討議を行った。

効 果：紛争の定義に関する時代的な変遷や現在大きな問題となっている暴力的紛争の発生メカニズムについて多くの資料や事例を通して深く理解する大変貴重な機会となった。また現在国際協力の非常に大きな柱となっている国連等によるPKO(平和維持活動)をはじめとする様々な平和構築支援の理念・制度的な枠組み及び日本の平和構築支援の特徴と現状及び今後の課題等について考える大変貴重な機会となった。

講演会（特別セミナー）

対 象 者：B・Cゼミ及び希望者

実施日：2019年12月19日（木）

講演者：山口 彩子 氏（三井住友海上火災保険株式会社経営企画部サステナビリティ推進室課長）

内 容：2016年からスタートしている「持続可能な開発目標(SDGs)」の重要な担い手の一つである民間企業による SDGs 達成への貢献について同社の経営戦略や日常の企業活動との関係性についての説明を受けた。特に現在世界中の多くの民間企業が掲げるようになっているCSV活動（Creating Shared Value）や企業と投資家との関係性を考える上で重要なESG(Environment・Social・Governance)投資の実際について同社の豊富な活動事例についての解説を踏まえ自由討議を行った。

成 果：近年国際協力のより効果的な実施について民間企業のビジネス活動を通じての参画に対する期待が極めて大きくなっているが、我が国の金融関連企業の中でいち早く SDGs への貢献をその経営理念の中に取り入れ全社を挙げて取り組みの強化を図っている三井住友海上火災保険株式会社の具体的な例は今後の国際協力のより効果的な実施を考える上で極めて示唆に富む内容であり、また受講生にとっては国際協力が様々な主体によって担われている事を理解し併せて将来の各自のキャリア形成を考える上で大変貴重な場となった。

合同ワークショップ

対 象 者：B・C

実施日：2019年12月21日（土）

実施都市：東京都新宿区

実施場所：JICA 地球ひろば（独立行政法人国際協力機構（JICA）市ヶ谷ビル）

内 容：国際協力の具体的な実施手段である開発プロジェクトの形成手法について現在 JICA、USAID、GIZ 等多くの国際協力実施機関で採用されている住民参加型プロジェクト形成手法 (PCM) の具体的な進め方についてパキスタンの実例を基にグループワークによるワークショップを実施した。

成 果：開発途上国において現地住民が直面している各種の開発課題の解決を目指して実施される開発プロジェクトについて、「問題発見・確定 ➡ 計画策定 ➡ 実施のモニタリング ➡ 評価 ➡ 評価から導き出された教訓のフィードバック」、といった一連のサイクルの詳細についてワークショップを通じて体験することができ、特に国際協力の現場での開発問題の発見・確定がいかに重要でありまた大変困難な作業であるかについて理解を深めることができた。

IV. スポーツ・健康科学プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

少子高齢化社会の到来のみならず、高度テクノロジー化と IT 化にともない、心身の健康の維持増進がこれまで以上に重要になっています。そして、スポーツ・健康科学の発展と普及は、21 世紀の日本社会にとって不可欠なものとなっています。今日我が国の健康問題の多くは、運動不足や情報横溢と密接にかかわるライフスタイルの変化や生活文化に起因しています。そのような中で、特にスポーツや運動活動に求められる期待値は大きく、それらを取り入れた日常生活の質的向上の取り組みが随所で見られるようになっています。近年、地域コミュニティにおけるスポーツ基盤の整備や生涯スポーツの機会の提供が進んでいます。他方、ボーダーレス化や商業化が急速に進み、レジャー・イベント・プロスポーツ・メディア等のスポーツ関連領域は巨大な市場を形成しています。このことは同時に、スポーツを媒介とした国際交流や国際貢献の可能性がさらに大きくなっていることを意味します。

このような状況を背景に、「スポーツ・健康科学プログラム」は学際的な性格を持つスポーツ科学と健康科学を基盤とし、スポーツや健康にまつわる問題を健康・医療・文化・ビジネス・サービス・行政等との関連の中で多面的かつ総合的に考察し、この分野に寄与できる人材の育成を目的としています。

本プログラムでは、従来の体育ないしはスポーツ講義・実技という枠組みではない多様なアプローチが可能になり、総合的かつ体系的な能力が養成されます。つまり、各学部におけるそれぞれの専門科目を履修しながら、当プログラムのスポーツ・健康科学の領域の中で各人が興味をもつ分野を深めていくことができます。そこでは、本プログラム独自に開講する演習科目を通じて専門的な研究を行います。

スポーツや健康に関わる社会的ニーズの増大と多様化によって、それに対応できる資質を備えた人材が今後さらに求められます。これまで教員の養成を主眼としてきたいわゆる教育・体育系学部とは異なり、本プログラムが社会の幅広い領域にマルチスペシャリストを送り出すことの意義は大きいのです。

2. 2019 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
1	村井 剛	法学部	11	10	10	単独（A） / 合併（B・C）
2	中谷 康司	経済学部	2	1	1	単独（A） / 合併（B・C）
3	市場 俊之	商学部	1	-	-	単独（A）
4	小峯 力	理工学部	7	8	15	単独（A） / 合併（B・C）
5	加納 樹里	文学部	3	11	8	単独（A） / 合併（B・C）
6	布目 靖則	文学部	4	5	-	単独（A・B）
7	小林 勉	総合政策学部	7	6	6	単独（A・B・C）
合計			35	41	40	

3. プログラムスケジュール

- 4 月 履修ガイダンス
第一回部門授業担当者委員会
- 6 月 2020 年度募集に伴う総合ガイダンス
- 7 月 第二回部門授業担当者委員会
- 9 月 2020 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
- 11 月 2020 年度募集に伴う選考試験
学外活動（オリエンテーション・国立スポーツ科学センター）
- 12 月 第三回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）
- 3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

①オリエンテーション

実施日： 2019年11月23日(土)
実施都市： 東京都北区
実施場所： 国立スポーツ科学センター
実施内容： 最新のスポーツ科学サポート体制の状況について、学習および施設見学

②期末成果報告会

実施日： 2019年12月14日(土) 13:00～
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 6104 教室
実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

5. これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先

電通、読売広告社、TBS テレビ、Jリーグフォト、日刊スポーツ新聞西日本、ゴールドウイン、ランナーズ、琉球スポーツキングダム、川崎フロンターレ、楽天野球団、山形新聞社、三菱東京UFJ銀行、みずほフィナンシャルグループ、三井住友銀行、静岡銀行、山梨中央銀行、足利銀行、川崎信用金庫、大和証券、住友生命、三井住友海上火災保険、損害保険ジャパン、丸紅、双日、日立製作所、富士重工、小松製作所、神戸製鋼所、大林組、麒麟ビール、サッポロビール、ヤクルト本社、ロッテ、富士通、富士ゼロックス、ヤマト運輸、佐川急便、日本通運、東日本旅客鉄道、近畿日本ツーリスト、JTB コーポレートセールス、星野リゾート、東京テアトル、KDDI、NTT コミュニケーションズ、リクルートコミュニケーションズ、コクヨ、テルモ、セブン-イレブン・ジャパン、日本公文教育研究会、休暇村協会、中央大学、警視庁、地方公務員（東京都庁、多摩市役所など）、東京学芸大学大学院、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻など

(1) 村井 剛 (法学部・准教授)

FLP演習A

<テーマ>

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

<授業の概要>

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めていきます。スポーツ愛好者、競技者、指導者、それぞれの立場からスポーツ心理を学んでいけるよう授業展開は計画します。

また、中央大学のスポーツ振興を目的として、体育連盟の運動部のプロモーション方策の検討、モチベーションビデオの作成を予定しています。

<活動内容>

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めた。

また、中央大学のスポーツ振興を目的として、B・C生の活動を知りつつ、手伝うことも通して体育連盟の運動部のプロモーション方策の検討、モチベーションビデオの作成に関わった。

メイン活動として、春学期はスポーツに関する心理、認知的な側面に関する文献の情報収集や実態の把握を中心に展開した。

秋学期に入り、B・C生がメインに活動している調査、研究対象の見学、手伝い、データ収集、データ分析を担う形で作業も一部担った。エナジードリンクと運動能力、集中力の関係性についても調査する際に被験者としても参加し、結果のまとめも実施した。

対象は体育連盟のバスケットボール部、陸上競技駅伝部の心理的側面の活動であった。

C生と共に、箱根駅伝予選会、箱根駅伝本戦も観戦し、身近に体育連盟を感じつつ、ゼミを通して部へどのように貢献していくかを考えるきっかけを得た。

特にモチベーションビデオ作製過程においては、アンケート調査によってニーズをヒアリングしたり、競技スポーツ現場との密なつながりも形作ることができたため、B生以降の活動への動機付けとして、またゼミ活動を自分ごとで取り組むための責任感も生むきっかけづくりのできた1年間であったと感じている。

見学調査・実態調査においては上級生との合同合宿も実現し、学年を超えた交流と、強固な連携体制の構築ができた。冬季に予定している実態調査においては、調査に加えて2020年度の活動計画を固めることも目的としており、4月前から様々な動きをスムーズに実行できる予定である。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2019年5月23日(木)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：相模原ギオンスタジアム
実施内容：駅伝モチベーションビデオ作製素材の収集
成 果：駅伝モチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2019 年 5 月 26 日(日)
実施都市：神奈川県相模原市
実施場所：相模原ギオンスタジアム
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集
成 果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A
実 施 日：2019 年 6 月 8 日(土)
実施都市：神奈川県平塚市
実施場所：Shonan BMW スタジアム平塚
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集
成 果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A・C
実 施 日：2019 年 8 月 7 日(水)～8 日(木)
実施都市：山形県上山市
実施場所：蔵王ライザワールド
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集
成 果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2019 年 9 月 2 日(月)～4 日(水)
実施都市：沖縄県宮古市
実施場所：来間前浜港・他
実施内容：マリンスポーツ体験が心身に及ぼす影響について
成 果：台風の影響・中止・欠航などによって調査予定が大きく変更となり、一部質問紙調査による効果測定のみになった。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2019 年 11 月 23 日(土)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：慶應義塾大学日吉陸上競技場
実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集
成 果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2019年11月30日(土)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：日本体育大学健志台陸上競技場

実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集

成果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A

実施日：2019年12月1日(日)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：日本体育大学健志台陸上競技場

実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集

成果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

F L P 演習 B ・ C

<テーマ>

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

<授業の概要>

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めた。スポーツ愛好者、競技者、指導者、それぞれの立場からスポーツ心理を学んでいけるよう授業展開は配慮した。また、中央大学のスポーツ振興を目的として、体育連盟の運動部のプロモーション方策の検討、箱根駅伝支援の一環でモチベーションビデオを作製した。

<活動内容>

メイン活動として、体育連盟の陸上駅伝ブロックのモチベーションビデオ作製支援事業を実施。併せてバスケットボール部観客動員のための振興事業も実施した。

さらにエナジードリンクと運動能力、集中力の関係性についても調査した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2019年5月23日（木）

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：相模原ギオンスタジアム

実施内容：モチベーションビデオ作製のための資料映像、写真データ収集

成果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：C

実施日：2019年5月25日（土）

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：相模原ギオンスタジアム

成果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2019年5月26日（日）

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：相模原ギオンスタジアム

成果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：B・C

実施日：2019年6月23日（日）

実施都市：神奈川県相模原
実施場所：相模原ギオンスタジアム
成 果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A・C
実 施 日：2019年8月7日(水)～8日(木)
実施都市：山形県上山市
実施場所：蔵王ライザワールド
成 果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2019年9月2日(月)～4日(水)
実施都市：沖縄県宮古市
実施場所：来間前浜港・他
実施内容：マリンスポーツ体験が心身に及ぼす影響について
成 果：台風の影響・中止・欠航などによって調査予定が大きく変更となり、一部質問紙調査による効果測定のみになった。

対象演習：B・C
実 施 日：2019年11月17日(日)
実施都市：埼玉県上尾市
実施場所：上尾運動公園陸上競技場
成 果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2019年11月23日(土)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：慶應義塾大学日吉陸上競技場
成 果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

対象演習：A・B・C
実 施 日：2019年11月30日(土)
実施都市：神奈川県横浜市
実施場所：日本体育大学健志台陸上競技場
成 果：箱根駅伝予選会、本戦前に提供するモチベーションビデオ資料となった。

（２）中谷 康司（経済学部・准教授）

FLP演習A

<テーマ>

身体感（観）と身体論

<授業の概要>

運動を成立させるためには、体を動かすための身体能力が重要です。しかし、一方で同じくらい外界や身体の状態を捉えるための感覚能力も重要になってきます。そのような身体感覚、身体感（観）といったものは自分たちの受けた教育・社会の考え方に知らず知らずのうちに左右されており、その影響は軽視できません。本演習では、運動について感覚を重視した視点から検討していきます。実技を通して身体感覚を再検討するとともに、運動に必要なシステムについて医学的な知識を学び、また身体についての捉え方（考え方）の基礎になっている思想的背景も検討していきます。担当教員の専門分野が東洋的な実技に立脚しているため、皆さんの地盤である東洋（日本を含む）を中心に検討を進めますが、西洋と東洋との異同を探ることを通して、各自の身体感（観）を浮き彫りにできると良いと思います。

本年度は、テーマに即したテキストを読んで知識を深め、自分たちの心身についての理解を深めます。

<活動内容>

本年度の中谷ゼミでは、前期、貝原益軒の著した『養生訓』（講談社学術文庫）を講読した。

『養生訓』は、真の楽しみ、真の幸福を得るために必要な東洋の智慧（様々な生活態度）をまとめたものであり、「東洋思想」や「食」に興味のあるゼミ生にとって有益な教材であった。今回は、武蔵野学院大学大学院の謝心範教授による『養生訓』の分類、思（思考）、行（行動）、食（食事）、住（住居）、衣（衣服）の5つにもとづき、476項目を新しくカテゴリーに分割して学習した。有益な知識が豊富にある一方、記述されたのが江戸時代であるため、例えば、食品の保存方法などの状況は大きく変化しており、時代背景を考慮しながら解釈する必要があった。後期は、心理学者であるミハイ・チクセントミハイが提唱する「フロー」という現象に着目した。教材としては提唱者自身が著した『フロー体験入門』を選び、まず「フロー」とは何かについて学んだ。フローとは、自意識が薄れ、余計な雑念が消え、目の前の事に没頭してのめり込んでいる状態で、①明確な目標、②迅速なフィードバック、③スキル（能力）とチャレンジ性（挑戦）の絶妙なバランスの上に成り立っていることが分かった。

今後、さらに学習を進め、来年度以降の調査・研究に繋げたい。

学習内容については、スポーツ・健康科学プログラムの期末成果報告会において発表した。

F L P 演習 B・C

<テーマ>

身体感（観）と身体論

<授業の概要>

運動を成立させるためには、体を動かすための身体能力が重要です。しかし、一方で同じくらい外界や身体の状態を捉えるための感覚能力も重要になってきます。そのような身体感覚、身体感（観）といったものは自分たちの受けた教育・社会の考え方に知らず知らずのうちに左右されており、その影響は軽視できません。本演習では、運動について感覚を重視した視点から検討していきます。実技を通して身体感覚を再検討するとともに、運動に必要なシステムについて医学的な知識を学び、また身体についての捉え方（考え方）の基礎になっている思想的背景も検討していきます。担当教員の専門分野が東洋的な実技に立脚しているため、皆さんの地盤である東洋（日本を含む）を中心に検討を進めますが、西洋と東洋との異同を探ることを通して、各自の身体感（観）を浮き彫りにできると良いと思います。

本年度は、引き続き測定計画を立案し、実際の感覚と計測装置によって測定される客観的なデータを比較することを通して、自分たちの心身についての理解を深めます。

<活動内容>

本年度の中谷ゼミでは、昨年度の予備実験から立てた仮説にもとづき実験を計画、実施した。テーマは「自転車エルゴメーター課題による前頭前野の脳血流と気分の変化について」である。測定項目として、気分の評価には気分プロフィールテスト（POMS）を用い、脳血流は近赤外分光法（NIRS）による総ヘモグロビン量の変化から推定した。また、サーミスタのついたマスクを着用し、呼吸のフローから呼吸数の変化も測定した。被験者を増やした結果、昨年度立てた仮説が必ずしも成立しないことが分かり、自転車エルゴメーターの強度や持続時間などの実験条件を変えながら、運動によって脳血流の上がる契機がなんであるのか、呼吸などとの関連で検討を繰り返した。現段階では、実験条件が定まらないため、今後も検討を加え、実験手順の確立を目指したい。

実験の進捗状況については、スポーツ・健康科学プログラムの期末成果報告会において発表した。

(3) 市場 俊之 (商学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

スポーツを「みる」

<授業の概要>

スポーツを「みる」の「みる」には、「見・観・鑑・診・看など」を当てはめることができる。多角的かつ階層的に考察できるということである。2つのテーマを想定している。ひとつは、“2020Tokyo”に向けて「オリンピックとパラリンピック」を「みる」。オリンピックとパラリンピックの歴史概要を把握し、この歴史概要を前提として、2020Tokyoを考察する。

もうひとつは、スポーツ活動に不可欠な「人間の運動」を「みる」。人間の運動とは何か? (例: スポーツないしは運動経験の獲得が意味することは何か? など) を考える。

ゼミ活動初期は、おもに文献や資料を渉猟・講読が主たる活動となる。その後、必要に応じて見学調査ないしは実態調査などのフィールドワークに出る。最終的に報告書を作成する。

<活動内容>

市場ゼミの活動は2分できる。一方では、2020年のオリンピックとパラリンピックを念頭に、スポーツの歴史とオリンピックとならびにパラリンピックの歴史を重点的に取り扱った。

さらにサッカーのワールドカップや女性サッカーにも焦点を当てた。他方では、「運動ないしはスポーツ」を人間の陶冶にとって不可欠であることを確認するために、人間学的・現象学的な意味での運動学に立脚したアプローチを試みた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習: A

実施日: 2019年7月25日(木)

実施都市: 東京都町田市

実施場所: ASV PESCADOLA MACHIDA

実施内容: ペスカドーラ町田について、以下の3点の聞き取りおよび見学を行った。

1. 組織と構造 [・事務組織・財政基盤・トップチーム運営・下位チーム運営]
2. 競技面 [・練習環境・フィジカルケア・年間計画・シーズン中のトレーニング・戦略および戦術]
3. 地域との結びつき [・地域貢献活動・観客増員戦略・試合日以外のイベント]

成果: 見学調査を通じて、以下のことを知った。

1. 地域貢献として町田市から依頼されたイベントに参加したり、小学生などを対象としたクリニックを開催している。また、「ふるさと納税」による大型ビジョンの設置の計画が進められている。

2. クラブハウスは無く、事務は2人、トップチームのコーチが下部組織の監督をしたり、下部組織の選手とスタッフで試合の日の装飾をするなど非常に小規模である。
3. プロ選手は3人のみである。他の選手は、別の仕事や個人でスクールを行うセミプロである。

日常生活の中に定期的なスポーツ活動を位置づかせる、また、多世代にわたるスポーツ活動の実施の定着度を知ることができた。少子高齢化とネガティブな意味での「省運動化」された今日社会における身体運動やスポーツの果たす役割ないしは機能をあらためて確認できた。そして、スポーツと共にある日々を形づくるのがライフタイムにまたがる「ヒューマン・ウェルネス」であることが気づくことができた。

対象演習：A

実施日：2019年10月20日(日)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：日本オリンピックミュージアム

実施内容：日本のオリンピックに関する歴史的展示を見学し、日本のスポーツ史への認識を深める。

成果：講道館柔道の創始者嘉納治五郎は、「日本スポーツの父」であることがわかった。日本が初めて1912年ストックホルム大会に参加した際の立役者である。東京1964、札幌1972、長野1998関係の展示を通じて、世界における日本のスポーツの位置を知ることができた。思いがけない発見があった。中央大学のオリンピックアン第1号は「田代菊之助」で、1924年パリ大会に「あの」金栗四三とともに参加したことは知られている。これまで、彼を特定できる写真が中央大学関係では確認できなかったのであるが、今回の見学で彼の写真が見つかった。1924年の日本選手団の集合写真に写っていた。見学当日に調査依頼し、後日確認できたのである。

(4) 小峯 力 (理工学部・教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

- 1) 大学スポーツ振興 (Sport for All)
- 2) スポーツと生命教育 (Lifesaving)

<授業の概要>

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希求し、発表していく。

また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全（リスクマネジメント）を研究する。

<活動内容>

小峯ゼミは、「2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けての一次救命の普及」を大きな目標として設定し、活動を行った。オリンピック・パラリンピックの開催にあたり、緊急時に素早く駆けつけることのできる人を増やすためのはじめとして、中央大学の学生に向けて、BLS 講習を行うという活動目標を立て、前期、後期共に、この目標に向けて活動した。前期はインプットを中心に活動した。まず、日本ライフセービング協会主催の、BLS 講習会に参加し、資格を取得した。次に、救命処置に対する理解をさらに深めるため、国士舘大学大学院救急システム研究科の方々にご協力いただき、3 回救急医療についての座学をしていただいた。後期は、前期でインプットしたことをアウトプットする活動をした。学生の皆さんの「BLS に対してのハードルを下げる」ための講習会内容を考え実施した。講習会は 11 月 20 日の小峯先生の授業（法学部の生命倫理）の履修者を対象とした。今までに受けてきた BLS 講習会では知ることのできなかつた BLS の重要性や 119 番通報の手順など講習会に組み入れることとした。BLS に対する意識の向上を評価するため、講習会前後でアンケート調査を実施した。講習会により助ける意思是 53%上昇、119 番通報の理解度も 82%上昇した。

来年度には、救命活動への関心をどのように維持させていくのか、定着させていくのか、より多くの人に広めていくにはどうしていくべきかの検討を通じ、救急救命（生命尊厳）とスポーツ振興を普及・啓発していく所存にある。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2019 年 11 月 20 日(水)

実施都市：東京都八王子市

実施場所：中央大学 多摩キャンパス

実施内容：心肺蘇生法講習会の主催を通して、人命救助の理解および実際、互いの協力による「仲間意識」を深める。

成果：心肺蘇生法講習会の準備あたり、膨大な救急救命の知識習得および人命の尊さを感じ、さらにそこにとどまらず ONE TEAM としての情報共有、協力の大切さを

学んだ。講習会の実施では、人に「伝える」ことの困難さやどのようにすれば伝わるのかを思考し、ONE TEAMであるからこそ大きな壁も乗り越えられる経験を得た。

F L P 演習 B・C

<テーマ>

【B 生】

- 1) スポーツと生命教育 (Lifesaving)
- 2) 大学スポーツ振興 (Sport for All)

【C 生】

- 1) 大学スポーツ振興 (Sport for All)
- 2) スポーツと生命教育 (Lifesaving)

<授業の概要>

【B 生】

救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於けるリスクマネジメントを研究していく。

また、東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希究し、発表していく。

【C 生】

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希究し、発表していく。

また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全（リスクマネジメント）を研究する。

<活動内容>

小峯ゼミは、「2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けての一次救命の普及」を大きな目標として設定し、活動を行った。オリンピック・パラリンピックの開催にあたり、緊急時に素早く駆けつけることのできる人を増やすためのはじめとして、中央大学の学生に向けて、BLS 講習を行うという活動目標を立て、前期、後期共に、この目標に向けて活動した。前期はインプットを中心に活動した。まず、日本ライフセービング協会主催の、BLS 講習会に参加し、資格を取得した。次に、救命処置に対する理解をさらに深めるため、国士舘大学大学院救急システム研究科の方々にご協力いただき、3 回救急医療についての座学をしていただいた。後期は、前期でインプットしたことをアウトプットする活動をした。学生の皆さんの「BLS に対してのハードルを下げる」ための講習会内容を考え実施した。講習会は 11 月 20 日の小峯先生の授業（法学部の生命倫理）の履修者を対象とした。今までに受けてきた BLS 講習会では知ることのできなかつた BLS の重要性や 119 番通報の手順など講習会に組み入れることとした。BLS に対する意識の向上を評価するため、講習会前後でアンケート調査を実施した。講習会により助ける意識は 53%上昇、119 番通報の理解度も 82%上昇した。

来年度には、救命活動への関心をどのように維持させていくのか、定着させていくのか、より多くの人に広めていくにはどうしていくべきかの検討を通じ、救急救命（生命尊厳）とスポーツ振興を普及・啓発していく所存にある。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2019年5月19日(日)

講演者：黒柳 真吾 氏（公益財団法人日本ライフセービング協会）

演 題：スポーツ時の応急処置について

実施施設：中央大学 後楽園キャンパス 2901教室

実施内容：講義、応急処置の実践を通して、人命救助の実際を理解し、その技術を会得する。

成 果：講習会を通じ、応急手当の根拠と実践を学び、救助を行ううえでの心構え、その重要性を理解した。

対象演習：演習 A・B・C

実施日：2019年11月20日(水)

実施都市：東京都八王子市

実施場所：中央大学 多摩キャンパス

実施内容：心肺蘇生法講習会の主催を通して、人命救助の理解および実際、互いの協力による「仲間意識」を深める。

成 果：心肺蘇生法講習会の準備あたり、膨大な救急救命の知識習得および人命の尊さを感じ、さらにそこにとどまらず ONE TEAM としての情報共有、協力の大切さを学んだ。講習会の実施では、人に「伝える」ことの困難さやどのようにすれば伝わるのかを思考し、ONE TEAM であるからこそ大きな壁も乗り越えられる経験を得た。

（５）加納 樹里（文学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

スポーツ医・科学の概要を学習し、演習B以降、より特化したテーマについて研究するための基礎知識を身につける。

<授業の概要>

Aゼミの教室授業は、スポーツ科学の基本を理解するために必要な課題（文献）を教員が示して、履修生が内容をまとめ、発表・討論を行う形で展開した。

後期からは、各自の興味を少しずつ絞り込み、必要に応じてB/Cゼミとも合流し、実習や実験について共同作業を行うことを目指した。

<活動内容>

本年度の加納ゼミA前期は、教室での基本的な文献の抄録発表と身体組成の測定を行い、下記の実態調査や講演会にはゼミ全体で参加した。Aゼミ生の人数が少ないこともあり、後期後半からはB/Cゼミとも合流して、主にCゼミの成果報告や、検討会にも参加する様に仕掛けた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2019年6月19日（火）

講演者：石原 智美 氏（管理栄養士）

演 題：貧血・減量時に注意したい食事のポイント

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 第一体育館会議室

実施内容：女子陸上競技部を対象とした勉強会にゼミ生有志が参加

成 果：理論編聴講後、個別の栄養カウンセリングに繋がった

対象演習：A・B・C

実施日：2019年6月25日（火）

講演者：増田 紘之 氏（新潟医療福祉大学健康科学部）

演 題：活動筋糖代謝とトレーニングによる代謝適応効果について

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 第一体育館会議室

実施内容：公開の形でゼミ生を対象として実施した

成 果：主に陸上競技部員のゼミ生が今後行う乳酸測定ノウハウを併せて学習

対象演習：A・B・C

実施日：2019年9月9日（月）～11日（水）

実施都市：栃木県那須郡

実施場所：那須高原TOWAピュアコテージ周辺

実施内容：ゼミ合宿（写真はB・Cゼミの報告を参照）

成 果：C生のゼミ論完成のための意見交換MTG

及び人数が増えたゼミ生同士の交流の場として最高の機会となった

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019年12月20日（金）

講 演 者：師岡 文男 氏（公益財団法人日本オリンピック委員会（JOC）・世界フライングディスク連盟）

演 題：生涯スポーツとしてのFD（理論と実際）

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 第一体育館教室及びアリーナ

実施内容：講習に先立ち、学部にて生涯スポーツに関する講義を実施し、その後実技指導を受けた

成 果：ニュースポーツや生涯スポーツの知られざる側面を知り、今後生涯スポーツを実施または指導して行く際の参考になるノウハウも得られた

F L P 演習 B・C

<テーマ>

スポーツ活動に伴う効果とリスクを理解し、実用的な知識を身につけることを目標とした。
また、C 生は全員、ゼミ論を提出することをノルマとした。

<授業の概要>

過年度末に予め設定したテーマに基づき、各自のテーマについて文献を検索し、抄読、発表の形式で教室授業を行った。詳細はゼミ論を参照。

【B 生】課題の抽出と、そのために必要な準備（文献調査）と測定等の方法論を学習。

【C 生】一つのテーマについて、掘り下げてきた内容をゼミ論としてまとめる。

<活動内容>

加納ゼミ B・C は今期総勢 18 名、極力グルーピングでの研究発表を呼びかけた結果、競技力向上（陸上競技、走運動、少年サッカー）と、コンディショニング（身体組成、栄養）を中心とした内容での文献抄読と発表を順次実施してきた。

教室外活動としては、下記の様な調査、講演会を ABC 合同で実施した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019年6月19日（火）

講 演 者：石原 智美 氏（管理栄養士）

演 題：貧血・減量時に注意したい食事のポイント

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 第一体育館会議室

実施内容：女子陸上競技部を対象とした勉強会にゼミ生有志が参加

成 果：理論編聴講後、個別の栄養カウンセリングに繋がった

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019年6月25日（火）

講 演 者：増田 紘之 氏（新潟医療福祉大学健康科学部）

演 題：活動筋糖代謝とトレーニングによる代謝適応効果について

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 第一体育館会議室

実施内容：公開の形でゼミ生を対象として実施した

成 果：主に陸上競技部員のゼミ生が今後行う乳酸測定ノウハウを併せて学習

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019年9月9日（月）～11日（水）

実施都市：栃木県那須郡

実施場所：那須高原TOWAピュアコテージ周辺

実施内容：ゼミ合宿

成 果：C生のゼミ論完成のための意見交換MTG
及び人数が増えたゼミ生同士の交流の場として最高の機会となった

対象演習：A・B・C

実 施 日：2019年12月20日(金)

講 演 者：師岡 文男 氏（公益財団法人日本オリンピック委員会（JOC）・世界フライングディスク連盟）

演 題：生涯スポーツとしてのFD（理論と実際）

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 第一体育館教室及びアリーナ

実施内容：講習に先立ち、学部にて生涯スポーツに関する講義を実施し、その後実技指導を受けた

成 果：ニュースポーツや生涯スポーツの知られざる側面を知り、今後生涯スポーツを実施または指導して行く際の参考になるノウハウも得られた。



写真：2019年夏・加納ゼミ夏合宿

（６）布目 靖則（文学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

アウトドアスポーツ、野外教育（自然体験活動）

<授業の概要>

野外教育および自然体験学習の理論と実践について学習する。また、野外活動の安全管理、野外活動を通した安全教育の可能性について探る。関連領域の資格取得に挑戦する。

<活動内容>

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 地図とコンパスの基本（英文和訳）
- 第3回 文献検索法
- 第4回 アウトドア関連の新聞記事を検索
- 第5回 検索した新聞記事内容について討議
- 第6回 スポーツ事故の法的責任 民事、刑事、行政
- 第7回 スポーツ事故の法的責任 過失および注意義務違反の要件
- 第8回 判例から学ぶ「ボート転落事故と学校の責任」「登山と学校の注意義務」
- 第9回 アウトドア・クッキングの基本、器具の使用法
- 第10回 アウトドア・クッキングの計画
- 第11回 アウトドア・クッキングの実践
- 第12回 アウトドア・クッキングのレシピシート作成
- 第13回 自主討議
- 第14回 前期まとめ
- 第15回 夏休み活動報告
- 第16回 スキーの基本装備について
- 第17回 スキーの歴史について
- 第18回 ビンディングの構造と取り扱い
- 第19回 ワキシング
- 第20回 「野外教育の理論と実践」購読（1章～3章）
- 第21回 「FLP 期末交流会」の打ち合わせ
- 第22回 「野外教育の理論と実践」購読（4章～6章）
- 第23回 自主討議
- 第24回 「野外教育の理論と実践」購読（7章～11章）
- 第25回 休講
- 第26回 実態調査に向けて（データ収集法）
- 第27回 実態調査に向けて（データのクリーンナップ）
- 第28回 後期まとめ



▲白門駅伝を走る（11月に学内で）

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2019年5月25日（土）

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：景信山

実施内容：都市近郊エリアのアウトドア活動の現状を見学

成果：オーバーユース気味な現状について確認できた

対象演習：A・B

実施日：2019年8月5日（月）～8日（木）

実施都市：福島県南会津郡

実施場所：尾瀬国立公園

実施内容：尾瀬国立公園周辺の①トレッカーの属性、②トレッカー行動形態、③地元自治体の受け入れ態勢について見学調査を行った。

成果：トレッカーの属性を調査することで、どのような年代のトレッカーが多いのか、なぜそのような状況になるのか、また利用者を増やすためにはどのような方策があるか考える機会を得た。



▲木道を歩く（8月初旬に尾瀬で）

対象演習：A・B

実 施 日：2020年2月3日(月)～8日(土)

実施都市：新潟県妙高市

実施場所：赤倉観光スキー場

実施内容：赤倉スキー場において、①「スノースポーツ安全基準」がスキー場利用者にどのように周知されているのか、また、②スキースクール等において安全指導がどのように行われているのかについての実態を調査した。

成 果：野外活動における安全管理の実態を知り、現状における問題点が把握できた。

F L P 演習B

<テーマ>

アウトドアスポーツ、野外教育（自然体験活動）

<授業の概要>

野外教育および自然体験学習の理論と実践について学習する。また、野外活動の安全管理、野外活動を通じた安全教育の可能性について探る。関連領域の資格取得に挑戦する。

<活動内容>

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 見学調査（景信山登山）の計画①・野外スポーツ関連の論文（教育効果について）読み合わせ
- 第3回 野外スポーツ関連の論文（環境教育について）読み合わせ
- 第4回 野外スポーツ関連の論文（冒険教育について）読み合わせ
- 第5回 見学調査（景信山登山）の計画②
- 第6回 人間工学に関する講義（外部講師招聘）
- 第7回 「安全管理と安全学習（総論）」購読とディスカッション
- 第8回 「安全管理と安全学習（各論1）」購読とディスカッション
- 第9回 「安全管理と安全学習（各論2）」購読とディスカッション
- 第10回 文献検索法
- 第11回 検索された文献について論評
- 第12回 見学調査（尾瀬トレッキング）の計画①装備・食料
- 第13回 見学調査（尾瀬トレッキング）の計画②コースプラン
- 第14回 前期まとめ
- 第15回 夏休みの活動報告
- 第16回 スキーチューンナップ①ワキシング
- 第17回 スキーチューンナップ②エッジおよび滑走面の手入れ
- 第18回 スキーチューンナップ③ビンディングの基礎知識
- 第19回 ガス・ランタンの使用法
- 第20回 大学休み
- 第21回 「野外教育の理論と実践」テーマ決め
- 第22回 「野外教育の理論と実践」からテーマに合わせた発表と討議①
- 第23回 自主討議
- 第24回 「野外教育の理論と実践」からテーマに合わせた発表と討議②
- 第25回 自主討議
- 第26回 スキー場の安全管理について
- 第27回 実態調査（妙高）打合せ
- 第28回 まとめ

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2019年5月25日(土)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：景信山

実施内容：都市近郊エリアのアウトドア活動の現状を見学

成 果：オーバーユース気味な現状について確認できた



▲新緑の「景信山」を歩く

対象演習：A・B

実施日：2019年8月5日(月)～8日(木)

実施都市：福島県南会津郡

実施場所：尾瀬国立公園

実施内容：尾瀬国立公園周辺の①トレッカーの属性、②トレッカー行動形態、③地元自治体の受け入れ態勢について見学調査を行った。

成 果：トレッカーの属性を調査することで、どのような年代のトレッカーが多いのか、なぜそのような状況になるのか、また利用者を増やすためにはどのような方策があるか考える機会を得た。

対象演習：A・B

実施日：2020年2月3日(月)～8日(土)

実施都市：新潟県妙高市

実施場所：赤倉観光スキー場

実施内容：赤倉スキー場において、①「スノースポーツ安全基準」がスキー場利用者にとどのように周知されているのか、また、②スキースクール等において安全指導がどのように行われているのかについての実態を調査した。

成 果：野外活動における安全管理の実態を知り、現状における問題点が把握できた。



▲XC スキーでの雪上ハイキング（昼食）

(7) 小林 勉 (総合政策学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林勉ゼミ演習 A では、4 月から 5 月までは課題図書の輪読を通じて基礎的な研究、調査スキルの習得を行い、その後は、連携して活動する地域・公共マネジメントプログラムのカリキュラムであるサマースクールの準備、調査、報告書の作成を行った。サマースクールでは、対象地域に対してその地域に関する問題を提起し、解決へ向けた政策の提言を目指し、とくに今年度は千葉県銚子市をフィールドに、現地の市役所、企業へのヒアリング等を行い、最終的にはそれらをもとにスポーツツーリズムによる地域活性化を提言した。

<実態調査・見学調査・講演会>

実施日：9 月 17 日(火)～19 日(木)

実施都市：千葉県銚子市

実施内容：サマースクールでの現地フィールドワーク

実施場所：銚子市役所・他

成果：現地の観光振興の現状について踏査し、インバウンド促進および今後の銚子市におけるツーリズムめぐるプロモーションのあり方について政策提言を行うためのデータ収集を行った。

実施日：2019 年 9 月 27 日(金)～30 日(月)・2020 年 2 月 19 日(水)～21 日(金)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：J リーグクラブであるブラウブリッツ秋田との産官連携事業「福たすプロジェクト」の準備および実施

成 果：J リーグ社会連携事業の先駆的モデルとして、全国ネットのテレビ番組や新聞
および秋田県内の各メディアにて取り上げられるなど、大学と J リーグが産官
共同で実施する連携事業として、広く情報発信することができた。

F L P 演習 B

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

スポーツによる地域活性化が日本各地で目指される中、本年度の研究対象地となった秋田県秋田市もその例外ではない。そのような地域の中で、実際のスポーツ振興はいかに実施されているのか。市民や市役所の担当者にヒアリング調査を行い、様々な視点からスポーツによる地域活性化の有り様について検討を行った。また9月にかけて行ったJリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトにおいては、現地のNP0や行政機関と協力し、秋田市の高齢者のコミュニティ形成を促進するプロジェクトを実施した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実 施 日：2019年3月29日(金)～4月2日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：連携する各ステークホルダーとネットワークを構築することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年5月10日(金)～12日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：本年度行うプロジェクトに関する概要説明を行い、それに対する意見交換を行った。プロの興行試合を実際に運営するクラブ経営側の視点からプロジェクトに対する貴重な意見を提示してもらったことで、プロジェクト準備を多角的に検討することができた。連携する各ステークホルダーとネットワークを構築することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年6月7日(金)～9日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：今後使用する施設の視察を行い、施設運営者に対してプロジェクトへの協力要請とヒアリング調査を行った。

対象演習：B

実 施 日：2019年6月25日(火)～27日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：連携する各ステークホルダーとネットワークを構築することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年7月4日(木)～7日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：連携する各ステークホルダーとネットワークを強固にし、プロジェクトのヴィジョンを相互で共有することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年7月9日(火)～11日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：連携する各ステークホルダーとネットワークを強固にし、プロジェクトのヴィジョンを相互で共有することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年7月10日(水)～12日(金)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：連携する各ステークホルダーとネットワークを強固にし、プロジェクトのヴィジョンを相互で共有することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年7月26日(金)～30日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：秋田県庁や秋田市役所に赴き、プロジェクトが及ぼした効果や今後の課題についてローカル・アクターらと意見交換を行った。

対象演習：B

実 施 日：2019年7月29日(月)～8月3日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画およびイベント当日へ向けた準備

成 果：連携する各ステークホルダーとネットワークを強固にし、プロジェクトのヴィジョンを相互で共有することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年8月5日(月)～12日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画およびイベント当日へ向けた準備

成 果：連携する各ステークホルダーとネットワークを強固にし、プロジェクトのヴィジョンを相互で共有することができた。

対象演習：B

実施日：2019年8月26日(月)～28日(水)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画およびイベント当日へ向けた準備

成果：連携する各ステークホルダーとの間で、プロジェクトの具体的実施計画を相互で共有することができた。

対象演習：B

実施日：2019年8月27日(火)～31日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画およびイベント当日へ向けた準備

成果：連携する各ステークホルダーとの間で、プロジェクトの具体的実施計画を相互で共有することができた。

対象演習：B

実施日：2019年9月2日(月)～7日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画およびイベント当日へ向けた準備

成果：連携する各ステークホルダーとの間で、プロジェクト当日のタスク一覧について最終確認することができた。

対象演習：B

実施日：2019年9月19日(木)～10月1日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの実施

成果：数百名に及ぶイベント参加者に対して、円滑に各イベントを遂行することができ、その模様は各メディアにて大きく取り上げられた。

対象演習：B

実施日：2019年9月29日(日)

講演者：渡部 真吉 氏 (ワタナベ整骨院)

演 題：高齢者世代における健康増進へ向けた具体的な運動のあり方について
実施都市：秋田県秋田市
実施施設：秋田県立スポーツ科学センター
実施内容：健康増進への意欲を高めてもらう運動プログラムについて、運動療法を専門とする立場から詳細に解説してもらった。
成 果：参加した高齢者グループにおいて、運動に対するインセンティブが高まり、スポーツを通じた地域活性化の意義について理解を深めることができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年9月29日（日）
講 演 者：山本 浩 氏（法政大学スポーツ健康学部）
演 題：サッカー観戦初心者へ向けた実況と解説の手法について
実施都市：秋田県秋田市
実施施設：八橋運動公園
実施内容：サッカーの初心者である高齢者グループでも理解できるようなスタジアム実況を担当していただき、高齢者の方々でもスタジアムに足を運んでもらえるようなインセンティブ形成を行った。
成 果：サッカー場の盛り上がりを実感してもらうことで、高齢者グループのコミュニティ形成を構築することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年9月29日（日）
講 演 者：今村 貴幸 氏（常葉大学保育学部）
演 題：高齢者世代における健康増進へ向けた具体的な運動のあり方について
実施都市：秋田県秋田市
実施施設：秋田県立スポーツ科学センター
実施内容：健康増進への意欲を高めてもらう運動プログラムについて、臨床リハビリテーション医学を専門とする立場から詳細に解説してもらった。
成 果：臨床リハビリテーション医学の立場から、運動に対するインセンティブが高まり、より多くの高齢者の方が足を運べるような機会作りを提供することのプロジェクト意義、マネジメント上での戦略について多くの知見を習得することができた。

F L P 演習 C

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

スポーツによる地域活性化が日本各地で目指される中、本年度の研究対象地となった秋田県秋田市もその例外ではない。そのような地域の中で、実際のスポーツ振興はいかに実施されているのか。市民や市役所の担当者にヒアリング調査を行い、様々な視点からスポーツによる地域活性化の有り様について検討を行った。また9月にかけて行ったJリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトにおいては、現地のNP0や行政機関と協力し、秋田市の高齢者のコミュニティ形成を促進するプロジェクトを実施した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2019年9月27日(金)～10月1日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの実施

成果：数百名に及ぶイベント参加者に対して、円滑に各イベントを遂行することができ、その模様は各メディアにて大きく取り上げられた。

V. 地域・公共マネジメントプログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

2000 年 4 月に地方分権一括法が施行され、地方自治体は国から権限を委譲されるとともに自己管理・自己責任のもとに政策の立案・運営を求められることになりました。

また、東日本大震災や福島原発事故など複合的な災害に見舞われ、被災地を中心として多くの地域の人々の生活が脅かされている現状があります。

このような状況の中で、2014 年には、「まち・ひと・しごと創生法」が成立し、少子高齢化への対応や東京圏への人口集中の是正を推進することが明示され、2018 年の「改正地域再生法」では、企業の東京からの移転や市町村の商店街活性化、空き店舗活用の支援などが盛り込まれました。

しかし、それでもなお、それぞれの地域は、非常に複雑かつ多様化した様々な問題を抱えています。少子高齢化の進行と福祉、地場産業や商店街の衰退、地域の環境、治安、教育に関する問題、市町村合併や財政赤字の拡大、そして安全・安心な生活の場の喪失など公共的な重要課題が山積し、住民の不安・不満が高まっています。このような状況に対処するには、行政だけでなく、地域の人々も、「新しい公共」という考え方で、独自に創造的な戦略をもって取り組む素地ができつつあります。様々に複合する課題を抱えた地域を目の当たりにして、市民による健全なまちづくり・コミュニティづくりへの参画がますます高まっています。

このような状況のなか、地域社会において学際的かつ総合的な取り組みにより、多様な社会的課題の解決策を策定するなど、公共マネジメントの政策形成を担える有能な人材の養成が強く求められています。

これらの社会的要請を鑑み、それぞれの地域における諸問題に対して、学際的総合的にアプローチを進め、これを解決する高度な専門的解決能力を有する人材の養成を目的とした教育演習活動を本プログラムでは展開しております。2019 年度は、プログラム全体イベントとして、千葉県銚子市をケーススタディとし当地にてフィールドワークを実施の上、行政や市の関係者との間で実地見聞と調査を元に中間報告を行い、多摩校舎にも関係者をお招きして最終報告発表を行いました。

本プログラムでは、公務員志望の学生だけでなく、政界やNPOでの活動を通じて地域の社会問題に積極的に関与し、問題解決に取り組んでいきたいという志の高い学生、商店街や都市の建設・インフラ整備など民間企業においても都市計画・都市運営に積極的に関与したいなど地域問題に対して高い学習意識を持っている学生のニーズにも積極的に応えていきます。

2. 2019 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
1	工藤 裕子	法学部	11	10	10	合併（A・B・C）
2	鳴子 博子	経済学部	11	－	－	単独（A）
3	山崎 朗	経済学部	－	7	11	単独（B・C）
4	斯波 照雄	商学部	－	－	10	単独（C）
5	根本 忠宣	商学部	4	7	4	合併（A・B・C）
6	御船 洋	商学部	－	－	12	単独（C）
7	佐藤 修一郎	理工学部	－	－	4	単独（C）
8	天田 城介	文学部	10	11	4	単独（A・B・C）
9	新原 道信	文学部	9	13	12	単独（A・B・C）
10	黒田 絵美子	総合政策学部	－	7	11	単独（B・C）
11	小林 勉	総合政策学部	3	5	6	単独（A・B・C）
12	関 有一	総合政策学部	12	9	－	単独（A・B）
13	堤 和通	総合政策学部	3	7	5	合併（A・B・C）
合計			63	76	89	

3. プログラムスケジュール

- | | |
|------|---|
| 4 月 | 履修ガイダンス
第一回部門授業担当者委員会 |
| 6 月 | 2020 年度募集に伴う総合ガイダンス |
| 7 月 | 第二回部門授業担当者委員会 |
| 9 月 | 2020 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
学外活動（サマースクール・千葉県銚子市） |
| 10 月 | 東京都への政策提言 |
| 11 月 | 2020 年度募集に伴う選考試験 |
| 12 月 | 第三回部門授業担当者委員会
学内活動（サマースクール成果報告会・期末成果報告会） |
| 3 月 | FLP 修了発表
FLP 修了証書授与 |

4. プログラムの活動

①サマースクール

実施日： 2019年9月17日(火)～9月19日(木)

実施都市： 千葉県銚子市

実施場所： 銚子市役所・他

実施内容： 市役所および他企画/外部団体へのヒアリング、現地調査、フィールドワーク、講演会、サマースクール中間報告会

②東京都への政策提言

実施日： 2019年10月23日(水)

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 5203 教室

実施内容： 東京都から長期戦略の策定にあたり、10年後、20年後の東京に関する政策提言

③サマースクール成果報告会・期末成果報告会

実施日： 2019年12月14日(土) 13:00～

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 8102 教室

実施内容： サマースクール参加ゼミによる成果報告
各ゼミによる年度活動報告

5. これまでのプログラム修了生の主な就職・進学先

法務省、総務省、農林水産省、厚生労働省、国土交通省、特許庁、参議院事務局、国税庁、東京国税局、地方裁判所、裁判所事務官、東京都庁、京都府庁、千葉県庁、埼玉県庁、神奈川県庁、岐阜県庁、長野県庁、新潟県庁、山梨県庁、岩手県庁、静岡県庁、三重県庁、板橋区役所、江東区役所、江戸川区役所、大田区役所、北区役所、渋谷区役所、千代田区役所、練馬区役所、港区役所、多摩市役所、昭島市役所、羽村市役所、町田市役所、三鷹市役所、武蔵野市役所、渋谷市役所、さいたま市役所、蕨市役所、川崎市役所、小田原市役所、相模原市役所、横浜市役所、宇都宮市役所、韮崎市役所、松本市役所、名古屋市役所、鈴鹿市役所、堺市役所、神戸市役所、福島県警察本部、都市再生機構、四国電力、沖縄電力、日本銀行、みずほフィナンシャルグループ、岩手銀行、北越銀行、山梨中央銀行、多摩信用金庫、横浜信用金庫、明治安田生命、SMBC 日興証券、日本総合研究所、ベネッセコーポレーション、マイナビ、明治乳業、鈴与、日立パワーソリューションズ、伊藤忠丸紅鉄鋼、本田技研工業、ヤンマー、ダイキン工業、NECソリューションイノベータ、インテリジェンス、電通九州、東急コミュニティー、京成電鉄、西日本鉄道、舞浜リゾートライン、イトーヨーカ堂、セブン-イレブン・ジャパン、東京大学大学院法学政治学研究科、早稲田大学大学院法務研究科、中央大学大学院（法学研究科、文学研究科、公共政策研究科）など

(1) 工藤 裕子 (法学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

地域資源を活かした地域経営を考える：そのための地域資源の再発見・再評価、マネジメント

<授業の概要>

少子高齢化や地方分権化の中でさまざまな問題に直面している地域経営について、その地域に特有の資源（人材、財源、歴史文化、政治、地勢など）をいかに再発見し、再評価するか、さらにそれらをいかにマネジメントするか、を世界、特に大陸ヨーロッパ諸国の事例および日本の事例を通じて検討、考察する。地域経営の問題点について、文献およびフィールド調査で整理、理解したうえ、主に関係者へのヒアリングを通して日本のベストプラクティスを分析し、また海外事例の収集、調査を行う。過疎地域の再生事例として、中部イタリアの中山間都市にてワークショップ、研修を行うことを演習の一環とする他、日本の地方自治体でのフィールド調査も実施する。事例として扱うのは主に、諸資源が限定されている中小都市であり、大都市あるいは大都市圏における戦略等は対象としない。

<活動内容>

演習Aは、春学期冒頭に社会科学の調査方法、プレゼンテーションの仕方、レポートの書き方等を学んだ後、国内実態調査（静岡県掛川市）を実施した。実態調査のための事前学習、調査テーマの決定、訪問先の選定、主要質問事項の確定などを行い、実態調査時にはヒアリング・インタビューを実施し、調査後の追加質問などを実施したうえ、春学期末に政策提言のプレゼンテーションを行い、また夏休みには個人レポートを作成した。春学期の後半はまた、サマースクールの準備をも実施した。秋学期は、海外実態調査の準備作業を進めつつ、サマースクールの最終報告、報告書作成などの日程に合わせ、サマースクールのまとめの作業も進めた。サマースクールについては、観光政策に関する政策提言を行ったうえ、報告書を作成した。秋学期後半は海外実態調査の準備を中心に実施し、春休み（2月22日～3月4日）に海外実態調査（イタリア、エミリア＝ロマーニャ州）を実施する。

演習Bについては、春学期は前年度末春休み中に実施したイタリア研修の報告書作成の作業および各人の関心テーマを踏まえた卒論テーマの選定を中心に個人研究発表と討論を進めた。春学期の後半はまた、夏休みに実施する演習Bのみの国内実態調査の準備を行った。演習A時に実施した海外実態調査を踏まえ、それぞれが関心を持つテーマを持ち寄り、演習B全体として調査するテーマの決定、訪問先の選定、訪問先機関との調整などを行い、夏休みに演習Bとしての国内実態調査（奈良）を実施した。秋学期にはこの研究成果をゼミで発表したうえ、卒論のテーマを選定し、個人による研究発表を行った。春学期に作成した海外実態調査の報告、国内実態調査の報告、各人の研究テーマについてのレポートを含むB生の一年間の活動記録をまとめた報告書を作成した。

演習Cについては、春学期にそれぞれの卒論のテーマを最終決定したうえ、執筆計画を作成、夏休みから秋学期にかけて論文を執筆、完成させたうえ、卒業論文集を編集した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2019年6月8日(土)～9日(日)

実施都市：静岡県掛川市

実施場所：掛川市役所

実施内容：掛川市の生涯学習活動、市民と行政の協働、企業の役割、農業振興、福祉政策、観光政策および観光まちづくり、交通政策、中心市街地の活性化についてなどヒアリングおよび調査

成果：掛川市の生涯学習活動の成果、行政と市民との協働のあり方などを学んだ他、中心市街地におけるまち歩きを通して、商店街の活性化等について調査した。市役所の関係者、コミュニティ活動に従事している人々、企業経営者等へのヒアリングを通して、現地調査、ヒアリングを中心とする社会調査の方法を学んだ。また、事前調査、事後のフォローアップの方法、そしてそれらを政策提言としてまとめ、プレゼンテーションおよびレポートにまとめる、という一連の作業の進め方についてマスターした。プレゼンテーションはテーマ別グループで実施し、レポートは夏季休業中の課題として個人で作成した。

対象演習：A

実施日：2019年6月8日(土)

講演者：山本 和子 氏（掛川おかみさん会）

演題：掛川というまち：アートのあるまち掛川とおかみさん会の活動

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市役所および市内

実施内容：市役所にておかみさん会の活動概要およびその一環として実施されてきたパブリック・アートに関する活動についてお話をいただいたうえ、また実際に市内のパブリック・アートを案内していただきながら街歩きを実施した。

成果：上記実態調査中に実施した講演会であり、プレゼンテーションの実施およびレポートの作成に大いに活用された。

対象演習：A

実施日：2019年6月9日(日)

講演者：佐藤 雄一 氏（ローカルライフスタイル研究会・合同会社互産互生機構）

演題：ローカルライフスタイルの顕在化と互産互消活動

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市役所

実施内容：掛川市においてデザイン会社を経営する傍ら、まちづくりの中心的な活動家の一人である佐藤氏より、最近の掛川市における市民活動についてお話しした

いた。特に、沖縄や北海道と作り上げてきた協力関係、中でも「地産地消」から「互産互消」に転換した経緯やそのコンセプト等についてお話しいただいた。

成 果：上記実態調査中に実施した講演会であるが、当該テーマについては特に関心を持って調査した学生が多かったため、プレゼンテーションの実施およびレポートの作成に大いに活用された。

対象演習：A

実 施 日：2019年6月9日(日)

講 演 者：長谷川 八重 氏（ローカルライフスタイル研究会）

演 題：ローカルライフスタイルの顕在化と互産互消活動

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市役所

実施内容：上記の佐藤氏とともに掛川市の生涯学習活動およびスローライフ活動の中心人物の一人であり、これまでにさまざまなまちづくりの活動に積極的に関わってこられた長谷川氏からは、具体的な商品開発の体験についてお話しいただいた。

成 果：上記実態調査中に実施した講演会であるが、当該テーマについては特に関心を持って調査した学生が多かったため、プレゼンテーションの実施およびレポートの作成に大いに活用された。

対象演習：B

実 施 日：2019年9月12日(木)～13日(金)

実施都市：奈良県奈良市

実施場所：奈良県庁

実施内容：各人のテーマに基づいたヒアリング

成 果：各人が卒業論文のテーマとして発展させるべきテーマをそれぞれ模索し、またその情報、データを収集した。B生のほとんどが年度内に卒論のテーマを特定するに至った。

対象演習：A

実 施 日：2019年9月17日(火)～19日(木)

実施都市：千葉県銚子市

実施場所：銚子市役所・市内各地・他

実施内容：観光政策、特に「グルメライド」に着目したため、関連部署へのヒアリングを通じて必要な情報、データ等を収集した他、関係箇所を実際にチェックするなどした。

成 果：ソーシャル・メディアおよびテクノロジーを組み合わせた「グルメライド」の提案という形で報告会において政策提言を行い、またプログラム全体の報告書に提供する報告をまとめた。

対象演習：C

実施日：2019年12月5日(木)～9日(月)

実施都市：北海道富良野市・登別市・札幌市

実施場所：新千歳空港、富良野のチーズ工房・ワイン工場、富良野市役所経済部商工観光課、観光協会、登別市の土産物店、札幌市の土産物店

実施内容：それぞれ担当者や店員にヒアリングをし、北海道の土産物について調査した。

成果：卒論で扱う北海道の土産物について、北海道で販売されている土産物を調査した。土産物を地域活性化に活かすことで地場産業を活性化させ、経済効果を期待する、というシナリオのもと、この実態調査の結果から、北海道の富良野市の事例を中心とする卒業論文を作成した。今後、土産物に力を入れる地域が直面する課題や方向性を考察したうえ、地域に与える影響、ブランディングや観光まちづくりの展望について考察した。

対象演習：A

実施日：2020年2月22日(土)～3月4日(水)

実施都市：チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ（イタリア）

実施施設：ファッジョーリ農場・エミリア＝ロマーニャ州の中山間地域の小規模自治体・他

実施内容：EUのプロジェクト等でもよく知られるアグリツーリズム農場であるファッジョーリ農場を拠点とし、小規模自治体および私企業、大学、組合等の活動が活発なエミリア＝ロマーニャ地域の地域振興政策について、地方自治体、地域振興に関係する組合や公社、および企業家へのヒアリングおよび体験学習を通じて、調査した。

成果：海外においてもヒアリング、インタビューを行い、本格的な調査が実施できた。特に、日本では限界集落と呼ばれるような地域においても、地産地消、観光、アグリツーリズム、スローフードなどによって活性化することが可能であることを知ることができた。地域振興政策に関連し、イタリアの商業活動について複数の市役所に対してヒアリングを行ったほか、諸政策による地域振興およびコミュニティの活性化について、複数の市役所等に対してヒアリングを行った。地元企業、組合組織、団体などを訪れヒアリングを行った他、伝統産業や農業のブランド化などを実施している企業や個人のもとで体験学習を行った。

(2) 鳴子 博子 (経済学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

ジェンダー関係(横軸)と世代間関係(縦軸)から社会の中で人はいかに働き、暮らし、生きるかを考える

<授業の概要>

テキストの輪読によって問題意識を共有し、地方自治体の職員や研究者の特別講演などを通して、調査研究の姿勢、方法を学び、サマースクールの実態調査の準備、期末報告会での最終発表に向けての研究の練り直しを行った。加えて、10月開催の「東京都への政策提言」に2チームが参加した。オリジナルの図書館講習で情報収集力を高めた。

<活動内容>

前期は、濱口桂一郎『働く女子の運命』(文春新書、2015年)の輪読からスタートした。本ゼミとサブゼミで、サマースクールの事前準備(テーマ選び、情報収集、現地調査のプラン策定)を進めた。多くのテーマ候補から「銚子市の防災対策をジェンダー視点から再検討する」をテーマに選んだ。前期の最後に、柏崎市の職員による特別講演を実施して、地方自治体の実情への理解を深めた。9月のサマースクール本番は濃密な学びの時間となった。

後期は、サマースクールの反省、振り返りから始まった。鳴子博子『ルソーと現代政治』(ヒルトップ出版、2012年)の輪読で問題意識を高めた。10月開催の「東京都への政策提言」に参加し、2つの課題「障害者の就労」・「文化やエンターテインメントを楽しめるまちづくり」に対して積極的な提言を行った。11月には相模原市の高校増設問題への住民(特に女性たち)と市の連携をテーマとした特別講演を実施した。期末報告会に向けて、議論を重ね、政策提言の練り直しを図った。12月の期末報告会では、幸いにもアイデア賞を受賞することができ、学生たちの励みとなった。

本年度は教員がFLP担当初年度ということもあり、試行錯誤の一年であったが、学生たちは本ゼミ以外も時間をつくって熱心にゼミ活動に取り組み、実り多い一年となった。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2019年7月30日(火)

講演者：箕輪 正仁 氏 (新潟県柏崎市役所総合企画部)

植木 馨 氏 (新潟県柏崎市役所総合企画部)

演題：柏崎市における男女共同参画と防災対策の取り組みについて/移住政策は定住政策から

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 7205教室

実施内容：柏崎市総合企画部部長である箕輪正仁氏による講演を行った。箕輪氏は柏崎市における男女共同参画の推進の状況、男女共同参画基本計画の概要および原子力防災を含む柏崎市の防災対策の状況と、多岐にわたる内容についてスライド

を駆使して話された。同市総合企画部元気発信課長である植木馨氏は、柏崎市の推進するIターン、Uターン等の移住政策について情報発信プロジェクトの紹介を中心に話された。

成 果：柏崎市は原発を抱える自治体であると同時に、平成16年に発生した新潟県中越地震によって大きな被害を受けた地域でもある。そうした同市の防災への取り組みを現職の市役所職員の方から直に伺う経験は、銚子市の防災対策の調査を控えた学生たちにとって大きなものがあった。地方自治体の抱える問題、実情について学生たちが具体的に知り、感じとる第一歩となった。講演者は講演後の質疑応答の際、それぞれの質問に応答してくださっただけでなく、事後にお送りした学生の手記コメント、質問に対しても丁寧にお答えくださり、高い教育効果があった。

対象演習：A

実 施 日：2019年11月14日(木)

講 演 者：沖川 伸夫 氏（中央大学法学部兼任講師）

演 題：相模原市県立高校設置促進運動にみる一断面―婦人学習グループと河津市政の連携内容

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 7514教室

実施内容：日本政治史がご専門の中央大学法学部兼任講師の沖川伸夫氏による講演を行った。沖川氏は、神奈川県相模原市で展開された市民運動の特徴とその運動と市政との関係、連携がどのようなものであったかを中心に話された。1974(昭和49年)、相模原市の県立高校設置推進運動は「市民総ぐるみ」の抗議運動として展開した。この運動に至った経緯と運動の展開過程には、女性リーダーの活躍、婦人学級、婦人学習グループから住民運動が展開したという大きな特徴があった。予定時間いっぱいには当時の状況を丹念に説明された。

成 果：講演者は詳細なレジュメはもとより、多くの資料、写真を含むスライドを用意され、学生たちの理解が進むための周到的準備をされて講演に臨まれた。沖川氏は講演でも質疑応答においても、一次資料の重要性を強調された。本学に近い自治体で展開した女性たちの活動と市政の連携を学べたことは、期末報告会での成果発表に向かう学生たちに、大きな刺激となった。講演者の調査研究の手法や研究成果のまとめ方からも多くの学びがあった。

(3) 山崎 朗 (経済学部・教授)

FLP 演習 B

<テーマ>

地域創生の新しいデザイン

<授業の概要>

新しい地域間格差についての認識を深め、その格差是正に向けての新しい地域創生政策や「非空間的政策」の活用策について学習する。

<活動内容>

今年度、FLP 演習 B・山崎ゼミでは、主に地域創生に関わる事例研究をもとに、懸賞論文の執筆活動に取り組んだ。とりわけ前期は、野村総合研究所の 2019 年度(第 14 回)NRI 学生小論文コンテスト応募に向けて、持続可能なまちづくりに関する知識をお互いに共有しながら深めた。このコンテストでは、文学部 3 年の北夏苗が「世界が認める持続可能な観光地」というテーマで、敢闘賞を受賞した。

後期は主に、旅館や物流に関わる地域創生のあり方を模索し、共同論文の執筆に向けて事例研究を実施しながら取り組んだ。一般財団法人日本ホテル教育センターの 2019 年度(第 9 回)学生観光論文コンテストに「FIT に fit!」、一般社団法人ヤマトグループ総合研究所の第 1 回学術論文部門に『世界が驚く物流 ～物流×脱物流×地域創生～ ―「ミニマム物流」による社会問題への解決に向けて―』というテーマで、それぞれ応募した。また、今年度執筆したこれらの懸賞論文を 1 冊の論文集にまとめ、ゼミ生同士で共有する予定である。

さらに、地域・公共マネジメントプログラム全体で実施した東京都への政策提言に向けて、ゼミ生の中でも特に関心が高かった外国人の教育問題について政策研究した。そして、山崎ゼミは「日本人と外国人が共に暮らす共生社会を築く」というテーマで、パワーポイントを用いた政策提言を実施した。

FLP演習C

<テーマ>

地域のプレミアム化による地域創生

<授業の概要>

地域資源を活用した地域創生策についての調査研究、論文執筆

<活動内容>

今年度、FLP 演習 C・山崎ゼミでは、主に地域創生に関わる事例研究をもとに、インバウンドに関する知識をお互いに共有しながら深め、懸賞論文の執筆活動に取り組んだ。前半は、オーバーツーリズムやゼロドルツーリズムなどの問題が深刻になっている現状で、日本における環境に配慮した持続可能な観光の必要性について研究した。結果として、地球の歩き方総合研究所の懸賞論文では、「インバウンド、ナショナルトラスト、ルレ・エ・シャトー—究極のリゾート—」というテーマで、奨励賞を受賞した。

また後半は、一般社団法人の ICT マネジメント研究会の第 1 回学生小論文アワードに「潜在的ギグワーカー」というテーマで、公益財団法人みずほ学術振興財団の第 61 回懸賞論文（経済の部）に「人口減少と日本経済」というテーマで、それぞれ応募した。

上記の論文執筆を通して、多角的な情報収集や説得力のある論理構成など、様々な学びを得ることができたと考えている。

FLP 演習 C

<テーマ>

地方創生とその戦略

<授業の概要>

FLP 演習 A および FLP 演習 B で学習、調査してきた知識や情報をもとに、卒業論文または卒業レポートを作成することを主目的とします。また、これまでの調査結果等をもとにして、みずほ学術財団やヤンマーなどの懸賞論文に応募することも検討します。卒業論文や懸賞論文に執筆に関して、追加の調査等が必要となった場合には、調査を実施します。

<活動内容>

今年度、FLP 演習 C・山崎ゼミでは、各々の興味関心と照らし合わせつつ、文献を読み進めた。その上で、それぞれが就職後も活かせるよう知識を変容させ、社会人の方と議論する機会をもった。

具体的には、河井は【「未来の東京」への論点】に対し、「空の交通網と国土利用計画」という具体的な提案を行った。横田基地を中心とした産業集積に関しては、主に二つのポイントから、多摩地域の活性化につながることを示した。横田基地の民間利用は、羽田・成田国際空港と比較し、立地から見ても差別化できること、その横田基地が位置する多摩地域は全国的に見ても航空・宇宙産業に強みがあるため、集積を進め、より特化していく方向性がよいことである。その上で、東南アジアを中心とした市場の動向から、今後需要が高まってくる中小型機と小規模空港を活用し、国際的な関係人口の増大を図ることを提言した。同時に地方創生に関して、東京都だからこそできることとして、地方の小規模空港とのコネクションを密にし、両地域との間の関係人口の増大を図るとともに、新しい東京の玄関口の設定を提言した。

佐野は「電力インフラを活用した、地域活性化」をテーマに取り組んだ。「電力」の奥深さを学ぶと共に、「電力」が秘める可能性を知り、来年度から働く意欲をより醸成させることができた。

電力は今後もガス・石油と並んで主要なエネルギーであり続け、IT 化や Iot 化の進展 (Society5.0) に呼応してその重要性はますます増大していく。その一方で、少子高齢化の進行による人口減少時代において、いかにして従来の電力インフラを維持・発展させていくのかという大きな課題を背負っている。その解決策の一つとなるのが、電柱や鉄塔、地上機器などの電力インフラ活用した新規事業である。電柱に 5G の基地局や防犯カメラ・センサーなどを搭載した「スマート・ポール」は、周辺地域の利便性向上や治安対策に貢献することができる。また、地上機器を電気自動車の充電スポットとして利用することは、環境にやさしい電気自動車の普及促進につながる。

これから、電力インフラの潜在的な可能性を追求し、日本社会に新たな価値を提供し続けていきたい。

鈴木は「今後のインバウンドの動向」をテーマに取り組んだ。本講義において我が国がさらなる外国人観光客を獲得する方法として、ロシア人の誘致が鍵であるということを研究した。

具体的には、ロシアと地理的にも近い北海道に誘致することが今後のわが国のインバウンド戦略であるということについて研究した。そのうえでまずロシア人観光客をなぜわが国に増やす必要があるかを学んだ。そしてわが国のロシア人観光客の現状をデータやアンケート調査を通して分析した。そして最後にロシア人が求める日本食や景勝地が多く存在する観光地を身近に感じることが出来ること。また地理的に近い北海道にロシア人を誘致すべきと考えた。しかし、研究の反省として、でなぜロシア人を北海道に誘致すべきであるかを示す根拠が乏しかった点があった。その反省を基に、今後の北海道とロシア人観光客を結びつける効果的な方法について考えていきたい。

石井は「格安航空会社の展望」をテーマに取り組んだ。航空産業の歴史を読み解くとともに、現在の航空産業を牽引する格安航空の可能性を研究した。東京五輪開催を目前となった現在、日本の航空産業は右肩上がりだ。通称 LCC と呼ばれる格安航空は、ようやく日本にも定着してきたがシェア率は諸外国と比較すると非常に低い。LCC は格安なことから新規需要を創出し観光客数を増加させる力がある。島国である日本にとって航空産業は観光産業と切り離せない重要な産業である。航空業界を牽引する LCC は島国日本において、重要な役割を担うとともに日本の観光業界を大きく変える力となると考えている。

平良は「沖縄県の平和教育の現状と課題」をテーマに取り組んだ。具体的には、沖縄県の平和教育の現状と課題について統計データとインタビューを通して分析を行った。統計データでは見えなかった生の声を実際に聞くことができ充実した時間を過ごすことができた。平和教育の現状はマンネリ化していることの根本的な課題として、戦争体験者の減少により直接話を聞く機会が減少していることや、平和教育教材の不足、平和教育の時間の確保の難しさなどが挙げられた。

さらに今後の平和教育において、沖縄戦の延長戦の学びを行うことの必要性を述べた。なぜなら、今を生きる子どもたちの生活からかけ離れることを防ぎ、教科書の中のひとつの歴史という認識が変わると考えるからだ。そのためにも様々な地域や団体が様々な場所で連携を行い、それぞれの地域の平和教育を行うべきだと主張した。

（４）斯波 照雄（商学部・教授）

FLP演習C

<テーマ>

比較都市史研究

<演習のスケジュール>

2019年度前期には4年生(FLP演習C)は、各ゼミ生がそれぞれ研究対象とする都市を選択し、テーマを決定して資料収集を開始し、授業において個別に進行状況を報告した。後期には各自が設定したテーマに基づいて収集した資料を分析し、進行状況に応じて論文作成に向けた口頭発表を行った。各ゼミ生は、口頭発表の際のアドヴァイスなどを参考に文章化を進め、最終的に1月にゼミでの最終発表会での口頭発表を経て、卒業論文を完成させた。2月にそれら成果を卒業論文集にまとめた。

<活動内容（学内・学外・講演会等）>

演習Cは個人指導を基本としている。2019年度FLP演習Cゼミ生は、それぞれの選択した都市について、全般的な特徴を明らかにし、個別のテーマを設定して論文をまとめた。論文作成過程において各都市のデータのグラフ化、重要な出来事の年表化などを行い、随時口頭発表を行いながら、グラフの解説、動向・現状分析した内容を文章にまとめ、添削、修正を繰り返し、それぞれの都市に関する論文をまとめた。

2019年度のFLP演習Cゼミ生は、それぞれが研究対象に決定した生まれ育った市やこれから勤務する東京の区や市、あるいは興味をもった福岡県久留米市や山形県鶴岡市などについて各自卒業論文を完成させ、それらの論文をまとめた『2019年度FLP 斯波ゼミ卒業論文集』を作成した。

(5) 根本 忠宣 (商学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

【A・B生】

地域における雇用創出について考える

【C生】

地域に関する研究論文の作成

<授業の概要>

【A・B生共通】

地域における雇用の場に着目して、地域発展を支えるための雇用創出の可能性について徹底的に考える。具体的には、以下の点に着目して学習を深めていく。

- 自己雇用の場としての商店
- 地域経済における中小企業の役割
- 創業の場としての地域
- 地域経済発展におけるイノベーションの役割
- 地域コミュニティとソーシャルビジネス
- 地域経済の発展を支えるインフラとしての金融、行政

【A生】

- ・サマースクールへの参加と報告書の作成
- ・伊東市並びに橋本商店街活性化プロジェクトへの参加と提案企画書の作成

【B生】

- ・伊東市並びに橋本商店街活性化プロジェクトへの参加と提案企画書の作成
- ・四大学合同対抗ゼミナールへの参加と報告書の作成

【C生】

卒業論文の作成

<活動内容>

根本ゼミは、地域発展を支えるための雇用創出の可能性について文献講読、現地調査を行う。

文献は教授指定のもの若しくは学生が希望したものを輪読する。現地調査について今年度は神奈川県相模原市、静岡県伊東市にて行った。また、A生がサマースクールで千葉県銚子市を、B生がゼミ交流会のために香川県高松市、岩手県盛岡市を訪れた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2019年6月8日(土)

実施都市：千葉県銚子市

実施場所：犬吠崎マリンパーク・他

実施内容：サマースクールのテーマの候補である観光振興と宅幼老施設建設の2つについてより確度の高いデータを得るため、観光スポットや宅幼老施設に活かそうと考えている水族館など実際に視察を行った。

成 果：観光スポットについては遠方というよりも、県内や茨城県からの人が多かった。また宅幼老施設に活かすため水族館などを訪問したが、実現に向けては課題が多く見つかった。

対象演習：B

実 施 日：2019年6月12日(水)～17日(月)

実施都市：北海道札幌市

実施場所：北海道大学・他

実施内容：ゼミ交流会の研究内容中間発表ならびに北海道神宮例祭の視察と橋本七夕祭りととの比較を行った。

成 果：ゼミ交流会にて他大学の学生、教授から私たちの研究内容についてフィードバックを頂き、今後に向けて参考にすることができた。また、祭りにおける出店や導線のひき方を比較することができた。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年7月30日(火)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：橋本駅周辺

実施内容：橋本七夕祭りにおけるInstagram用スポットの企画立案を行った。

成 果：橋本七夕祭りにおけるInstagram用スポットとして、風車ゾーンと竹灯籠ゾーンを提案し、承認を得ることが出来た。社会人に混じって自らのアイデアを披露する貴重な経験となった。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年7月31日(水)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：橋本駅周辺

実施内容：Instagram用スポットに必要な材料の見積もり提出と購入、ならびに実行委員会の一員として竹の設置などを行った。

成 果：決められて予算内で見積もりをつくり、提案することができた。また、華やかな祭りの舞台の裏側について知ることが出来た。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年8月1日(木)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：橋本駅周辺

実施内容：Instagram用スポットの作成と31日までには交通規制の関係上行えなかった規模の大きな竹飾りの設置を行った。

成 果：竹の穴あけなど、自ら企画したものを自らの手で作成し、七夕祭りの飾りつけの一つとすることができた。また有志で集まっている竹飾り設置部隊の方々と交流を深めつつ、祭りの準備をすることができた。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年8月2日(金)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：橋本駅周辺

実施内容：七夕祭り等当日の準備と運営に参加した、具体的にはボランティアの方々の取りまとめやクリーンステーションの巡回整理などを行った。

成 果：大勢のボランティアの方々を統括する難しさや楽しさを知ることが出来た。また、これまでの準備がどのように来場者の方々の心に響いているのか、反応を直接確認することが出来た。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年8月3日(土)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：橋本駅周辺

実施内容：七夕祭り当日の運営としてスタンプラリーの景品の配布やクリーンステーションの巡回整理などを行った。またInstagram用スポットの修繕を行った。

成 果：祭りのようなイベントで不測の事態が起こった際の対処として迅速な決定、明確な指揮系統の大切さを行うことの大切さや一方で指揮系統に拘泥しない臨機応変な対応も必要であることを学んだ。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年8月4日(日)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：橋本駅周辺

実施内容：七夕祭りの運営と撤収作業に従事した。30万人が来場する大きなイベントでのInstagram用スポットの利用状況の確認と反省を行った。

成 果：Instagram用スポットは賞を頂くことが出来た。撤収作業の迅速さや適切さ、次年度への引継ぎをすることができた。

対象演習：A・C

実 施 日：2019年9月3日(火)～5日(木)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美温泉海ホテル

実施内容：「宇佐見地区が今後発展していくためにはどうすればよいか」というテーマのもと、ヒアリングやフィールドワークを行い、得られた情報を基に根本ゼミとして政策提言を行った。

成 果：今まではあまり交流がなかった宇佐美地区の方とのつながりを作ることができた。また、限られた場所と観光資源の中でまちを発展させるためにはどのようなすればよいか議論することができ、今後の活動に役立てることができる。

対象演習：B

実 施 日：2019年9月3日(火)～5日(木)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美温泉海ホテル

実施内容：「宇佐見地区が今後発展していくためにはどうすればよいか」というテーマのもと、ヒアリングやフィールドワークを行い、得られた情報を基に根本ゼミとして政策提言を行った。

成 果：宇佐美地区の住民の方と宇佐美地区には関わりのなかった海ホテル経営者側とでどうすればまちづくりを成功させることができるのかを議論し、新しいまちづくりの在り方について学ぶことができた。

対象演習：C

実 施 日：2019年9月4日(水)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美温泉海ホテル

実施内容：「宇佐美地区が今後発展していくためにはどうすればよいか」というテーマのもと、ヒアリングやフィールドワークを行い、得られた情報を基に根本ゼミとして政策提言を行った。

成 果：交流がなかった宇佐美地区の方とのつながりを作ることができた。また、今回の調査活動で得た知識や経験を卒業研究に活かすこともでき、研究内容を共有することで今後の活動の質の向上に役立てることができた。



【ゼミ合宿(宇佐美)の様子】

対象演習：A・B

実施日：2019年9月9日(月)

実施都市：東京都町田市

実施場所：j:comショップ小田急町田駅前店

実施内容：さがみはらスイーツフェスティバル第3回推し土産スイーツ総選挙のPRのためにj:comのデイリーニュースの生放送に参加した。

成果：ケーブルテレビを用いて地域を活性化する手法と影響力の大きさを学ぶことが出来た。またテレビ番組の生放送の裏側を知ることができた。

対象演習：A・B

実施日：2019年9月11日(水)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：相模原市役所

実施内容：さがみはらスイーツフェスティバル実行委員会に参加し、当該事業として行う企画の提案を行った。S-1グランプリ、かながわ屋での販売会についての動員計画を提出した。

成果：相模原市が事務局となっている事業においてイベントを行う際の必要事項や書類について学び、実際に作成するという経験を得ることができた。

対象演習：A・B

実施日：2019年10月2日(水)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：相模原市役所

実施内容：さがみはらスイーツフェスティバル実行委員会に参加し、S-1グランプリの反省と表彰式販売会、さがみはらフェスタの企画提案を行った。

成果：自らが企画した事業の振り返り反省を行った上で、続いて新たな企画立案を行う経験をすることができた。PDCAサイクルを回すという社会人として必要な習慣を短期間で経験することができた。

対象演習：B

実施日：2019年10月14日(月)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：そごう横浜店

実施内容：さがみはらスイーツフェスティバルのスイーツ限定販売会の参加し、昨年度入選商品のPRや販売補助を行った。

成果：当該商品について全く知らない人に商品を売ることの難しさを知ることができた。またイメージキャラクター「ミウル」の中の人として活動し、市役所職員の業務の幅広さを体感することができた。

対象演習：B・C

実施日：2019年10月17日(木)～20日(日)

実施都市：香川県高松市

実施場所：高松兵庫町商店街周辺

実施内容：地域通貨の有用性の研究に係り、地域通貨「めぐりんマイル」について商店街理事長や消費者などをヒアリングとアンケート、インタビュー調査を行った。

成果：インターネットや書籍ではわからない地域通貨「めぐりんマイル」に対する現地の声として「知らない」「活用方法がわからない」などを得ることができた。これをもとに仮説検証につなげることができた。

対象演習：C

実施日：2019年10月18日(金)～19日(土)

実施都市：香川県高松市

実施場所：高松兵庫町商店街周辺

実施内容：同時期にB生が行う、地域通貨の有用性の研究に係る地域通貨「めぐりんマイル」についての商店街理事長や消費者対象のヒアリングとアンケート、インタビュー調査のサポートを行う。

成果：ヒアリングやアンケート調査における注意点や注目点、集計の方法などを実体験を通して教えることができた。

対象演習：B

実施日：2019年10月24日(木)～28日(月)

実施都市：岩手県盛岡市

実施場所：肴町商店街・他

実施内容：地域通貨の有用性の研究に係り、地域通貨「MORIO-J」について商店街理事長や消費者などをヒアリングとアンケート、インタビュー調査を行った。

成果：「めぐりんマイル」とは異なり、「知っているが使わない」といった声を集計することができた。また、使っている方の金額等をもとに研究において地域通貨MORIO-Jの経済波及効果を推計することができた。

対象演習：A

実施日：2019年11月9日(土)

実施都市：千葉県銚子市

実施場所：銚子市青年文化会館・他

実施内容：現在のテーマである銚子の伝統の継承について、子どもを中心に市民の方々に現在行われているふるさと学習や取り組みをヒアリング調査することでより多くの情報収集を目指す。

成 果：ショッピングモールにてヒアリングを行ったところ、漁業に関してのふるさと学習があまり行われていないことがわかった。また、内容も市内で地域差があり、課題がいくつか発見できた。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年11月15日（金）

実施都市：東京都町田市

実施場所：j:comショップ小田急町田駅前店

実施内容：第三回推し土産スイーツ総選挙の結果発表と表彰式販売会のPRをデイリーニュース内で行った。番組内で入選商品の食レポのようなことを行った。

成 果：商品を自分で食べ、おいしさを視聴者にアピールすることの難しさを学ぶことができた。また、今の時代における効果的なPR手法を考える契機となった。

対象演習：A・B

実 施 日：2019年11月30日（土）

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：アリオ橋本

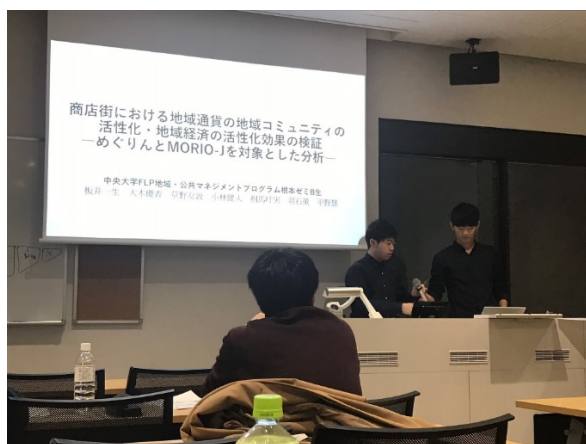
実施内容：第3回推し土産スイーツ総選挙表彰式販売会の準備運営撤去作業を行った。表彰式進行、抽選会の受付などを行った。

成 果：入選商品の販売店舗の方々の商品に懸ける思いなどを的確に消費者に伝える方法について考える機会となった。また消費者と直接かかわることで事業に関する意見を頂戴することができた。

<評価等>

四大学合同対抗ゼミナール大会 最優秀論文賞

期末成果報告会 パワーポイント賞



【四大学合同対抗ゼミナールの様子】



【サマースクール期末成果報告会の様子】

(6) 御船 洋 (商学部・教授)

FLP演習C

<テーマ>

地域経営と地方財政

<授業の概要>

各自、研究テーマを決め、研究内容および論文構成を検討し明確化したうえで、計画に沿って資料収集や分析等の準備を進めていき、4年修了時の卒業論文の完成を目指した。

<活動内容>

演習Cでは、毎回、ゼミ生が卒業論文の中間報告を行い、その報告をめぐってゼミ生全員で議論し、質疑応答や意見交換を行うことを通じて、論文内容の改善や修正に役立てた。そして期末に卒業論文を完成させ、それらを編集して論文集を作成し、全員に配布した。

卒業論文のテーマは、長野県における行財政改革、スノーリゾート地域におけるインバウンド・ツーリズムの発展とその持続可能性、調布駅付近連続立体交差事業を中心とした調布市の街づくりと財政、さいたま市を事例とした自治体の公共施設・インフラ老朽化問題、日本におけるソーシャルインパクト投資の可能性、ふるさと納税が地方財政に与えた影響の考察、調布市における財政と駅周辺開発の研究、水道事業の今後の在り方、日本における子どもの貧困、自治体のAIシステム導入の現状と展望、浦安市の財政分析と少子化対策、東京一極集中がもたらす弊害とその打開策等であった。

(7) 佐藤 修一郎 (理工学部・教授)

FLP 演習 C

<テーマ>

男女共同参画社会の実現

<授業の概要>

2014 年の出生率は 1.42 となり前年より降下した。生まれる子供の数も 1973 年に 209 万人、現在は 100 万人以下となった。日本の人口は 2008 年の 1 億 2808 万人をピークに減少となっている。2060 年の人口は 8000 万人になると推計されている。少子化は先進国に共通の問題とされているが、フランスのように克服した国もある。しかもフランスやヨーロッパではジェンダーメインストリームという考え方をとりながら少子化を克服している。日本の場合は、結婚、出産に対する価値観の変化や養育コストの増大などが少子化の原因とされている。

他方でいまだに役割分担意識が強く、子育ては女性の仕事という考え方も根強い。子どもの数や子育て世代の人口が減るとそれに伴って社会構造も変化する。小児科医のなり手が少なくなる、学校の統廃合が進むなど、子どもを育てることが困難な環境がますます進む。子どもを産み育てようという意欲自体もうすらぐ。少子高齢社会の最大の問題点は、労働力が少なくなる一方で、高齢者が増え、さまざまな対策（年金や医療費など）が必要になることである。少子化の問題は、女性が働き続けて晩婚化が進むことが原因といわれることがある。

しかし、女性も男性と同様に、もっている能力を活かして社会で活躍するのは当然である。

フランスでは女性の社会進出を支える政策を次々と生み出しながら、同時に少子化も克服した。そうした例に学びながら、少子化を克服しつつ真の男女平等社会をどのように確立したら良いかを考える。なお、演習の柱は、基本事項に関する講義、実態調査の準備と実行、調査報告書の作成、プレゼンテーションである。

<活動内容>

佐藤ゼミは、「男女共同参画社会の実現」をテーマとし、とくに「男女共同参画社会とワーク・ライフ・バランス」につき、研究を進めてきた。

今年度は、かかるテーマについての研究を総括する意味を含め、以下に示すとおり、日本経済新聞社及び日経 BP 社「日経 DUAL」が実施している「共働き子育てしやすい街ランキング 2018」において、全国 1 位を獲得した栃木県宇都宮市を対象として、実際に同市を訪れ、研究・調査及び、調査報告書の作成を中心に活動した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2019年10月29日(火)～30日(水)

実施都市：栃木県宇都宮市

実施場所：宇都宮市役所・他

実施内容：「市民まちづくり部男女共同参画課」、「子ども部子ども未来課」、「同子ども家庭課」及び「同保育課」において、聞き取り調査を実施した。また、宇都宮市内の「赤ちゃんの駅」を見学するなどのフィールドワークを行った。

成 果：1. 「市民まちづくり部男女共同参画課」においては、男女共同参画の推進に係る総合的施策の企画及び調整並びに調査・研究、男女共同参画政策の広報などを実施している。ヒアリングでは、同課の、男女共同参画の啓蒙についての活動や男女共同参画の推進の一環として実施されている男女共同参画推進事業者表彰（「きらり大賞」）を中心とした質疑応答を行った。今後の課題として、表彰制度の知名度アップの必要性が明らかとなった。

2. 「子ども部子ども未来課」においては、子ども部全体の施策や事業を統括する役割を担うとともに、主に青少年などの次世代支援を実施している。ヒアリングでは、「宮っこフェスタ」や「赤ちゃんの駅」事業、「家庭の日」の推進など、市民や地域の企業を巻き込んだ特徴的な取り組みにつき、質疑応答を行った。今後の課題として、とりわけ宇都宮市の特徴的なイベントであるである「宮っこフェスタ」において行われる「事後アンケート」の手法につき、改善の余地があることが明らかとなった。

3. 「子ども部子ども家庭課」においては、子育て相談、児童・母子・寡婦の援護・助成、児童手当・児童扶養手当の支給、妊産婦医療費・こども医療費・ひとり親家庭医療費等の助成、母子福祉資金・父子福祉資金・寡婦福祉資金の貸付、母子健康手帳、健康相談、乳幼児健康診査などを実施している。ヒアリングでは、子どもと親のための事業のひとつである「ママパパ学級」と「赤ちゃん訪問」に焦点を当て、質疑応答を行った。今後の課題として、「ママパパ学級」への参加の意義、及び、「赤ちゃん訪問」で得られた知見を地域における子育て支援にどのように生かしていくか、といった点が明らかとなった。

4. 「子ども部保育課」においては、教育・保育施設などの支給認定・入退所、利用者負担額（保育料）の徴収、保育指導などを実施している。ヒアリングでは、一時保育や休日保育など、多様な保育のサービスを提供している保育課の、それぞれの事業の利用状況や今後の展望について、質疑応答を行った。今後の課題として、かかるサービスの提供に不可欠な保育士の確保につき、潜在保育士の確保のためさらなる改善が必要であること、及び、高校生を対象とした、保育士を目指すことへの動機づけが求められることが明らかとなった。

5. いずれのヒアリングにおいても、資料の分析・検討のみでは獲得することの困難な、宇都宮市の取り組みの実態に触れることができ、大変に有意義な研究及び調査を実現することができた。

（８）天田 城介（文学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

<授業の概要>

現代日本社会において人びとが生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においていかなる社会的仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことが可能になったり、困難になっているのかを、インテンシヴなフィールドワークを通じて明らかにする。

演習Aでは、ゼミ生のそれぞれの問題関心を大事にしつつ、前期にサマースクールでの調査設計とフィールドワークの準備を行い、サマースクールではフィールドワークの実施・分析・考察・プレゼンテーションを遂行する。後期では、サマースクールのフィールドワークの追加調査を実施すると同時に、データ分析・データ解釈作業を行ったのち、期末報告会でのプレゼンテーション、最終報告書の作成を行う。また、可能であれば、八王子市・多摩市・日野市等々へのインテンシヴなフィールドワークを実施する予定である。これらの調査を通じて徹底的に分析・考究していくことになる。

演習は当該地域のテーマに関する基本文献の講読と同時に、受講生の研究発表を中心に進める。報告者・司会者・討論者といった役割を毎回決めて、受講生による主体的なゼミ運営を行う。

<活動内容>

前期には、9月17日（火）～19日（木）に実施された「中央大学FLP 地域・公共マネジメントプログラム2019年度サマースクール in 銚子」の準備のため、銚子市に関する先行研究をレビューしつつ、銚子市がまとめた各種報告書等を渉猟した。こうした文献レビューと同時に、研究計画書の作成、質問項目の設定、インタビュー対象者の選定などを行い、リサーチデザインを確定していった。並行して調査の準備も進めた。

その後、サマースクール調査の主題を「銚子市のふるさと学習における資源活用とその効果」とし、当該テーマを「ふるさと学習」と「地域への愛着形成」の視点から解説するという形で調査を設計した。こうした調査設計のもとでより緻密かつダイナミックな調査を行うための準備を進めていった。実際のサマースクールでは準備したインタビュー調査を実行し、その結果・考察・政策提言をサマースクール最終日の成果報告会で報告した。

上記調査の結果として、【1】銚子市におけるふるさと学習は、ジオパーク見学、醤油づくり体験、市民センターの講座開講、図書館でのイベントなどの既存資源を有効活用して子どもたちへの教育が行われていながらも、【2】受け手である子どもたちにとってのふるさと学習は、たしかに「土地・文化・経済・社会などに関連する郷土に対する誇り」といった抽象的な水準での愛着は形成するが、「人との関わりや生活インフラや雇用などに関連する地域への肯定的評価」の具体的・物理的な水準での評価には影響を及ぼしていないのではないか、

【3】こうした抽象的な水準での愛着を形成するだけでは定住志向は低い可能性が高く、定住志向を高めるには具体的・物理的な水準での肯定的評価を高めることが求められるのではないかと結論づけた。

加えて、上記に対する政策提言として、【1】銚子市の漁師と連携して「中学生漁師体験」などのような体験型学習を通じて中学生が具体的に銚子で働くことをイメージできるような取り組みを行うこと、【2】市民センターを活用して中高生がグループを組織して、主体的・能動的に地域貢献活動にコミットできるようにし、中高生たちが中心となってイベント等を行うことで、銚子市に対する人とのつながりを具体的に感受できるような取り組みを行うこと、【3】学校外での学びを深めるために図書館を学びの拠点としていくことを通じて、コミュニティを創出・再構築することを提唱した。

上記の結果を12月14日（土）の期末成果報告会で報告したところ、幸いにも参加してくださった方々からも高い評価を得ることができ、大変実りある報告会となった。

年度末はFLP報告書の作成を行うと同時に、2020年度より本格的に実施する東京郊外調査プロジェクト（八王子市・多摩市・日野市など）のフィールドワークを検討した。具体的には、東京郊外調査プロジェクトを当該自治体や支援団体と共同で進めながら、定期的に調査報告会を実施し、最終調査報告書として完成するための年間計画等を議論した。

全体としては、学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になったと思う。2020年度に本格的な調査プロジェクト始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2019年5月14日（火）

講演者：天畠 大輔 氏（日本学術振興会特別研究員）

演題：当事者の視点から解明されていく私たちの世界

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 3155教室

実施内容：発話困難で重度障害をもつ当事者として自らを対象に研究を進め、発話困難な重度身体障害者が通訳者とのコミュニケーションにおいてどのような自己決定をめぐる制度上・倫理上のジレンマを抱え込まざるを得ないか、そのようなジレンマのもとでいかなる自己決定のありようが求められているのについて先進的に研究を重ねてきた天畠大輔氏による講演を行った。FLP天田ゼミでは、多摩地区（八王子市・多摩市・日野市ほか）を対象地にした上で、当該地域で障害をもって生きる人たちがどのような困難を感受せざるを得ないのか、当事者たちはどのような運動や実践を展開してきたのか、地域で生きることはいかにして可能か等を検討しているため、2019年度第1回ゲスト講義として、天畠大輔氏による講演を行った。

成果：天畠大輔氏は社会学者として当事者研究の視点から当該テーマを分析してきた第一人者であることから、当事者として自らの現実を記述することの醍醐味や

困難について報告していただいた。今後のゼミでのフィールドワークを分析する上で大きな理論的な視点を提示していただいた。

F L P 演習 B

<テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

<授業の概要>

現代日本社会において人びとが生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においていかなる社会的仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことが可能になったり、困難になっているのかを、インテンシヴなフィールドワークを通じて明らかにする。

演習 B では、ゼミ生のそれぞれの問題関心を大事にしつつも、一年間を通じて多摩地区（八王子市・多摩市・日野市ほか）を中心とするフィールドワークを実施し、その分析・考察を繰り返し行い、適宜、発表を行っていく。これらの調査を通じて「生存の空間としての地域」というテーマを徹底的に分析・考究していく。演習は当該地域のテーマに関する基本文献の講読と同時に、受講生の研究発表を中心に進める。報告者・司会者・討論者といった役割を毎回決めて、受講生による主体的なゼミ運営を行う。

<活動内容>

前期は、共通する問題関心をもとに複数のグループに分けて、それぞれのグループごとで研究計画を作成し、調査対象者を選定し、実際に調査対象者に調査依頼をして調査を実行した。また、インタビュー調査のデータのコーディング作業を行って、詳細かつ緻密な分析作業をできるだけ丁寧に行うようにした。

具体的には、研究計画書の考え方や書き方などを学んだ上で、先行研究や各種資料等々をしっかりと下調べしながら、研究計画書を作成したのち、研究計画書を何度もブラッシュアップしながら、実際の具体的なフィールドワークでの調査計画を検討した。その後、質問項目の設定、インタビュー対象者の選定などをできるだけ丁寧に行った。

その後、各グループで「貧困家庭の子どもへの支援」「母子家庭女性への支援」「外国にルーツを持つ子どもたちへの支援」「知的障害者の自立支援」「被災障害者支援」「高齢者への小規模多機能ケア」「高齢者への看取りケア」などのテーマを設定し、具体的な調査設計のもとでより緻密かつダイナミックな調査を行うための準備を進めていった。こうしたインタビュー調査を実行し、前期終了段階でその成果を確認した。

2019 年 9 月 4 日（水）～6 日（金）において夏期フィールドワークを実施した。1 日目の 9 月 4 日（水）は、国立ハンセン病療養所菊池恵楓園を訪問し、長きにわたって入所者自治会の中心として関わってきた太田明氏（国立療養所菊池恵楓園入所者自治会副会長）にお話をお聞かせいただいた。2 日目の 9 月 5 日（木）は、地域における新たな高齢者ケアを構築してきた川原秀夫氏（NPO 法人コレクティブ理事長）ならびに宮川いつ子氏（NPO 法人おーさあ施設長）、被災者障害者支援センターくまもと事務局長の東俊裕氏（弁護士、熊本学園大学社会福祉学部教授）に講演していただいた。3 日目午前は、各グループにて、熊本県にて先進的・先駆的な取り組みを実践してきた、エンゼル子ども食堂、熊本県子ども家庭福祉課、

熊本市母子家庭等就業・自立支援センター、NPO 法人われもこう、ヒューマンネットワーク熊本のインタビュー調査を実施した。3 日目午後は、長期にわたって熊本の高齢者福祉や障害者福祉に尽力してきた小仲邦生氏（社会福祉法人ライン工房理事長）に講演をしていただいた。

当ゼミの今年度のテーマは「地域社会における差別と共生」である。熊本という「地方」で、「社会的マイノリティ」と称される人たちはいかに生活をしているのか、支援者は彼／女らをどのように支えているのかを分析し、地方と東京郊外との「地域」の差異を比較検討することで、「生存の空間としての地域」を考察する。こうした夏期フィールドワークで収集したデータを分析し、年度末にフィールドワーク成果報告書としてまとめた。

後期は、夏期フィールドワークの分析に加え、前期のフィールドワークの結果を踏まえ、新たに調査を設計し直し、実際のフィールドワークを実施した。後期後半からは FLP 報告書の作成を行うと同時に、2020 年度にさらに本格的に展開する東京郊外調査プロジェクト（八王子市・多摩市・日野市ほか）のフィールドワークについて検討した。具体的には、東京郊外調査プロジェクトを当該自治体や支援団体と共同で進めながら、定期的に調査報告会を実施し、最終的には調査報告書として完成するための年間計画等を議論した。

学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になったと思う。2020 年度にはさらに本格的な調査プロジェクト始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2019年9月1日(日)

講演者：桑畑 洋一郎 氏（山口大学）

演題：国立療養所沖縄愛楽園の現代史——ハンセン病者の生活実践

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 3103教室

実施内容：ハンセン病当事者の生活世界を詳細に記述・研究してきた第一人者である桑畑洋一郎氏に講演を行っていただいた。桑畑氏は長期間にわたり国立ハンセン病療養所沖縄愛楽園の調査研究を継続しながらハンセン病当事者の視点から地域社会の現実を読み解いてきたため、ハンセン病当事者の視点からみた地域社会とはいかなるものであるのかを考える重要な契機になった。ハンセン病当事者や家族の視点から「地域社会」の複雑な現実を考える講演となった。

成果：桑畑氏が長期にわたり一貫して関わり続けてきた国立ハンセン病療養所愛楽園を対象に、ハンセン病当事者とその家族がどのような生活実践を営み、他者とのコミュニケーションを営み、地域社会との関係を形成してきたのか等々の観点からの報告であった。本ゼミでは、地域で差別や抑圧を余儀なくされる人びとがどのような生活を営み、自らが支え合う実践を行っているのか等のフィールドワークを実施しているため、ハンセン病当事者や家族の視点からみた「地

域社会」の現実についての講演は学生たちに新たな研究視点をもたらすものであった。

対象演習：B

実施日：2019年9月4日（水）

講演者：太田 明 氏（国立療養所菊池恵楓園入所者自治会）

演 題：国立療養所菊池恵楓園自治会の歴史とハンセン病当事者の実践

実施都市：熊本県合志市

実施施設：国立療養所菊池恵楓園入所者自治会ホール

実施内容：太田明氏（国立療養所菊池恵楓園自治会副会長）は、長きにわたって国立療養所菊池恵楓園自治会に関わってきており、2003年11月に熊本県で起きた「ハンセン病元患者宿泊拒否事件」などでも地域社会からの差別や偏見と闘いながら、地域社会と新たな関係を模索してきた人物である。全国の国立療養所自治会の中でも恵楓園自治会は先駆的・先進的な活動を実践してきた。ハンセン病をめぐる差別と排除はいかなるものであったのか、当事者や家族はいかなる困難を生きざるを得なかったのか、その中でもいかに地域との新たな関係を構築してきたのか等について、きわめて貴重な講演を聞かせていただいた。

成 果：ハンセン病をめぐる差別、とりわけハンセン病国家賠償請求訴訟や家族訴訟などに対するいわれなき非難や差別に対する格闘や、その中でも地域と新たな関係を構築せんとしてきた実践について貴重な視点を学ぶことができた。また、このような差別や排除に晒されているがゆえに当事者間でも様々なコンフリクトが生じてしまう複雑な現実を知ることになった。「ハンセン病問題から見る地域社会」を考える上で大変貴重な講演となった。

対象演習：B・C

実施日：2019年9月4日（水）～6日（金）

実施都市：熊本県合志市

実施場所：国立療養所菊池恵楓園

実施内容：地域社会から差別・隔離されてきたハンセン病の歴史を語る上で欠かすことができないのが国立療養所菊池恵楓園の歴史とハンセン病当事者たちの実践である。そのため、2019年9月4日（水）に国立療養所菊池恵楓園のフィールドワークを行った。長きにわたって自治会に関わると同時に、地域社会との新たな関係を模索してきた太田明氏（国立療養所菊池恵楓園自治会副会長）をはじめ複数の当事者の話をお聞かせいただき、貴重な資料を参照することを通じて、「ハンセン病問題」から見えてくる「差別・排除と地域社会」について検討することができた。

成 果：本ゼミでは、地域で差別や抑圧を余儀なくされる人びとがどのような生活を営み、自らが支え合う実践を行っているのか等のフィールドワークを実施してい

るため、ハンセン病当事者の視点からみた「地域社会」の現実についての講演は学生たちに新たな研究視点をもたらすものであった。

対象演習：B

実施日：2019年9月6日(金)

講演者：小仲 邦生 氏（社会福祉法人ライン工房）

演 題：誰もが地域で生きること

実施都市：熊本県熊本市

実施施設：熊本市障がい者福祉センター希望荘

実施内容：小仲邦生氏（社会福祉法人ライン工房理事長）は、長きにわたり社会福祉法人リデルライトホームの施設長を務め、地域に根づいた高齢者ケアを展開してきた。現在は、社会福祉法人ライン工房にて障害者就労を地域社会のなかで支えている。このように熊本の高齢者や障害者や病者を地域で支えてきた小仲氏は、どのようなプロセスにおいて地域との新たな関係を構築してきたのか、その中での課題や困難はいかなるものであったのか、地域社会の可能性と限界をいかに考えるのか等々についてお話を聞かせていただいた。

成 果：本ゼミでは、地域で生きることを困難を余儀なくされる人びとがどのような生活を営み、自らが支え合う実践を行っているのか等のフィールドワークを実施しているため、高齢者・障害者・病者の支援の視点からみた「地域社会」の現実についての講演は学生たちに大変有益なものになった。

F L P 演習 C

<テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

<授業の概要>

現代日本社会において人びとが生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においていかなる社会的仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことが可能になったり、困難になっているのかを、インテンシヴなフィールドワークを通じて明らかにする。

演習 C では、ゼミ生のそれぞれの問題関心を大事にしつつも、一年間を通じて多摩地区（八王子市・多摩市・日野市ほか）を中心とするフィールドワークを実施し、その分析・考察を繰り返し行い、適宜、発表を行っていく。これらの調査を通じて「生存の空間としての地域」というテーマを徹底的に分析・考究していく。演習は当該地域のテーマに関する基本文献の講読と同時に、受講生の研究発表を中心に進める。報告者・司会者・討論者といった役割を毎回決めて、受講生による主体的なゼミ運営を行う。

<活動内容>

前期は、共通する問題関心をもとに複数のグループに分けて、それぞれのグループごとで研究計画を作成し、調査対象者を選定し、実際に調査対象者に調査依頼をして調査を実行した。また、インタビュー調査のデータのコーディング作業を行って、詳細かつ緻密な分析作業をできるだけ丁寧に行うようにした。

具体的には、研究計画書の考え方や書き方などを学んだ上で、先行研究や各種資料等々をしっかりと下調べしながら、研究計画書を作成したのち、研究計画書を何度もブラッシュアップしながら、実際の具体的なフィールドワークでの調査計画を検討した。その後、質問項目の設定、インタビュー対象者の選定などをできるだけ丁寧に行った。

その後、各グループで「貧困家庭の子どもへの支援」「母子家庭女性への支援」「外国にルーツを持つ子どもたちへの支援」「知的障害者の自立支援」「被災障害者支援」「高齢者への小規模多機能ケア」「高齢者への看取りケア」などのテーマを設定し、具体的な調査設計のもとでより緻密かつダイナミックな調査を行うための準備を進めていった。こうしたインタビュー調査を実行し、前期終了段階でその成果を確認した。

2019 年 9 月 4 日（水）～6 日（金）において夏期フィールドワークを実施した。1 日目の 9 月 4 日（水）は、国立ハンセン病療養所菊池恵楓園を訪問し、長きにわたって入所者自治会の中心として関わってきた太田明氏（国立療養所菊池恵楓園入所者自治会副会長）にお話をお聞かせいただいた。2 日目の 9 月 5 日（木）は、地域における新たな高齢者ケアを構築してきた川原秀夫氏（NPO 法人コレクティブ理事長）ならびに宮川いつ子氏（NPO 法人おーさあ施設長）、被災者障害者支援センターくまもと事務局長の東俊裕氏（弁護士、熊本学園大学社会福祉学部教授）に講演していただいた。3 日目午前は、各グループにて、熊本県にて先進的・先駆的な取り組みを実践してきた、エンゼル子ども食堂、熊本県子ども家庭福祉課、

熊本市母子家庭等就業・自立支援センター、NPO 法人われもこう、ヒューマンネットワーク熊本のインタビュー調査を実施した。3 日目午後は、長期にわたって熊本の高齢者福祉や障害者福祉に尽力してきた小仲邦生氏（社会福祉法人ライン工房理事長）に講演をしていただいた。

当ゼミの今年度のテーマは「地域社会における差別と共生」である。熊本という「地方」で、「社会的マイノリティ」と称される人たちはいかに生活をしているのか、支援者は彼／女らをどのように支えているのかを分析し、地方と東京郊外との「地域」の差異を比較検討することで、「生存の空間としての地域」を考察する。こうした夏期フィールドワークで収集したデータを分析し、年度末にフィールドワーク成果報告書としてまとめた。

後期は、夏期フィールドワークの分析に加え、前期のフィールドワークの結果を踏まえ、新たに調査を設計し直し、実際のフィールドワークを実施した。後期後半からは FLP 報告書の作成を行うと同時に、2020 年度にさらに本格的に展開する東京郊外調査プロジェクト（八王子市・多摩市・日野市ほか）のフィールドワークについて検討した。具体的には、東京郊外調査プロジェクトを当該自治体や支援団体と共同で進めながら、定期的に調査報告会を実施し、最終的には調査報告書として完成するための年間計画等を議論した。

学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になったと思う。2020 年度にはさらに本格的な調査プロジェクト始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2019 年 5 月 14 日(火)

講演者：天畠 大輔 氏（日本学術振興会）

演題：当事者の視点から解明されていく私たちの世界

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 3155 教室

実施内容：発話困難で重度障害をもつ当事者として自らを対象に研究を進め、発話困難な重度身体障害者が通訳者とのコミュニケーションにおいてどのような自己決定をめぐる制度上・倫理上のジレンマを抱え込まざるを得ないか、そのようなジレンマのもとでいかなる自己決定のありようが求められているのかについて先進的に研究を重ねてきた天畠大輔氏による講演を行った。FLP 天田ゼミでは、多摩地区（八王子市・多摩市・日野市ほか）を対象地にした上で、当該地域で障害をもって生きる人たちがどのような困難を感受せざるを得ないのか、当事者たちはどのような運動や実践を展開してきたのか、地域で生きることはいかにして可能か等を検討しているため、天畠大輔氏による講演を行ったものである。

成果：天畠大輔氏は社会学者として当事者研究の視点から当該テーマを分析してきた第一人者であることから、当事者として自らの現実を記述することの醍醐味や

困難について報告していただいた。今後のゼミでのフィールドワークを分析する上で大きな理論的な視点を提示していただいた。

対象演習：B・C

実施日：2019年9月4日(水)～6日(金)

実施都市：熊本県合志市

実施場所：国立療養所菊池恵楓園

実施内容：地域社会から差別・隔離されてきたハンセン病の歴史を語る上で欠かすことができないのが国立療養所菊池恵楓園の歴史とハンセン病当事者たちの実践である。そのため、2019年9月4日(水)に国立療養所菊池恵楓園のフィールドワークを行った。長きにわたって自治会に関わると同時に、地域社会との新たな関係を模索してきた太田明氏(国立療養所菊池恵楓園自治会副会長)をはじめ複数の当事者の話をお聞かせいただき、貴重な資料を参照することを通じて、「ハンセン病問題」から見えてくる「差別・排除と地域社会」について検討することができた。

成果：本ゼミでは、地域で差別や抑圧を余儀なくされる人びとがどのような生活を営み、自らが支え合う実践を行っているのか等のフィールドワークを実施しているため、ハンセン病当事者の視点からみた「地域社会」の現実についての講演は学生たちに新たな研究視点をもたらすものであった。

対象演習：C

実施日：2019年9月5日(木)

講演者：川原 秀夫 氏(特定非営利活動法人コレクティブ)

演題：熊本県における高齢者を支える地域福祉実践と震災後の支え合い

実施都市：熊本県熊本市

実施施設：特定非営利活動法人おーさあ

実施内容：川原秀夫氏(NPO 法人コレクティブ理事長)は、介護保険制度スタート前夜の1999年、熊本市小糸山町で小規模多機能ホームきなっせ設立し、それ以降、現在に至るまで、長きにわたって熊本県のみならず全国のグループホームならびに小規模多機能の先駆的ケアを牽引してきた人物である。また、NPO 法人おーさあを立ち上げ、健軍くらしささえ愛工房などの運営にも深く関わってきた。さらには、そのような地域実践をベースに、熊本地震の際には災害派遣福祉チーム・熊本県 DCAT として災害時要配慮者の避難所生活を支えた。このように熊本の高齢者を地域で支えてきた川原氏の講演は学生たちにとって現実のリアリティを知るきわめて貴重な機会になったと同時に、新たな地域実践の可能性と課題を深く理解するものとなった。

成果：本ゼミでは、地域で生活の困難を余儀なくされる人びとがどのようにして生存することが可能となっているのか、いかなる支援が展開されているのか等のフィールドワークを実施しているため、高齢者・障害者・病者などの社会的マイ

ノリティの支援の視点からみた「地域社会」の現実についての講演は学生たちに大変有益なものになった。

対象演習：C

実施日：2019年9月5日(木)

講演者：東 俊裕 氏（被災地障害者センターくまもと事務局長・熊本学園大学社会福祉学部）

演 題：災害と障害者——被災地障害者センターくまもとの実践と地域社会

実施都市：熊本県上益城郡

実施施設：被災地障害者センターくまもと

実施内容：東俊裕氏（被災地障害者センターくまもと事務局長、熊本学園大学社会福祉学部教授）は、熊本の障害者の自立生活を積極的に推し進めると同時に、国連の障害者権利条約特別委員会の政府代表団顧問を務めるなど精力的に活動してきた。現在は熊本学園大学社会福祉学部教授である。熊本地震発生により「被災地障害者センターくまもと」を設立し、事務局長として奔走し、熊本地震の際に多くの障害者を支え続けた。しかしながら、その組織運営は幾重にも困難を伴うものであった。なにゆえ、熊本地震で被災した障害者を地域で支える先進的实践を展開しながらも、その組織運営の継続が困難であったのか等々をお聞きすることは、学生たちにとって現実のリアリティを知るきわめて貴重な機会になる。

成 果：本ゼミでは、地域で生活の困難を余儀なくされる人びと、とりわけ被災して地域との関係が分断され、生きることの困難を余儀なくされている人々がいかにして暮らしているのか、そのような事態においていかなる支援が展開されているのか等のフィールドワークを実施しているため、高齢者・障害者・病者などの社会的マイノリティの支援の視点からみた「地域社会」の現実についての講演は学生たちに大変意味のあるものになった。

（９）新原 道信（文学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワーク／子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

<授業の概要>

①新原ゼミは、「3.11 以降」日本の地域社会でとりわけ求められている「社会のオペレーター（生活の場に居合わせ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと）」の育成をめざしています。担当教員の新原（専門は地域社会学と国際フィールドワーク）は、イタリア・日本などを中心とした世界の諸地域でコミュニティの現実（イタリアで30数年、神奈川・湘南地区で10数年、立川・砂川地区で10年弱など）とかかわってきた経験から、学生みなさんに“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／ひとに出会い、ともに場を創る力）”を伝えていきます。新原ゼミでは、短期的に地域と関わるサマースクールに加えて、長期的な〈地域との協業〉の試みである「立川プロジェクト」にも積極的に参加してもらうことで、卒業生は、地域社会の創り手のキーパーソンとなっていきます。

②「立川プロジェクト」は、2012年以降、立川の昭和記念公園に隣接する砂川地区で続けている〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の試みです。ゼミ生たちは、砂川地区の団地の運動会や夏祭り、防災ウォークラリー、ハヶ岳キャンプといったイベントのみならず、毎月の役員会など地域づくりの舞台裏にも参加させてもらい参与的な調査研究をしてきました。現在では、長期にわたる地域活動で獲得した信頼関係に基づき、砂川地区のコミュニティのなかで“社会の子どもたち”が巣立つ試み——お互いに学びあい、自ら学ぶ子どもたち（未来のコミュニティの担い手）が育つ／大人も育つという共創・共成型のコミュニティ形成——へと、協業の内容を少しずつ変化させています。

③2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢90名で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4 ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、銚子でのサマースクールと新潟県魚沼市でのフィールドワークを行い、世界における日本の地域社会を見つめなおしました。

<実態調査・見学調査・講演会>

A 生はサマースクールの準備に注力しましたが、B 新原ゼミ合同の新潟県魚沼市でのフィールドワークに参加した BC 生と認識を共有し、比較の視点を確保しました。

FLP演習B

<テーマ>

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワーク／子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

<授業の概要>

①新原ゼミは、「3.11 以降」日本の地域社会でとりわけ求められている「社会のオペレーター（生活の場に居合わせ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと）」の育成をめざしています。担当教員の新原（専門は地域社会学と国際フィールドワーク）は、イタリア・日本などを中心とした世界の諸地域でコミュニティの現実（イタリアで30数年、神奈川・湘南地区で10数年、立川・砂川地区で10年弱など）とかかわってきた経験から、学生みなさんに“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／ひとに出会い、ともに場を創る力）”を伝えていきます。新原ゼミでは、短期的に地域と関わるサマースクールに加えて、長期的な〈地域との協業〉の試みである「立川プロジェクト」にも積極的に参加してもらうことで、卒業生は、地域社会の創り手のキーパーソンとなっていきます。

②「立川プロジェクト」は、2012年以降、立川の昭和記念公園に隣接する砂川地区で続けている〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の試みです。ゼミ生たちは、砂川地区の団地の運動会や夏祭り、防災ウォークラリー、ハヶ岳キャンプといったイベントのみならず、毎月の役員会など地域づくりの舞台裏にも参加させてもらい参与的な調査研究をしてきました。現在では、長期にわたる地域活動で獲得した信頼関係に基づき、砂川地区のコミュニティのなかで“社会の子どもたち”が巣立つ試み——お互いに学びあい、自ら学ぶ子どもたち（未来のコミュニティの担い手）が育つ／大人も育つという共創・共成型のコミュニティ形成——へと、協業の内容を少しずつ変化させています。

③2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢90名で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の

外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切に、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4 ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、銚子でのサマースクールと新潟県魚沼市でのフィールドワークを行い、世界における日本の地域社会を見つめなおしました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2019年9月9日(月)～11日(水)

実施都市：新潟県魚沼市

実施場所：魚沼市内

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめた。地域ゼミ生は、銚子との比較研究を行いました。

FLP演習C

<テーマ>

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワーク／子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

<授業の概要>

①新原ゼミは、「3.11 以降」日本の地域社会でとりわけ求められている「社会のオペレーター（生活の場に居合わせ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと）」の育成をめざしています。担当教員の新原（専門は地域社会学と国際フィールドワーク）は、イタリア・日本などを中心とした世界の諸地域でコミュニティの現実（イタリアで30数年、神奈川・湘南地区で10数年、立川・砂川地区で10年弱など）とかかわってきた経験から、学生のみなさんに“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／ひとに出会い、ともに場を創る力）”を伝えていきます。新原ゼミでは、短期的に地域と関わるサマースクールに加えて、長期的な〈地域との協業〉の試みである「立川プロジェクト」にも積極的に参加してもらうことで、卒業生は、地域社会の創り手のキーパーソンとなっていきます。

②「立川プロジェクト」は、2012年以降、立川の昭和記念公園に隣接する砂川地区で続けている〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の試みです。ゼミ生たちは、砂川地区の団地の運動会や夏祭り、防災ウォークラリー、ハヶ岳キャンプといったイベントのみならず、毎月の役員会など地域づくりの舞台裏にも参加させてもらい参与的な調査研究をしてきました。現在では、長期にわたる地域活動で獲得した信頼関係に基づき、砂川地区のコミュニティのなかで“社会の子どもたち”が巣立つ試み——お互いに学びあい、自ら学ぶ子どもたち（未来のコミュニティの担い手）が育つ／大人も育つという共創・共成型のコミュニティ形成——へと、協業の内容を少しずつ変化させています。

③2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢90名で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大

学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切に、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、銚子でのサマースクールと新潟県魚沼市でのフィールドワークを行い、世界における日本の地域社会を見つめなおしました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2019年8月19日(月)～21日(水)

実施都市：新潟県魚沼市

実施場所：魚沼市内

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめた。地域ゼミ生は、銚子との比較研究を行いました。

対象演習：B・C

実施日：2019年9月9日(月)～11日(水)

実施都市：新潟県魚沼市

実施場所：魚沼市内

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめた。地域ゼミ生は、銚子との比較研究を行いました。

(10) 黒田 絵美子 (総合政策学部・教授)

FLP演習B

<テーマ>

地域文化振興の実践(2)

<授業の概要>

フィールドワークとして中心となるのが、9月にパルテノン多摩で行われる「パル多摩フェス」です。黒田ゼミが代々行ってきたスタンプラリーが主なイベントのひとつとなります。

4月の準備段階からパルテノン多摩のスタッフ(多摩市職員、パルテノン多摩事業部職員)との会議、実施に向けての企画・立案・準備、本番、実施後の反省会、といった流れで年間を通してゼミ活動を行います。

その他、演劇や古典芸能の公演が行われる劇場とその周辺環境の実態調査も行います。

<活動内容>

「パル多摩フェス」においては、ゼミ生企画「ぺたぺたカレンダー」を実施しました。手作りスタンプと台紙を準備して、フェスに参加した家族連れや子供たちにオリジナルカレンダーを作ってもらった企画でした。多数の来場者(主に小学校低学年以下の児童)から好評を博しました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2019年7月17日(水)

実施都市：東京都中央区

実施場所：銀座博品館劇場

実施内容：『グッドピープル』(ディビッド・リンゼイ＝アベア作 黒田絵美子訳)の舞台稽古を見学しました。

成果：演劇の上演直前の打ち合わせや舞台調整の様子、本番では見られない舞台稽古の様子を見学して、ひとつの作品が上演に至る直前の準備状況を舞台上のみならず、ロビーやチケット窓口に至るまで実態調査出来ました。また、劇場のある銀座という町の雰囲気に触れることも出来ました。

FLP演習C

<テーマ>

地域文化振興の実践(3)

<授業の概要>

「パル多摩フェス」の5年目となりますので、後輩への指導的立場で企画・実践に携わってください。また、プロデューサーや多摩市職員との密接な関係も築けている状況ですので、これを後輩たちにつないでいかれるよう、学外関係者各位とのさらなる共働に努めてください。要するに、「パル多摩フェス」に関しては、4年生は活動の中心となるよりは、監督的立場からB生へのアドバイスを行ってください。

皆さんの代の独自のプロジェクト（現在検討中）を緻密な実態調査を踏まえて完成させましょう。

<活動内容>

B生が中心となって行われたパル多摩フェスの「ぺたぺたカレンダー」企画を本番でサポートしました。また、卒業に向けてのゼミ論集を完成させました。

(11) 小林 勉 (総合政策学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林勉ゼミ演習 A では、4 月から 5 月までは課題図書の輪読を通じて基礎的な研究、調査スキルの習得を行い、その後は、連携して活動する地域・公共マネジメントプログラムのカリキュラムであるサマースクールの準備、調査、報告書の作成を行った。サマースクールでは、対象地域に対してその地域に関する問題を提起し、解決へ向けた政策の提言を目指し、とくに今年度は千葉県銚子市をフィールドに、現地の市役所、企業へのヒアリング等を行い、最終的にはそれらをもとにスポーツツーリズムによる地域活性化を提言した。

<実態調査・見学調査・講演会>

実施日：2019 年 9 月 17 日(火)～19 日(木)

実施都市：千葉県銚子市

実施内容：サマースクールでの現地フィールドワーク

実施場所：銚子市役所・他

成果：現地の観光振興の現状について踏査し、インバウンド促進および今後の銚子市におけるツーリズムめぐるプロモーションのあり方について政策提言を行うためのデータ収集を行った。

実施日：2019 年 9 月 27 日(金)～30 日(月)・2020 年 2 月 19 日(水)～21 日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：J リーグクラブであるブラウブリッツ秋田との産官連携事業「福たすプロジェクト」の準備および実施

成 果：J リーグ社会連携事業の先駆的モデルとして、全国ネットのテレビ番組や新聞
および秋田県内の各メディアにて取り上げられるなど、大学と J リーグが産官
共同で実施する連携事業として、広く情報発信することができた。

F L P 演習 B

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

スポーツによる地域活性化が日本各地で目指される中、本年度の研究対象地となった秋田県秋田市もその例外ではない。そのような地域の中で、実際のスポーツ振興はいかに実施されているのか。市民や市役所の担当者にヒアリング調査を行い、様々な視点からスポーツによる地域活性化の有り様について検討を行った。また9月にかけて行ったJリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトにおいては、現地のNP0や行政機関と協力し、秋田市の高齢者のコミュニティ形成を促進するプロジェクトを実施した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2019年3月29日(金)～4月2日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成果：連携する各ステークホルダーとネットワークを構築することができた。

対象演習：B

実施日：2019年5月10日(金)～12日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：本年度行うプロジェクトに関する概要説明を行い、それに対する意見交換を行った。プロの興行試合を実際に運営するクラブ経営側の視点からプロジェクトに対する貴重な意見を提示してもらったことで、プロジェクト準備を多角的に検討することができた。連携する各ステークホルダーとネットワークを構築することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年6月7日(金)～9日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：今後使用する施設の視察を行い、施設運営者に対してプロジェクトへの協力要請とヒアリング調査を行った。

対象演習：B

実 施 日：2019年6月13日(木)～15日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：連携する各ステークホルダーとネットワークを構築することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年6月20日(木)～23日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：連携する各ステークホルダーとネットワークを構築することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年6月25日(火)～27日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成 果：連携する各ステークホルダーとネットワークを構築することができた。

対象演習：B

実施日：2019年7月4日(木)～7日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成果：連携する各ステークホルダーとネットワークを強固にし、プロジェクトのビジョンを相互で共有することができた。

対象演習：B

実施日：2019年7月10日(水)～12日(金)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成果：連携する各ステークホルダーとネットワークを強固にし、プロジェクトのビジョンを相互で共有することができた。

対象演習：B

実施日：2019年7月25日(木)～30日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画・立案および連携する各ステークホルダーとのネットワーク構築

成果：秋田県庁や秋田市役所に赴き、プロジェクトが及ぼした効果や今後の課題についてローカル・アクターらと意見交換を行った。

対象演習：B

実施日：2019年7月29日(月)～8月3日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画およびイベント当日へ向けた準備

成果：連携する各ステークホルダーとネットワークを強固にし、プロジェクトのビジョンを相互で共有することができた。

対象演習：B

実施日：2019年8月5日(月)～11日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画およびイベント当日へ向けた準備

成 果：連携する各ステークホルダーとネットワークを強固にし、プロジェクトのヴィジョンを相互で共有することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年8月27日(火)～31日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画およびイベント当日へ向けた準備

成 果：連携する各ステークホルダーとの間で、プロジェクトの具体的実施計画を相互で共有することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年9月2日(月)～7日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画およびイベント当日へ向けた準備

成 果：連携する各ステークホルダーとの間で、プロジェクト当日のタスク一覧について最終確認することができた。

対象演習：B

実 施 日：2019年9月18日(水)～10月1日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの実施

成 果：数百名に及ぶイベント参加者に対して、円滑に各イベントを遂行することができ、その模様は各メディアにて大きく取り上げられた。

F L P 演習 C

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

スポーツによる地域活性化が日本各地で目指される中、本年度の研究対象地となった秋田県秋田市もその例外ではない。そのような地域の中で、実際のスポーツ振興はいかに実施されているのか。市民や市役所の担当者にヒアリング調査を行い、様々な視点からスポーツによる地域活性化の有り様について検討を行った。また9月にかけて行ったJリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトにおいては、現地のNP0や行政機関と協力し、秋田市の高齢者のコミュニティ形成を促進するプロジェクトを実施した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2019年9月25日(水)～29日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの企画およびイベント当日へ向けた準備

成果：連携する各ステークホルダーとの間で、プロジェクト当日のタスク一覧について最終確認することができた。

対象演習：C

実施日：2019年9月27日(金)～30日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：Jリーグクラブ・ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトの実施

成 果：数百名に及ぶイベント参加者に対して、円滑に各イベントを遂行することができ、その模様は各メディアにて大きく取り上げられた。

対象演習：C

実 施 日：2019年9月27日(金)～10月1日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：プロジェクトの活動報告を、プロジェクト・パートナーである株式会社ブラウブリッツ秋田に対し実施し、プロジェクト成果についてフィードバックを行った。

成 果：プロジェクトの構想段階から実施段階に至るまで、長期間に渡りコラボレーションした株式会社ブラウブリッツ秋田にプロジェクトの成果と感謝の意を伝えるとともに、来年度以降の連携のあり方について協議を行った。

(12) 関 有一 (総合政策学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

地域活性化

<授業の概要>

日本では今後とも人口減少が続くことが見込まれており、地方の衰退化に歯止めをかけることが大きな課題となっている。政府は、地方創生事業などの施策により地域の活性化策を展開しているが、総じてはかばかしい成果が上がっているようには見受けられない。地域を活性化させるために、行政の果たすべき役割はもちろん大きいですが、地域住民の取り組み姿勢も見逃せない。これまでの行政の様々な施策について検討するとともに、地域の活性化に成功したといわれる自治体の取り組みについて分析していきたい。

<活動内容>

地域活性化を図るための取り組みとして、サマースクールが予定されている銚子市での事前調査を行った。また、東京都への政策提言として、「誰もが集い、支え合う居場所があちこちに存在する」という課題を取り上げ、提言発表を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2019年7月30日(火)

実施都市：千葉県銚子市

実施場所：千葉県銚子市内

実施内容：市内の商店街の状況把握

成果：商店街の状況を視察し、商店街へのアクセスの問題などに気づくことができた。

F L P 演習 B

<テーマ>

市町村合併

<授業の概要>

平成の市町村合併により、市町村の数はほぼ半減となった。合併は大きく進んだわけだが、その背景事情を見るとともに、その推進力となった要素、消極的に働いた要素としてどのようなものがあったかを検討する。また、依然として小規模自治体もかなり存在している。引き続き人口減少が見込まれる中で、今後の自治体のあり方について考える。

<活動内容>

市町村合併によりどのような変化が生じたか、について検討を進めた。特に大きな自治体に吸収されるかたちとなった旧自治体住民の利便に悪影響が生じていないかを把握するため、印西市を訪問し、旧印旛村、旧本埜村の状況の把握に努めた。

また、東京都への政策提言として、「日本人と外国人が共に暮らす共生社会を築く」という課題について、提言発表を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2019年7月30日(火)

実施都市：千葉県印西市

実施場所：印西市役所

実施内容：市議会議員2人（旧印旛村、旧本埜村地域）から合併後の状況について説明を受け、質疑応答を含め、意見交換を行った。

成果：議員2人から、生活に関連した様々な事柄について説明を受け、合併後の自治体の抱える課題について、理解を深めることができた。

(13) 堤 和通 (総合政策学部・教授)

FLP 演習 A・B・C

<テーマ>

地域における犯罪予防と再犯減少策の調査研究

<授業の概要>

現行の制度によるものに加えて、犯罪要因について、地域の自治体や近隣地域、それに、児童福祉、家庭支援、精神衛生、教育など地域を拠点とする各機関が、どのように取り組んでいくことができるのかを考える。

<活動内容>

2019 年度には、サマースクールの調査・実施報告 (A 生)、WHO の保健衛生からの暴力予防論 (B 生)、卒論作成 (C 生) を主要な内容として活動した。サマースクールについては、災害後の避難時の安全安心をテーマに調査地である銚子市の防災体制を取り上げ、現地調査前には、国レベルの避難所ガイドラインと東日本大震災後の被災地の調査報告を参考に調査地の現状を検討するための知見を得て、サマースクールでは地元の協力を得て調査を進めたが、一方で、台風 19 号の影響で災害復旧の只中にあったために、一部の調査が実施できなかった。サマースクール後には、期末報告についてまとめ、その間、現地調査でかなわなかった部分の追加調査をメール等で行った。期末報告では、他のゼミからの意見がもらえ、現 A 生の今後の調査研究活動を含め、ゼミとして引き継ぐべき視点を確認できた。

WHO の報告書は 2002 年に公表された英文のものである。20 年近く前のものであるが、現在から将来にわたる社会安全政策にとって基軸となるアプローチを明確にした最初期の重要な文献であるので、報告書のうち重要な個所を中心に担当ゼミ生の日本語要約を手掛かりにゼミ生全体での知見の共有を図った。ゼミでの検討を反映した日本語版は共有できるかたちで保存している。

卒論は、C 生がテーマを選び、具体的には、高齢者犯罪の社会復帰、薬物乱用者の更生、犯罪加害者家族への支援、社会的養護における支援、立法過程の分析枠組み、を取り上げている。それぞれ、刑事司法上並びに執行後の支援策を孤立の概念を手掛かりに検討する、薬物乱用に関する在来刑事司法のアプローチとハーム・リダクションの考えの融合の可能性を検討する、加害者家族の現状について疎外の内在化からの解放という視点で検討する、社会的養護における支援を自立の概念の考察を中心に検討する、社会安全をめぐる知見が立法に集約される過程を検討する、というものである。2 月 5 日には学会部会 (警察政策学会社会安全教育研究部会) で一名が代表して卒論発表を行い、優秀賞を受賞した。

中央大学全学連携教育機構

本報告書に関してお気づきの点等ございましたら、全学連携教育機構事務室（多摩キャンパス 5 号館
ペデ下ー学生部学生相談室上）までお問い合わせください。

＜問い合わせ先＞

全学連携教育機構事務室

TEL:042-674-3663

FAX:042-674-3666

E-mail:flp-grp@g.chuo-u.ac.jp